

K - 512

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第15集

上沼川

第3次 発掘調査報告書

縄文中期の集落跡
古墳時代の方形周溝墓
奈良時代の官衙跡
近世・近代の屋敷跡

1986

米沢市教育委員会

上 渡 川

第3次 発掘調査報告書

昭和61年3月

米沢市教育委員会



▲古式須恵器出土の方形周溝墓



▲奈良時代の倉庫跡群



▲KY81大溝跡の大木横倒状態



▲近世屋敷跡出土の陶磁器

序 文

本報告書は、米沢市経済部農林課の新農業構造改善事業に伴って、本市教育委員会が昭和59年5月から11月にわたる一次、二次調査に引き続き、昭和60年4月から6月まで実施した第三次の上浅川遺跡緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

本遺跡は、標高356.5mの戸塚山東方山麓の浅川堤から長手萩の森にかけて広がる24万平方メートルと推定される遺跡である。周囲には荒屋遺跡、堂田遺跡、森合遺跡など戸塚山古墳群を中心とした2km範囲で、51ヶ所もの遺跡が密集する地域である。

遺跡は地元の皆さんによって発見され、縄文時代中期の遺跡として今まで注目されていましたが、昭和57から59年の分布調査によって、さらに古墳、奈良、平安時代と中世の遺跡も存在することがわかり、本調査によって江戸中期から明治の終りごろまでの遺跡も確認され、古代から脈々と続いている複合遺跡であることも知ることができた。

この調査の結果、出土した遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、木器、石器、菅玉、農耕具や種子などがあり、検出された遺構から、第一に縄文中期の竪穴住居跡が発見されているので、この地域にも4,500年前から人々が住んでいたことがわかった。第二に5世紀に造られたと考えられる方形周溝墓が注目される。溝内から出土の古式須恵器は東日本以外からの搬入品と見られ、当時中央と係わりをもった集団が存在したとも考えられる。第三には、8世紀ごろの掘立建物跡で、直径30数センチの柱と柱穴が検出された。この地方の官衙の倉庫跡と推定され、置賜郡衙に係わりを示すきわめて貴重な資料と考えられる。

本市教育委員会では、これらの貴重な資料を整理しながら、歴史と古代文化を探究し豊かな住みよい郷土を築くため、埋蔵文化財の保護保存にいっそう努力する所存である。

本調査にあたり格別のご指導ご協力を賜わりました文化庁、山形県教育委員会文化課、地元上郷地区史跡保存会、地権者及び梓川土地改良区並びに地区的皆様、さらに本市経済部農林課に対し、心から感謝申しあげます。

昭和61年3月

米沢市教育委員会

教育長 北口二郎

例　　言

1、本報告書は、米沢市経済部農林課の委託により、米沢市教育委員会が文化庁国庫補助を受け実施した米沢市大字浅川・新農業構造改善事業に伴う団体営圃場整備工事に係る上浅川遺跡の第3次緊急発掘調査の報告書である。

2、調査は米沢市教育委員会が主体となって、米沢市経済部農林課、山形県教育庁文化課との協議のうえ実施したものであり、期間は昭和60年4月10日～同6月30日までの延81日間であった。

3、調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 舟山文司 米沢市教育委員会社会教育課長

調査担当 手塚 孝

調査主任 菊地政信

調査副主任 村山正市、櫛爪 健

調査補助員 町田恵美子、我妻徳枝、小松佳子、高橋亜貴子、中島正己、龜田昊明

作業員 我妻益雄、佐藤庄作、後藤貞雄、伊藤清美、色摩正寿、原 三郎、樋口弥久、
鈴木 勇、関 昭司、渋谷武夫、遠藤利一、井上八郎、田中和行、佐藤峯雄、
遠藤昭一、本間宮之助、竹俣正四、北村 才、中島正行、星 喜一、今野吉男、
神保重男、高橋 孝、普後正敏、若林秀行、菅野芳春、藤田修司、増川吉彦、
稻生吉一、小平邦広、大山浩一、片山 健、夏堀重靖、小松 勝、北村和寿、
斎藤信也、佐地剛和、多田和弘、工藤伸司、淡地一友、宇部 太、三宅浩樹、
中村靖明、山際春樹、高橋義典、山谷 清、荒井順平、田中万博、金野 隆、
今泉 潤、伊田喜春、斎藤たつの、我妻とし子、黒田イセ子、藤倉オズズ、
黒田かつよ、山田みや子、鈴木チエ、加藤きみえ、手塚洋子、竹田まゆみ、
遠藤優子、神保ハナ子、蓮沼奈保子、加藤久美子、角屋みち子、斎藤トク、
佐藤みよし

事務局長 平間重光

事務局員 梅津幸保、竹田雅之、我妻重義、角屋由美子

4、調査にあたっては、加藤 稔、川崎利夫、星 宗男、伊藤 功、阿子島 功、梓川土地改良区、上郷地区史跡保存会、山形県教育庁文化課、米沢市経済部農林課、地元地権者の方々など

諸関係機関の協力を得ている。ここに記して感謝申し上げる。

5、本報告書に先立つ、昭和59年5月7日～同6月20日と昭和59年10月23日～同11月14日に今年度調査区の試掘調査とその東側の発掘調査を実施している。調査結果は「米沢市埋蔵文化財報告書第14集」『上浅川遺跡1次・2次調査報告書』として概報されている。

6、挿図縮尺は、遺構120分の1、60分の1、50分の1、40分の1、30分の1、土器実測図は4分の1、3分の1、陶磁器類は3分の1、2.5分の1、2分の1、1.5分の1、石器は1.5分の1、1分の1、木器は5分の1、3分の1、2分の1、拓影図は4分の1、3分の1とし、写真図版は縮尺不同とし、各々にスケールを示した。遺構平面図の方位記号は真北に統一した。

7、本報告書で使用した遺構、遺物の分類記号は、別記凡例による。

8、遺構等の図化は、「米沢市埋蔵文化財報告書第8集」の基本図化表に沿っている。

9、遺構等の土層については、『新版標準土色表』(小山、竹原1973)等を参考にした。

10、本報告書の作成は、菊地政信、村山正市、橋爪 健が担当執筆し、全体的に手塚 孝が総括した。トレース、図版作成、遺物整理等については、町田恵美子、米次典子、我妻徳枝が補助し、編集は手塚 孝、村山正市、責任校正は梅津幸保、竹田雅之が担当した。

11、本報告書作成にあたっては、山形県教育庁文化課、山形大学図書館、山形県立博物館、米沢市史編さん室、東北歴史資料館、奈良国立文化財研究所、酒造會州一藏館吉田雅行、朝農村文化研究所遠藤宏三、遠藤庄四郎、静岡県教育委員会、嘉穂町教育委員会福島日出海、西村昭二郎、水野哲、まんぎり会各位より御協力を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

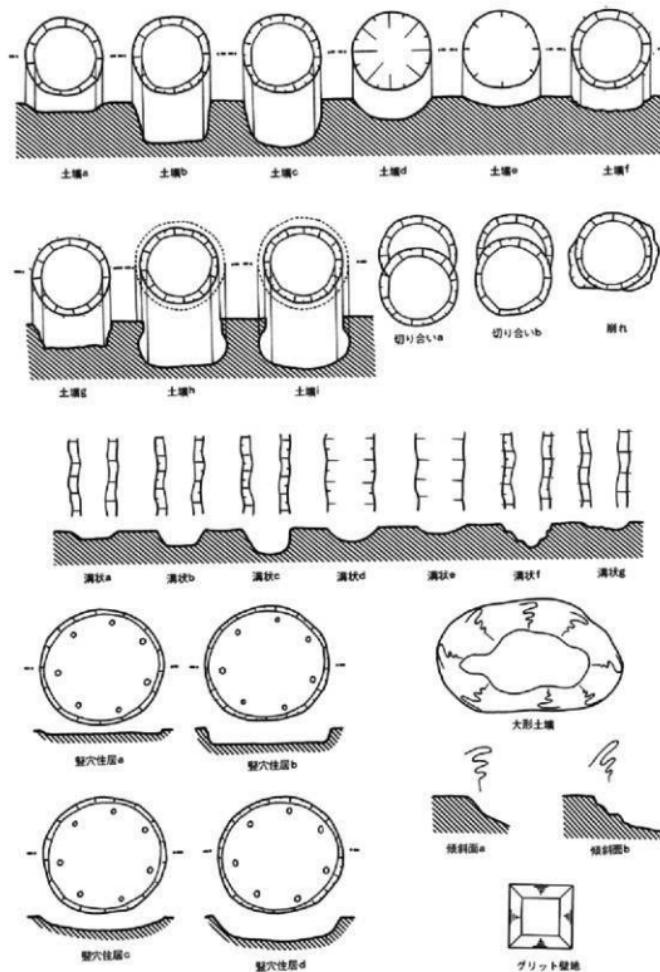
12、本遺跡より出土した遺物については、復元整理し、米沢市教育委員会（仮称）米沢市埋蔵文化財資料室において一括保管する。

13、馬糞資料については、東京都八王子市石川天野遺跡調査会の提供を得た。ここに記して感謝申し上げる。

例 言 II

1. 造構実測記号統一を図るため米沢市教育委員会は次の図化と名称を採用する。
2. 穴穴住居跡—4 グループに分ける。壁の深さが10cm未溝のもの『穴穴住居a』、壁の深さが10cm以上を有するもの『穴穴住居b』、壁の深さが10cm未溝で下場の確認の難しいいわゆるボール状をなすものの『穴穴住居c』、壁の深さが10cm以上で下場の確認の難しいいわゆるボール状をなすものの『穴穴住居d』とする。
3. 土壌—9 のグループに分ける。20cm未溝の浅豎形状をなすものの『土壌a』、10cm以上を有し豎形状をなすものの『土壌b』、底面がボール状で、豎形をなすものの『土壌c』、底面の不明な20cm以上のボール状をなすものの『土壌d』、20cm未溝の浅ボール状をなすものの『土壌e』、20cm未溝の底部位が不整をなすものの『土壌f』、底面が不整をなし20cm以上をなすものの『土壌g』、ラスコ状を有し底面が平坦をなすものの『土壌h』、ラスコ状を有し底面がボール状をなすものの『土壌i』とする。
4. 溝状造構—7 のグループに分ける。10cm未溝をなすものの『溝状a』、20cm以上をなすものの『溝状b』、底面位（下場）の確認が難しいものの『溝状c』、10cm以上の深ボール状をなすものの溝状d、10cm未溝の浅ボール状をなすものの溝状e、底面が不整形を有し10cm以上をなすものの『溝状f』、底面が不整形を有し10cm未溝をなすものの『溝状g』とする。
5. 2m以上の大形土壌や自然傾斜を有するものの『傾斜面a』、不整傾斜を有するものの『傾斜面b』とする。
6. 切り合い関係はBをAが切る場合『切り合いa』とし、AをBが切る場合『切り合いb』とし、崩れは『崩れ』とする。
7. 柱穴、ピット群は2の土壌の図化と同様に扱い、ただし土壌の20cm以上を10cm以上、20cm未溝を10cm未溝とし、堀立建物等の掘り方も同様に図化し、確認のための未完柱穴はその深さの図化で内部に『未』とする。

造構基本図化表



凡例 I

1、本教育委員会では、詳細な遺構・遺物を明確にするため、下記の記号を使用している。

A Y……列石遺構 B Y……掘立柱建物跡 C Y……配石遺構 D Y……土塙
E Y……土器埋設炉 F Y……不明遺構 G Y……地床炉 H Y……竪穴住居跡
I Y……石組炉 J Y……掘り方遺構 K Y……大溝跡・溝状遺構 L Y……土塙
M Y……埋設土器 N Y……三段塚 O Y……墓壇 P Y……ピット
Q Y……中世墳墓 R Y……古墳 S Y……集石遺構 T Y……柱穴
U Y……その他の塚 V Y……その他の遺構 X Y……自然遺構 W Y……礎石
Z Y……礎石建物跡 A N……焼土遺構 B N……窯跡 C N……穴窯跡
D N……井戸跡 E N……土塙 F N……館跡 G N……経塙 H N……庇
I N……畦状遺構 J N……窓 K N……水田跡 L N……畠跡
M N……方形周溝墓 N N……池 O N……杭・柵列 P N……Tピット
Q N……土器埋納遺構 R N……土器捨場状遺構 S N……河川遺構

A Z……土器 B Z……石器 C Z……碟器 D Z……鉄製品 E Z……石製品
F Z……土製品 G Z……木製品 H Z……陶磁器 I Z……自然遺物
J Z……骨角器 K Z……ガラス製品 L Z……繊維製品 M Z……石造物
N Z……漆製品 O Z……皮製品 P Z……表採遺物 Q Z……その他

M……墳丘 P……小ピット F……覆土 Y……床・底面

2、本報告書の執筆基準は次の通りとする。

- (1) 木器で使用したスクリントンは、砂目一黒漆、トーン一赤漆とした。
- (2) 柱穴の土層断面図で使用したスクリントンは、木柱が残るものを砂目、柱穴が明確なものにトーンを使用した。
- (3) 遺物実測図・遺物観察表中の遺物番号は共通のものである。
- (4) 遺物実測図には遺物の出土地と登録番号を付記した。
- (5) 土師器・須恵器に関する調整手法の基準は、「米沢市埋蔵文化財報告書第7集」『笹原』に、一部修正を加えたものを使用する。

本 文 目 次

序 文	
例 言 I・II	
凡 例	
1. 遺跡の概要	1
2. 調査の経過	2
3. 検出された遺構	3
(1)縄文時代の遺構	3
(2)古墳時代の遺構	6
(3)奈良時代の遺構	8
(4)近世・近代の遺構	14
4. 検出された遺物	20
(1)縄文時代の遺物	20
(2)古墳時代の遺物	23
(3)奈良時代の遺物	28
A. 出土土器	28
B. 出土木器	34
C. その他の遺物	37
(4)近世・近代の遺物	37
A. 出土陶磁器	37
B. 出土木器	42
C. 出土石製品	45
D. 出土金属製品	46
E. その他の遺物	46
5. ま と め	50
A. 縄文時代	50
B. 古墳時代	50
C. 奈良時代	51
D. 近世・近代	52
〈参考文献〉	

挿 図 目 次

第1図 上浅川遺跡第3次調査グリッド配図並に調査区全体図	54
第2図 上浅川遺跡第3次調査B区全体図(1)	55
第3図 上浅川遺跡第3次調査B区全体図(2)	57
第4図 上浅川遺跡第3次調査B Y11・12・13平面図	59
第5図 上浅川遺跡第3次調査B Y14平面図	60
第6図 上浅川遺跡第3次調査B Y15平面図	61
第7図 上浅川遺跡第3次調査B Y16・17平面図	62
第8図 上浅川遺跡第3次調査B Y18平面図	63
第9図 上浅川遺跡第3次調査D N 1平面図	64

第10図	上浅川遺跡第3次調査K Y81平面図(1)	65
第11図	上浅川遺跡第3次調査K Y81平面図(2)	66
第12図	上浅川遺跡第3次調査K Y86平面図	67
第13図	上浅川遺跡第3次調査C区全体図(1)	69
第14図	上浅川遺跡第3次調査C区全体図(2)	71
第15図	上浅川遺跡第3次調査C区全体図(3)	73
第16図	上浅川遺跡第3次調査B Y10平面図	75
第17図	上浅川遺跡第3次調査K Y49平面図(1)	76
第18図	上浅川遺跡第3次調査K Y49平面図(2)	78
第19図	上浅川遺跡第3次調査K Y49平面図(3)	80
第20図	上浅川遺跡第3次調査K Y49平面図(4)	82
第21図	上浅川遺跡第3次調査C区土壤平面図(1)	83
第22図	上浅川遺跡第3次調査C区土壤平面図(2)	84
第23図	上浅川遺跡第3次調査D区全体図(1)	85
第24図	上浅川遺跡第3次調査D区全体図(2)	87
第25図	上浅川遺跡第3次調査D区全体図(3)	89
第26図	上浅川遺跡第3次調査D区全体図(4)	91
第27図	上浅川遺跡第3次調査堅穴住居跡全体図	93
第28図	上浅川遺跡第3次調査HY 1平面図	94
第29図	上浅川遺跡第3次調査HY 2平面図	95
第30図	上浅川遺跡第3次調査HY 3平面図	96
第31図	上浅川遺跡第3次調査HY 4平面図	97
第32図	上浅川遺跡第3次調査HY 5平面図	98
第33図	上浅川遺跡第3次調査方形周溝墓全体図	99
第34図	上浅川遺跡第3次調査倉庫跡群全体図	101
第35図	上浅川遺跡第3次調査B Y 4平面図	102
第36図	上浅川遺跡第3次調査B Y 5平面図	103
第37図	上浅川遺跡第3次調査B Y 6平面図	104
第38図	上浅川遺跡第3次調査B Y 7平面図	105
第39図	上浅川遺跡第3次調査B Y 8平面図	106
第40図	上浅川遺跡第3次調査B Y 9平面図	107
第41図	上浅川遺跡第3次調査D区掘立柱建物跡柱穴土層断面図	108
第42図	上浅川遺跡第3次調査D区掘立柱建物跡柱穴土層断面図	109
第43図	上浅川遺跡第3次調査B・C区掘立柱建物跡柱穴土層断面図	110
第44図	上浅川遺跡第3次調査D区土壤平面図(1)	111
第45図	上浅川遺跡第3次調査D区土壤平面図(2)	112
第46図	上浅川遺跡第3次調査D区土壤平面図(3)	113
第47図	上浅川遺跡第3次調査流し場A・B・C平面図	114
第48図	上浅川遺跡第3次調査流し場D平面図	115

第49図	上浅川遺跡第3次調査近世屋敷跡平面図	116
第50図	上浅川遺跡第3次調査出土繩文土器拓影図(1)	117
第51図	上浅川遺跡第3次調査出土繩文土器拓影図(2)	118
第52図	上浅川遺跡第3次調査出土石器実測図(1)	119
第53図	上浅川遺跡第3次調査出土石器実測図(2)	120
第54図	上浅川遺跡第3次調査出土石器実測図(3)	121
第55図	上浅川遺跡第3次調査出土石器実測図(4)	122
第56図	上浅川遺跡第3次調査出土石器実測図(5)	123
第57図	上浅川遺跡第3次調査出土礫器実測図	124
第58図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(1)	125
第59図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(2)	126
第60図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(3)	127
第61図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(4)	128
第62図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(5)	129
第63図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(6)	130
第64図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(7)	131
第65図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(8)	132
第66図	上浅川遺跡第3次調査出土土器実測図(9)	133
第67図	上浅川遺跡第3次調査出土須恵器底部拓影図	134
第68図	上浅川遺跡第3次調査出土土師器底部拓影図	135
第69図	上浅川遺跡第3次調査出土土器拓影図	136
第70図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(1)	137
第71図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(2)	138
第72図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(3)	139
第73図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(4)	140
第74図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(5)	141
第75図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(6)	142
第76図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(7)	143
第77図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(8)	144
第78図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(9)	145
第79図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(10)	146
第80図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(11)	147
第81図	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器実測図(12)	148
第82図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(1)〔柱根〕	149
第83図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(2)〔柱根〕	150
第84図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(3)〔柱根〕	151
第85図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(4)〔柱根〕	152
第86図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(5)〔柱根〕	153
第87図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(6)〔柱根〕	154

第88図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(7)【柱根】	155
第89図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(8)【柱根】	156
第90図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(9)【馬糞】	157
第91図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(10)【馬糞組立図】	159
第92図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(11)	161
第93図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(12)	162
第94図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(13)	163
第95図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(14)	164
第96図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(15)	165
第97図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(16)	166
第98図	上浅川遺跡第3次調査出土木器実測図(17)	167
第99図	上浅川遺跡第3次調査出土漆器実測図	168
第100図	上浅川遺跡第3次調査出土ガラス瓶他実測図	169

付 表 目 次

第1表	上浅川遺跡第3次調査出土土器観察表	26
第2表	上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器観察表	47
第3表	上浅川遺跡第3次調査出土ガラス瓶観察表	49
第4表	上浅川遺跡第3次調査出土管状観察表	49
第5表	上浅川遺跡第3次調査出土古錢観察表	49

図 版 目 次

卷頭図版1	古式須恵器出土の方形周溝墓	
	奈良時代の倉庫跡群	
卷頭図版2	K Y81大溝跡の大木横倒状態	
	近世屋敷跡出土の陶磁器	
第1図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(1) (遺跡遠景, A区調査区)	
第2図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(2) (B区全景東側, B区全景西側)	
第3図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(3) (C区全景(↑南), C区全景(↑北))	
第4図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(4) (D区全景北側, D区全景南側)	
第5図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(1) (HY 1, HY 3~5)	
第6図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(1) (MN 1(↑東))	
第7図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(2) (RN 4, MN 1東側溝内遺物出土状況)	
第8図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(3) (MN 1東南コーナー部遺物出土状況, RN 2)	
第9図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(4) (RN 3, DY 24)	
第10図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(1) (KY81大木横倒状況, KY81大木横倒状況近景)	
第11図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(2) (KY49大木横倒状況, BY10, 19)	
第12図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(3) (BY 4~7 倉庫跡群, BY 9)	
第13図版	上浅川遺跡第3次調査の発掘(4) (TY 16, TY 2)	

- 第14図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(5) (T Y56, T Y49)
第15図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(6) (T Y51, T Y54)
第16図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(7) (G Z145馬歯出土状況, G Z146出状況)
第17図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(8) (G Z182土突き出土状況, A Z25出土状況)
第18図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(9) (A Z14出土状況, D Y3遺物出土状況)
第19図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(10) (K Y49遺物出土状況上層, 下層)
第20図版 上浅川遺跡第3次調査の発掘(1) (流し場跡全景(1), (2))
第21図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(1)
第22図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(2)
第23図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器, 石器, 石製品, 土製品(3)
第24図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(1)
第25図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(2)
第26図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(3)
第27図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(4)
第28図版 上浅川遺跡第3次調査出土の土器(5)
第29図版 上浅川遺跡第3次調査出土の墨書き土器
第30図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(1)
第31図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(2)
第32図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(3)
第33図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(4)
第34図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(5)
第35図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(6)
第36図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(7)
第37図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(8)
第38図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(9)
第39図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(10)
第40図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(11)
第41図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(12)
第42図版 上浅川遺跡第3次調査出土の陶磁器(13)
第43図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(1) (馬歛)
第44図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(2) (土突き)
第45図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(3) (円筒)
第46図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(4) (柱根)
第47図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(5) (柱根)
第48図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(6)
第49図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(7)
第50図版 上浅川遺跡第3次調査出土の木器(8)
第51図版 上浅川遺跡第3次調査出土の自然遺物

I 遺跡の概要

本遺跡は米沢市大字上浅川、同長手に所在する。標高356.6mの戸塚山が東に張り出す山稜と尾根の中間に中心に東に広がっている。遺跡の西側には山麓から流れでる水源を利用した、通称浅川堤がある。堤の東方を中心として分布し面積は約20万m²を有す複合遺跡である。現況は水田地帯であり、遺跡の東方約1.3kmに天王川(梓川)、西南約1.2kmに馬橋川が北流する。両河川にはさまれた台地には本遺跡の他に数多くの遺跡群が分布する。この事は河川の溢乱などによる影響が及ばない場所として原始古代より選出された地域であったことを示す。

遺跡の発見は、昭和20年代におこなわれた暗渠排水設備工事の際に偶然出土した土器がきっかけであった。この工事は手掘による作業であり、多くの人に注目された。この結果を明細に記入した図面も地元の人によって作成されている。その後、縄文時代の遺物出土地点が試掘され、縄文時代中期中葉の深鉢形土器が出土している。この時点においては、上浅川遺跡は縄文時代の遺跡としてだけ認識された。そして昭和50年山形県が発行した遺跡地図には試掘地点を中心に縄文時代の遺跡として登録している。この範囲は畑であったが、近年は水田に変貌した。

さらに、昭和57年～同59年に米沢市教育委員会が実施した分布調査により縄文以外にも古墳、奈良、平安時代、中世、近世、近代の遺跡も存在することが判明し、遺跡面積も25万m²に及ぶ事が確認された。本遺跡以外にも、戸塚山古墳群を中心に半径2km周辺だけでも51ヶ所の遺跡群が新たに確認された。これらの遺跡群より表採した遺物の吟味から古墳、奈良、平安、中世に位置する。周辺の遺跡について若干述べておく。

戸塚山古墳群があり、現存する古墳は195基。後世の土地利用により破壊された数を合せると推定で230基ある。9ヶ所の古墳群に分けられる。本遺跡の付近にある古墳群として、上浅川A古墳群、上浅川B古墳群、山崎古墳群が上げられよう。前二者は横穴式古墳、後者は竪穴式古墳群の形態を示す。古墳群の詳細な分布状況については、米沢市埋蔵文化財報告書第10集に記載されている。発掘調査が実施された唯一の古墳として戸塚山山頂古墳137号墳がある。主軸長24m、主軸方向N-86°-Wで前方部を西南西に向けた、二段構築によるいわゆる帆立貝形古墳である。調査結果については米沢市埋蔵文化財報告書第9集が昭和58年に発刊された。

昭和58年に、本遺跡を含む一帯が新農業構造改善事業の一環として団体営団場整備事業が着手する事になった。この為、米沢市教育委員会は、山形県教育庁文化課、米沢市経済部農林課と協議を重ね57年10月県文化課並びに圃場整備関係者立ち合いのものとに試掘をおこない、その結果をもとにして、上浅川遺跡緊急発掘調査を昭和59年から開始した。工事は2ヵ年に亘る事から最初は遺跡東方部を第一次調査として昭和59年5月7日～同年6月23日の延べ43日間を要して終了し、同年10月22日～11月14日の延べ20日間を今回の調査に先立って詳細な資料を得る為の試掘調査を実施した。

II 調査の経過

昭和59年の秋に実施した試掘調査を考慮して精査区を設定した。試掘調査の際に配したトレンドを基本に拡張区を定めグリット法を採用した。今回の第3次調査は、南北276m、東西128mと広範囲に及ぶことから北方よりA～Dの4区に分け調査を昭和60年4月10日から同年6月30までの日程で実施した。A区～D区の範囲については第1図上浅川遺跡第三次調査グリット配図を参照願いたい。グリットは $2 \times 2\text{ m}$ を最小単位として、 $8 \times 8\text{ m}$ を主要調査単位とした。

調査は重機による表土剥離をD区から開始した。D区は星敷跡と呼ばれる地点であり、当初から遺構が検出された。近世・近代に位置するもので覆土と地山の土色変化は明瞭であった。地山の土は微砂質粘土層で固く、晴れの日が続くと地割を生じる土質である事から表土剥離と同時に面整理作業を進めた。4月10日から4月13日まで一応D区の表土剥離、4月15日からC区の表土剥離を開始した。B区はすでに大形溝状遺構が試掘調査により確認されており、この遺構を中心拡張する。東西に横断する溝であり、グリット79～135～180～200の範囲を最終目標として4月18日まで表土剥離を実施した。B区はこの遺構（KY81）の掘り下げを中心に作業を進めた。

C区もB区と同様に大形状の溝状遺構が南北に継続しており、南側の一部は試掘の際に掘り下げられている。上浅川遺跡第1次、2次調査報告書に詳しい。B・C区遺構掘り下げ作業は湧水に悩まされ、水中ポンプによる排水と平行しての調査を余儀なくされた。また多量の流木群が遺構の全域に存在している事が調査の進行とともに明らかになっていった。

D、B、C区の順で表土剥離を実施し、A地点を4月20日から実施することになった。この地区は畠から水田に利用された事もあってすでに遺構は削平されたことが判明したことからトレンド掘により遺構残存を確認したがフレーク数点が出土しただけであり3日間を要して終了した。4月23・24日は雨天の為作業は中止したが、重機による作業は続行し、主にD区北側を拡張する。

この地点からは縄文時代の遺物が確認され4月25日に完形の土錐が出土した。この事から我々は住居跡の存在を意識して精査を繰り返した。がこの地点ではまだ明瞭なプランは把握できなかった。また、この地点の北方には黒色の覆土を有す溝状遺構で土器が混入している溝状遺構の一部を発見した。この遺構は調査の過程において方形周溝墓（MN1）と確認された。

4月27日からD区西側を拡張し、柱根が検出されたことからさらに拡張することになった。BY4～7の倉庫跡群であり5月1日にはBY8も確認した。D区は同一面に縄文、古墳、奈良、近世、近代の遺構が重複して検出されたのであった。5月7日は雨天で作業はできなかつたが、重機をB区に導入して大形溝状遺構が伸びる東側の表土剥離を開始する。この日は室内作業において墨書き3点を確認した。

5月8～10日までは晴天の日が続きB・C区は溝状遺構の掘り下げ、D区は近世遺構の掘り下げと順調に調査が進行していった。5月13日～5月18日の6日間も晴天が続き、前に述べた様な

土質であることから、水を散布しての作業となる。5月20日によく雨が降り、方形周溝墓のプランを確認することができた。写真撮影後、5月21日から掘り下げ開始する。重機は再び必要とするまで休みとした。5月25日にB区より馬糞が出土した事から取り上げをまえに中間報告会を5月29日に開いた。方形周溝墓も、セクション図作成を除きこの日までに終了した。

5月30日より再び縄文の竪穴住居跡のプラン確認作業を実施し、ようやく5棟の東西に隣接する住居跡群の全容を確認するに至った。6月1日より竪穴住居跡の掘り下げを開始する。一方B・C区においては、遺構の中心である大形状の溝状遺構の掘り下げも終了に近づき、この遺構以外の精査を進め、B区の西側を中心とする柱穴群、C区も南側に土壇と柱穴群を確認した。またB・C区の中間に縄文時代の包含層を確認した。この層は擾乱しており以前試掘がおこなわれた場所と推定した。再び重機を導入して写真撮影用タワーを設置する整地、残土の運搬を実施し、重機による作業を終了した。6月4日からすでに調査が終了した地域より遺構実測図の作成を開始した。特にD区は近世遺構の下面に奈良時代の遺構が存在している可能性も十分ある事から手掘りによって掘り下げB-Y9を確認した。6月15日にD区の調査を終了し、B・C区に集中して調査を進め6月25日にB・C区も完了する。6月26日に遺跡の全貌を写真撮影した。今回の調査面積はD区6,648m²、C区3,420m²、B区2,740m²、総面積12,808m²であった。6月30日の日曜日に現地説明会を開催し、上浅川第3次調査を終了した。

III 検出された遺構

第3次調査で検出された遺構は北側よりB区80基、C区86基、D区298基の計464基を数え、年代的にはおおむね縄文、古墳、奈良、近世・近代の4時期に大別できる。ここでは全体的な面で各時代の遺構、遺物を把握することによって、年代的な変遷と特徴を探りたい。

1 縄文時代の遺構 [第28~32図]

D区のグリッド95~106-127~136の範囲に位置する。東西方向に横一列に並んだ集落構成であり、東よりHY1、2、3、4、5と命名した。HY3、4は重複している。HY2は屋敷濠のKY77に南側半分を分断されている。また近代の暗渠排水路がHY2の東北壁面よりHY3の住居跡中央部分を擬断して設置され、この事業により一部破壊された。HY2、4、5の中央部にはKY99、100が東西に重複して横断する。これらの住居跡群は第III層を掘り込んで構築したものであり、年代は縄文時代中期中葉大木8a式に位置する。HY1~HY5の順で説明したい。

HY1 [第28図 住居跡出土土器 第48図1~6]

平面形状一指円形を呈し南北方向に長軸が求められ3.6m、東西3.3mを有す。壁はゆるやかに立ち上がり深さは15cmある。

柱穴一壁面付近にP1~P6を配す。17~23cmの外径であり、深さは平均27cmある。柱穴の間隔は0.7~1.5mと一定ではない。

炉跡—住居跡の南側壁面近くに位置する。梢円形に固くしまった焼土面を有し長軸70cm、幅60cmある。その焼土面には、I群b類に分類した深鉢形土器の底部が焼土上面より検出され、さらに南側へ20cm離れ土器が押し潰された状態で口縁部を東側に向けて検出された。炉は地床炉である。

遺物—は土器片7点、剥片2点、凹石1点がある。土器類はI群a類2点、I群b類が3点であった。剥片は焼成面を有すもので、二次調整は加えられていない。

床—平坦で比較的固くしまっている。粘土や石を敷きつめた痕跡は確認されなかつた。また壁下には周溝はなかつた。

覆土—3枚に分かれ、微砂質の土がレンズ状の堆積状況を示す。尚、炭火物は含まれていない。

HY 2 (第29図 出土土器 第48図7)

HY 1より南西方向2.2m離れた場所にあり、住居跡全体の2分の1が存在する。

平面形状—不整の長円形を呈すものと理解され、南北方向に長軸を有す。現長で2.7m、東西方向は3.8mを有す。壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは西側で8cm、東側と南側が10cmある。

柱穴—P 7～P 10が現存する。西側壁下付近にあり、平均20.5cm、深さはP 7が最も深く27cm他は18cm位である。東側の柱穴群はKY 99や暗渠により破壊がされたものと考える。

遺物—床面より凹石1点、土器3点、GY 2とした炉より土器2点、覆土より石匙1点が出土した。土器はI群b類に位置する。GY 2の出土の土器片は小破片であった。石匙は第50図の5で縦形剝片に簡単な調整を加えた整形である。IV群f類に分類した石匙である。

床—平坦であるが北から南側へ若干傾斜している。床面に焼土や炭化物は認められない。

炉跡—床面を掘り込んで構築され、長径55cmのほぼ円形を呈し、深さ30cmある。覆土は多量の炭化物が霜降状の堆積状況を示す。壁面は、焼成による焼土面は観察されなかつた。

覆土—2枚であり、微砂質の堆積土で占められる。平均的な流土による堆積状況を示す。

HY 3 (第30図 出土土器第48図8、9)

平面形状—長径4.15m、短径4.05mのほぼ円形であるが北側がやや張り出す。

壁—ゆるやかな斜面に構築され、深さは西側周辺が17cm、北側10cm、東側12cmと西側がやや深い。南側はHY 4と重複しており、HY 4の床面がHY 3より2～3cm深い。

柱穴—P 11～P 19の9本を配す。外径は平均25cmあり深さはP 16を除き30～36cmある。P 16の深さは7cmと浅い。柱穴はP 12以外は壁下付近に位置し、間隔は不規則である。

遺物—剥片4点(第51図4、5、6、7)、土器は16点出土しているが小破片で磨滅が著しく拓影できたのは2点だけであった。剥片に調整線はなく、焼成によるハジケ面を第51図6は有す。土器は2点ともIa類に細分した。

床—平坦でやや南側に傾斜している様だ。

炉跡—G Y 3としたもので、住居跡の南西部壁近くにある。長径45cm、短径40cmの長円形状に床面を掘り込んで構築されたものである。深さ25cmあり平坦な床面より焼土が検出された。焼土はH Y 1 焼土の様に固くひきしまったものではない。

周溝—H Y 1, 2と同様、確認されなかった。

覆土—1～6枚に分かれる。礫や小石は含まれないが微砂質層で占められる。東から西へ流土した土砂がブロック状に堆積している。

H Y 4〔第31図 出土土器第48図10, 11, 12, 13〕

平面形狀—長径5.15m、短径4.95mあり。隅丸方形状に近い形狀を有す。H Y 1～H Y 3よりやや大形狀を呈し、西側に隣接するH Y 5に大きさや形狀が類似する。

壁—45度の角度を有し、西側周辺で24cm、南側23cm、東側が13cmの深さを有す。

柱穴—壁下付近にありP 20～P 26の7本を配す。外径はP 26が最大で35cm、深さ15cm、P 23が最小で13cm、深さも13cmであり、他は20～25cmの範囲である。間隔は、一定ではない。

遺物—土器4点、石器はI群e類、VIII群j類、XI群e類各1点と剝片7点がある。土器はI群a類2点、I群b類2点と磨滅した土器破片が数10点検出された。

床—北側から南側へ若干傾斜しており、床面全体は、固くひきしまっている。

周溝—西北と南西にあり幅は15～22cm有す。東が3本に分れて構築され北から2.3m、10cm離れて、80cmの周溝さらに西南へ90cm離れて2.65mの周溝がある。深さは7～20cmあり、北側が深く南側が浅く、床面は凹凸状を呈す。

炉跡—住居跡中心のやや北側に位置するG Y 4である。平面形狀は長径37cmの円形を呈し、深さは21cmある。底面は平坦で若干の炭化物が検出された。壁面に焼成跡は確認されなかった。

覆土—3枚に分かれ北から南に流土した堆積状況を示す。3枚とも微砂質層で若干の炭化物と土器片を含む。

H Y 5〔第32図 住居跡出土遺物—第48図14～19、第51図1, 2〕

平面形狀—不整の円形状を呈し長径5.5m、短径5.2mある。北側と東側にやや張り出す。

壁—ゆるやかな立ち上がりで特に南、北が顕著である。深さは北側7cm、南側が削平面の為3cm。

柱穴—P 27～P 35の8本を壁面付近に配す。直径18～25cmあり深さ15～20cmと比較的浅い。

遺物—I群a類土器2点、I群b類土器4点と剝片2点、焼成面を有す礫3点が出土している。

床—北より南にやや傾斜しており、南側壁面には落ち込みに焼成面が認められた。

炉跡—長円形を呈すG Y 5で長径50cm、短径42cm、深さ10cmある。底面は平坦で焼成面を有す。

周溝—北東部と南側にある。北東部の周溝は「L」字型に曲り全長で3.4m、幅は15～20cm、

深さは5～10cmと浅い。南側の周溝は中央部が広がる。深さは、3～6cmある。

覆土—2枚に分けられ微砂質で炭化物を含む。北から南に流土した堆積状況を示す。

2 古墳時代の遺構

D区の拡張区92~114-130~142の範囲に集中する様に検出された。遺構はMN1とした方形周溝墓1基を中心に分布する土壤群、それに溝状遺構からなる。

A 方形周溝墓 [第33図]

主軸方向がN-44°-Wを有するもので、長径16.2m、短径16.1mとほぼ正方形状を示している。溝は米沢市万世町堂森の比丘尼平遺跡と同じ様に土壤状の穴を連結させて掘り込んでいる。そのため、溝の底面形状は不規則で深さも一定しない。それを前程に述べると北側溝は幅200cm~38cm、深さ10cm~38cm、南側溝は幅127cm~75cm、深さ12cm~34cm、東側は幅170cm~78cm、深さ21cm~41cm、西は170cm~78cm、深さ11cm~29cmとなり、各コーナー部が極端にすばまるのを最大の特徴となる。遺物は東溝の中央部から南寄りと北溝の中央から西寄りに集中して発見され、僅かに南溝の東側と西側の南寄りにも認められている。遺物の大半は土師器で占められるが、土質の関係もあって著しく磨滅し、さらに細片となっているために復元が困難であった。その他に、玉製の管玉13点が東溝内より、須恵器壺蓋1点が認められている。土師器は団化した1~13・31の14点の他に斐形土器を中心として10点ある。塼の特徴から関東地方の和泉1式、つまり東北南半の南小泉式に併行する。1の壺蓋は陶邑編年の1型式4段階に求められ、土師器と年代的にも一致する。搬入された古式須恵器はこれまでにも山形県内も含め東日本での各遺跡から不偏的に検出されているが、方形周溝墓からの発見は東日本では本遺跡が初めてである。管玉は硬質の碧玉と頁質の粘板岩とに分けられるが、これらはすべて失敗品や製作途上のもので占められている。さらに石材となる母岩や製作段階に打ち砕かれた剝片647点が溝内に廃棄された状態で検出された。この種の剝片は方形周溝墓の東側と南側からも多量に出土することから付近に工房跡的な製作場が存在した可能性もある。

B 主体部

方形周溝墓の主体部と思われるものは4基ある。中央から南寄に位置する東西長のDY30、南端のDY31、東側寄りのRN4、それに南北長となるDY29の4基である。いずれも縦長の楕円形プランを示し、DY30が長径328cm、短径90cm、深さ7cmと最も大きく、次いでDY31の長径238cm、短径は暗渠によって破壊されているので不明であるが、深さは5cmを測る。そしてDY29が長径188cm、短径59cm、深さ8cmで、RN4が長径150cm、短径58cm、深さ21cmをなす。

上部構造が失なわれているために埋葬施設を明らかにすることは不可能であったが、DY30の墓壙内的一部分に木棺の痕跡を残す凹みと木炭粒が部分的に認められている。明確な状況で検出された訳でないので、全般的な大きさは難しいが70×280cmの方形と推測できそうである。

遺物はRN4内から大形の壺形土器1点と塼形土器2点、土師器斐形土器の底部片2点が検出

されている。

C 土器埋納遺構

方形周溝墓のまわりに点在する土壙内には、夔形土器1点を底面に埋納する土壙状遺構が含まれている。米沢市の比丘尼平遺跡内からも方形周溝墓に併なって7基みつかっているが、そのうちの3基から完形の壺形、夔形、壺が発見されている。遺物の含まれていない土壙とは明らかに区別される様である。本遺跡からはRN1～RN5の5基が存在する。この中でRN4は方形周溝墓内部に設していることから、少し性格が異なるものと考えたい。

RN1は長径127cm、短径93cm、深さ11cmの梢円形プランを示すもので、底面から横倒する状態で図58-33が1点出土している。RN2は106×125cm、深さ18cm、RN3は98×122cm、深さ20cm、RN5が150×120cm、深さ10cmで不整の円形及び梢円形を呈する。遺物は夔形土器が横倒した形で認められたが磨滅が著しく、復元するのが困難であった。年代は図57-29と同じ様な夔形であり、方形周溝墓と同じ南小泉II式に求められる。

D 土 壤

方形周溝墓の東側、RN3に接するDY25、北側のDY23、離れて西側にDY35、DY32東端のDY24の5基がある。この中でDY24は長径230cm、短径210cm、深さ12cmと検出された土壙の内で最も大きく、内部より壺形土器(図16)、夔形土器(図17、図29)、環形土器(図21)が出土している。他の土壙はDY25から土師器器台の脚部(図22)が検出された以外は土師器破片数点認められたのみである。埋土は3～5枚程度すべてが自然堆積状況を示していた。形状は円形プランが多く、深さは5cm～15cmと浅いのが特徴であり、大きさもDY24を除く他は98cmから200cm位である。

E 溝状遺構

G104～113～138～145の範囲にかけて3基存在する。いずれも不規則で、深さも一定しない。KY83は方形周溝墓から西に10mといった所に方形周溝と平行する様に認められた。北側は調査をしていないので不明であるが、確認された部分について測ると23m、幅30cm～90cmで、交差するKY103を切る。深さは7cm～15cmと浅く、底面に沿って古式須恵器の破片20点検出し、その中には復元した図14の壺1点も含まれている。KY103は東側に約45°傾くKY83に切られたもので、南北からのびた溝がG109～142付近で変形しながら東側に曲するものである。幅は最大で190cmから47cm位であり、深さも7cm～18cmとなる。遺物は古式須恵器の壺破片2点と土師器片30点検出している。最後のKY73は長径1.52m、幅1.23mを有する東西長の短いものである。深さも13cmと比較的浅く、底面に張り付く様に磨減した土師器38点が認められた。土師器はKY103からも検出されているが、先のKY49、KY81他の様に大形溝状遺構とは異なり、文様の判別は不可能な程、磨滅が顕著であった。ただし、夔の口縁部調整や环類の破片から想定した場合、方形周

溝墓出土の土器群よりは一段階新しい時期に当る住居式に併行するものとみられる。

3 奈良時代の遺構

調査区全域に亘って普遍的に存在する。ことに大形溝状遺構は戸塚山の山裾からC区に入り小規模な蛇行を繰り返しながら、低地であるA区・B区になると数本に分離する。特にA区付近は顕著であり、昭和59年の調査では5本の溝状跡を確認している。このことはKY49と称す小河原が低地であるA区・C区で回遊する形となって数次の氾濫が生じたものと推測される。ゆえに建物跡に関してはA区には存在せず、B区も北東部にかけては無味である。奈良時代の遺構は溝の他にD区の西方と北東側、C区の南東側、B区の西側にかけ建物跡、土壙、井戸がみられ、全体的にはD区を中心とする配置関係を強くする。ここでは代表的な遺構を中心に述べてみよう。

A倉庫跡〔第34図〕

D区西地区からBY4・5・6・7の4棟が検出された。東西2間、南北2間で、純柱の掘立柱建物であることから、倉庫跡と考えられる。その配置は、北側からBY4・5・6の3棟が、南北一列に並び、BY7は、BY5の東側に配置されている。柱と柱の間尺は、ほぼ一定で、5尺等間(1.5m)、柱穴の掘り方は径30~50cm程の楕円形を主体とする。なお、BY7は、他の倉庫跡のように正方形を呈しておらず、むしろ長方形に近い形と考えられよう。

BY4の規模は東西3m×南北3.1m、建物の主軸方向は、南北軸としてN-17°-Eを示す。すべての柱根に根柢せの技法が用いられている。根柢せの刻み方向は、第41図に示すように礎の強い西側に多くみられる。刻みは、片側のみであった。

BY5の規模は東西3m×南北3.2m、建物の主軸方向は、南北軸としてN-15°-Eを示す。掘方の大きさは、径30~50cmと少し差がみられる。

BY6の規模は東西3.1m×南北3.1m、建物の主軸方向は、南北軸としてN-13°-Eを示す。TY21、24、25、27を除いては、全て柱根が抜き取られ、抜き取り痕だけが検出された。

BY7の規模は東西2.76m×南北3.8mと長方形を呈し、建物の主軸方向は、南北軸としてN-19°-Eを示す。TY29、32、33、35の4本には柱根が残っていた。

B掘立柱建物跡

BY8〔第39図〕

D区で検出された1間(1.7m)四方の小型の掘立柱建物跡である。建物の主軸方向は、南北軸としてN-13°-Eを示す。倉庫跡とはほぼ同一方向を示すことから、時期的にはほぼ同時期と考えられ、規模から槽の可能性を推定することができよう。

BY9〔第40図〕

D区南側中央で検出された東西、南側2間、北側3間(6.1m)×南北3間(6.6m)、建物の主軸方向は、南北軸N-8°-Eを示す。南北棟の掘立柱建物跡である。南側の柱穴は、1本で南へ張り

出している。柱根は、T Y49・51～55に全面刻みが入る根械せの技法を用いている。その中でT Y51、52は、大木を半裁し、両面整形したものである。根械せ技法を用いた柱根は、礎の強い西側に用いている。根械せの方向などは第42図を参照されたい。

B Y10〔第16図〕

C区東北部で検出された東西2間(4.4m)×南北2間(4.2m)、建物の主軸方向は、南北軸N—11°—Wを示す正方形の掘立柱建物跡である。柱と柱との間尺は8尺等間、柱穴の掘方は30～40cmと小さい。K Y49、F Y71の東側に建てられたものである。なお、その北側にも柱穴は数基確認されているが、建物跡とは断定できない。

B Y11〔第4図〕

B区西側で検出された東西3間(5.1m)×南北2間(3.6m)、建物の主軸方向は、南北軸N—26°—Wを示す。長方形を呈する東西棟の掘立柱建物跡である。掘方は径40～50cmの楕円形を呈する。T Y58、59には柱根の木質が残存していた。T Y59の柱根の大きさは径30cm(1尺)である。柱と柱の間尺は東西6尺等間、南北8尺等間であった。

B Y12〔第4図〕

B区、B Y11と重複して検出された東西3間(4.8m)×南北3間以上、建物の主軸方向は、南北軸N—36°—Wの長方形を呈する東西棟の掘立柱建物跡である。南東端、北東端の柱穴は、暗渠排水工事によって消滅したものと考えられる。掘方は径30～50cmの楕円形を呈する。

B Y13〔第4図〕

B区、B Y11・12と重複して検出された東西2間(3.2m)×南北1間以上、建物の主軸方向は、南北軸N—10°—Wを示す南北棟の掘立柱建物跡である。掘方は径30～50cmで、柱穴の大きさは、T Y63で30cm(1尺)である。また、T Y74からは、内黒土師器片が出土している。

B Y14〔第5図〕

B区西側で検出された東西3間以上×南北2間(1.8m)、建物の主軸方向は、南北軸N—23°—Eを示す南北棟の掘立柱建物跡である。同建物跡の柱穴を切ってD N 1井戸跡がある。このことからD N 1よりも古い建物跡といえよう。北側の柱穴は、黒色土の広がりと溝による傾斜によつて確認することができなかった。

B Y15〔第6図〕

B区、B Y12・B Y16の間に検出された東西2間(4.4m)×南北3間(3.5m)、建物の主軸方向は、南北軸N—27°—Wを示す東西棟の掘立柱建物跡である。掘方は径40～60cmの楕円形で、T Y102に柱根の木質部が残存していた。柱間は定かでないが、一応東西8尺等間、南北4尺等間の小型な建物跡である。

B Y16〔第7図〕

B区で検出された東西3間(4.2m)×南北3間(4.2m), 建物の主軸方向は、南北軸N-32°-Wを示す正方形の掘立柱建物跡である。T Y88には、柱根の木質部が残存していた。掘方の大きさは径30~60cmで、柱根の径は30cm(1尺)であった。柱と柱との間尺は東西4.5尺等間、南北は一定でなかった。

B Y17〔第7図〕

B Y16と重複して検出された東西3間(4.4m)×南北2間以上、建物の主軸方向は、南北軸N-30°-Wを示す掘立柱建物跡である。柱と柱の間尺は、南北4尺等間であった。東西に長い建物と想定される。

B Y18〔第8図〕

B区南辺中央よりやや西で検出された東西2間(5m)×南北1間以上、建物の主軸方向は、南北軸N-13°-Wを示す掘立柱建物跡である。柱と柱の間尺は、東西8尺等間、南北7尺等間であった。建物跡の一部しか、調査区内で検出されなかつたが、南北に長い大きな建物跡と推定される。

D区のB Y 9の周辺には、柱根と思われるものが多く発見されているが、それらは、近世の遺構で大部分破壊されているため、建物跡とするに至らなかつた。同じくB区でも多くの柱穴が検出されたが、建物跡に至らなかつたものがあつた。

B区で検出された掘立柱建物跡について、方位や柱穴の特徴からその変遷を試みた場合、B Y 13, B Y 14, B Y 18→B Y 12, B Y 16→B Y 11, B Y 15, B Y 17と考えられよう。D区のB Y 9は、B Y 13, 14, 18の時期の建物跡と考えられる。

C 井戸跡〔第9図〕

D N 1とした井戸跡は、B Y 14掘立柱建物跡の西桁行部に重複して検出された。B Y 14との前後関係はB Y 14の柱穴を切って構築していることから、B Y 14より新しいことがわかる。長軸1.2m、短軸1.04mの梢円形のプランをもち、確認面からの深さ1.3mを測る素掘りの井戸である。径44cmの平坦な底部から直立ぎみに立ち上り、底面より18cm上から開きぎみに直立する。

覆土は14層に分けられ、10層下から少量の土師器片と桃、胡桃などの種子や木製品などが出土している。土器は細片のため図示できなかつた。12層に付着している木製品は、木の皮が付着した自然の木片である。3・8・9層には、炭化物粒子が多く黒色を帯びた色調で、14層底面には砂質を帯びた土壤と礫が含まれていた。14層底面から木器が出土している。

D 大溝跡

B区から3条、C区から1条検出された。いずれも、小河川の蛇流によって形成された自然の大溝である。なお、ここでは、遺物が多量に出土した遺構について触れておきたい。

K Y49〔第17~20図〕

南北にのびる不整形状大溝跡で、最大幅9.7m、最小幅4m、深さ60cm～1.4mを測る。溝内の基本層序は7～8層に分けられる。4～6層にかけて遺物が多量に検出された。5・7層には草と思われる植物が約5cm程度の厚さで散乱していた。4層以下からは、胡桃、柄、团栗等の自然遺物が散乱している。2層目から胡桃、柄、团栗等の大木が横倒した状態で検出された。倒れた方向はほぼ一定方向を示していることや、部分的な焼跡、火災で起りやすい割れ口などから、台風あるいは、東北東の風が強い落雷によって倒れたと考えられる。遺物の出土は、おもに東端側に集中している。出土した遺物は700点以上あったが、図示できた遺物は土師器23点、須恵器27点であった。木器では、土突きなどが出土している。

F Y71

KY49の三日月湖でなかろうかと考えられる。最大幅8m、深さ30cmと浅い。出土遺物はほとんど出土しなかった。しかし、FY71出土の須恵器甌とKY49出土の須恵器甌が同一個体であったことから、KY49に合流する溝、もしくはKY49の三日月湖と考えられる。

KY81〔第10・11図〕

東西にのびる不整形状大溝跡で、最大幅10.4m、最小幅6m、深さ80cm～2.5m以上を測る。溝内の基本層序は7～9層に分けられる。2・4・8層には草と思われる植物が散乱していた。また、3層以下には、胡桃、柄、团栗、栗等の大木が横倒の状態で検出された。大木の中には、径1.6mを越える大木もみられ、年数にして300年は下らないと思われる。遺物は3層以下より約500点以上の遺物の出土があった。図示できた遺物は、土師器26点、須恵器3点である。木器では、牛耕用の馬鍬や弓等が出土している。馬鍬が検出された層位は6層であった。出土土器の中には、奈良時代以前の遺物も混じる。

なお、大木の横倒の方向は、KY49とほぼ同一方向であった。

KY82

北西から流れKY81に合流する大溝跡である。幅11m、深さ60～1.3mを測る。溝内の基本層序は5層からなる。2層以下から、径40cm程の大木が横倒した状態で検出された。KY82は、KY81に一部合流し、その他の一部は細い溝となってKY81の北側を流れKY85に合流する。出土遺物は、土師器壺1点である。

KY85

B区北東端で検出された大溝跡である。幅約6m、深さ60cmを測る。大溝跡の蛇行部分が検出されたとみられ、すぐ北向へ向う。大木が横倒した状態で検出されたほか、遺物はみられない。

E溝状遺構

KY86〔第12図〕

北西端のB区拡張から検出された溝跡で、幅2m、深さ46cmを測る。横断面はU字形を呈し、

7層からなる。出土遺物は、土師器片2点、須恵器片2点計4点であった。

F 土 壤

C区で16基、D区3基検出されている。C区の土壤は、南西部にDY1～DY6までの6基、BY10の東側にDY7～9まで3基検出された。D区では、方形周溝墓の西側に集中して検出している。いずれも浅く皿状を呈するものと、U字形を呈する二者がみられた。前者は、DY1～10・13・16・19・20・24・34、後者はDY17・27である。土壤のうち遺物が含まれたものについて述べてみよう。

DY1, 2, 3 [第21図]

この3基は南西部に集中して存在する。DY1は長軸164cm、短軸135cmで深さ20cmの長円形土壤である。5・6層の間に土師器片が4点出土した。DY2は長軸1m、短軸50cmを呈する隅丸三角形で、深さ6cmと浅い。土師器片1点が出土している。DY3は長軸114cm、短軸80cm、深さ14cmを測る長方形の土壤である。層位は4層に分けられ、3、4層からは、25点の土師器片が出土した。

DY4, 5, 6 [第21図]

いずれもC区南西端のピット群が点在する地域に分布する。径80cm代の小型の土壤で、楕円形を呈するものである。遺物の出土は無かった。

DY7, 8, 9 [第21図]

KY49の東、BY10の北東に点在する土壤である。DY7は径97cm、深さ20cmを測る円形土壤で、西北端に幅30cm程の自然礫が突き刺さった状態で検出された。遺物は、土師器片1点のみである。DY8は、長軸1m、短軸80cmを測る楕円形土壤である。土壤上面は、暗渠排水工事によって削平されている。DY9は、長軸176cm、短軸128cm、深さ26cmを測る長円形を呈する土壤である。

DY10 [第22図]

D区で検出された土壤で、長軸130cm、短軸77cm、深さ12cmを測る。土壤内からは、土師器片と3群の須恵器蓋が出土している。

DY13・16～19、20・27 [第22図]

これらの土壤は、C区東側に分布した土壤である。この中で、浅い皿状を呈するものとU字状を呈するものに分類できる。DY13は、長軸122cm、短軸77cm、深さ20cmを測る楕円形土壤である。DY16は、長軸121cm、短軸86cm、深さ16cmを測る。DY18は、長軸2m、短軸106cm、深さ28cmの不正長円形である。土壤内からは内黒土師器環、甕片17点が出土した。DY19は、長軸136cm、短軸120cmの円形土壤である。土師器片2点が出土した。DY20は、長軸1m、短軸80cm、深さ14cmの土壤で、土師器片1点が出土している。次に述べる土壤は、U字状のものである。DY

17は、U字状を呈する長軸104cm、短軸98cm、深さ18cmの土壙である。D Y 27は、長軸96cm、短軸67cm、深さ28cmを測る長方形でU字状を呈する土壙である。U字状土壙には、遺物は認められなかつたが、D Y 17の3層、D Y 27の4層に植物の炭化粒子が含まれていた。

D Y 34 [第44図]

D区より検出された土壙で長軸136cm、短軸86cm、深さ12cmの長方形でU字状を呈するものである。土壙内からは、2群E類の須恵器坏が出土している。

G その他の遺構

F Y 102

K Y 82の一部が細長く流れ、K Y 85に合流する途中で検出された深い土壙状の遺構である。径220cm、深さ96cmの規模をもつ。底部からは、當時水が湧き出ており、井戸跡とも思われたが、ここでは、K Y 82の細い溝に付随するものとして考えたい。出土遺物は須恵器片が1点出土したのみであった。底面は、丸みを帯びており、6層目（底部より25cm）より直立しながらも開がる遺構である。

以上のように、奈良時代の遺構について述べてきたが、一応ここでまとめておきたい。

倉庫跡については、4棟検出された。なお、倉庫について、川西町道伝遺跡出土の寛平8年銘の木簡を参照したい。木簡には「寛平8年計収官物□去七年料 本倉實五百冊□□」とあり、置賜地方の租税が考えられる。当時40束=1石であるから、540石とすれば21,600束である。本道跡検出の倉庫跡4棟ではほぼ収納できるのではないかと考えることができる。しかし、本倉だけとは考えられない事や租税を収納することができるのあって、納税させたものは、もっと多かったと思われる。掘立柱建物跡を含めて考えてみよう。同時期の遺跡は、米沢市中田篠原遺跡、米沢市八幡原No.30(竹井境A)遺跡がある。両者とも、検出された住居跡はすべて竪穴式の方形を呈するものであって、総て掘立柱建物跡は、現在のところ周辺では検出されていない。このようなことを考察すれば、官衙と考えられ、置賜郡衙との関連性の深い遺構であるといえよう。

井戸跡はB区より1基検出されたのみであった。これも、建物跡に付随する遺構である。

大溝跡は、B区・C区で検出された。いずれも、多量の自然木と遺物を含んでいる。自然木はいずれも、大溝の端に自然に繁殖したものが主体であった。これらの木は、台風あるいは落雷によって横倒したものと考えられる。遺物については、K Y 49の東側、K Y 81の南側に集中して出土している。これらの中には、自然に破壊して廃棄されたものの他に、人為的に壊しているものもみられた。これら人為的に壊した遺物の用途やその理由は不詳である。また、K Y 81からは全長150cm程の馬鉄と、弓が出土している。K Y 49の一地域に集中して墨書き器が出土していることや、K Y 81出土の弓は武具としての役割は果さないものと考えられ、溝の周辺で祭祀行事が行なわれた

と推察することができよう。

4 近世・近代の遺構

D区を中心として分布している。特に百姓屋敷跡と考えられる濠跡の内部に多い。百姓屋敷を構成する数多くの遺構が検出され、ことに流し場跡や濠跡などについては、その使用者の身分層あるいは日常生活をみい出すことができるようである。ここでは代表的な遺構について述べていこう。

A 濠 跡

D区南側で検出された。東西長52m、南側南北長40m、西側南北長60m、幅西側48cm、幅東北端2.8~4m、深さ50cm~80cmを測り、U字形を呈する。屋敷地および所有地の区画をするための溝跡である。また、周辺に水田が多いことから用水路的な役割を備えたものと思われる。近世・近代の出土遺物のうち4分の1以上が、同濠北側、KY76流し場跡の排水が入るところに集中していた。なお、時期的には百姓屋敷跡の構築とはほぼ同時期と考えられる。遺物としては元禄年間の初期伊万里のくらわんか手を始め、木柵、ガラス瓶など非常に多量である。

B 溝状遺構

溝状遺構はおもに屋敷地内で20基が検出されている。その多くは細長いもので、水路として利用された溝状遺構と用途不明のものとがあった。その他4基検出された。

K Y50

KY51から分岐してKY79流し場跡へ水を引く溝状遺構である。幅1m、深さ15cmを測り、屋敷跡のはば中央部を流れていたものである。遺物は出土しなかったが、KY51との切り合いがなかったことから、ほぼ同時期といえよう。

K Y51

D区西南部のKY77濠跡から水を引いてKY76へ流れる溝状遺構である。KY77濠跡の西側中央で分岐し東へ向う。この長さ6mである。そこでさらにKY50、51の2本に分岐され、KY50は南へ、KY51は北へ向う。長さ12mのところでクランクになり東へ向いKY76の流し場Bへ水を供給している。クランク点からKY76までの長さ14mで、全体的に幅80~120cm程度、深さ15~20cm程度と一定であった。出土遺物は総数19点、陶磁器13点、砾石6点が出土している。なお、陶磁器では細片が多く、図示できたものは2点にすぎない。

K Y58

KY61の東側より検出された南北に細長い小溝状遺構である。長さ1.6m、幅40cm、深さ8cmを測る。遺物は出土しなかった。

K Y61

D区南側より検出された南北に長い溝状遺構である。長さ5.6m、幅80cm、深さ10cmを測る。出

土遺物は、総数73点に及ぶ。K Y77に次ぐ出土量で、ほぼ完形に近い形の製品が多かった。その主体となすものは染付碗である。時期的には、元禄年間に九州肥後国で生産された初期伊万里のくらわんか手と呼ばれるものと古伊万里の碗が多く出土している。このようなことから、近世の溝状遺構の中でも最も古い時期の遺構と考えられる。

K Y68

K Y76流し場跡の南側で検出された細長い小溝状遺構である。長さ2.16m、幅40cm、深さ4cmと浅く細長い溝で東西にのびる。時期的には、K Y91によって一部破壊されていることから、K Y91よりも古い時期の溝跡と考えられるが、大幅な時期差は認められない。なお、遺物の出土はみられなかった。

K Y91

K Y76流し場跡の排水をK Y77濠跡へ廃棄するために設けられた溝状遺構である。長さ7.52m、幅4m、深さ35~60cmを測る。K Y77により傾斜するように造られている。遺構内で検出された自然礫、木製品などは、明治時代火災によって廃棄された時に埋められたものと思われ、礫の配置には統一性はなく、むしろ無造作に配置されていた。同遺構に残る木製品は、K Y76、流し場跡Cの部品である。

K Y100

H Y5の堅穴住居跡の南側から検出された東西に長い溝状遺構である。長さ1.28m、幅30cm、深さ4~7cmを測る細長い溝で、遺物の出土は認められなかった。切合が明確で、H Y5を切って、K Y77より切られている。K Y77濠跡が造られる以前の遺構といえよう。

C 流し場跡

遺構にしてK Y57、K Y76、K Y79の三ヶ所で、流し場升にして5ヶ所検出されている。居宅内の流し場はK Y76と考えられる。なお、この項では詳細には触れないため第40・47・48図を参照してほしい。

K Y57

D区南側の方形状を呈する深い遺構の中で検出された流し場跡である。長軸4.4m、短軸2.4m、深さ22cmを測る不整円形を呈する土壤状のものである。出土遺物は、陶磁器を中心として39点が出土している。流し場とするより、むしろ流し場に付随した浸透升と考えたほうがよいのであろうか。出土遺物の時期は、17世紀後半から19世紀前半に及び、遺構も、それと併行する時期と思われる。

K Y76

K Y77濠跡の南側から検出された遺構である。その中には流し場の洗い升が3ヶ所から検出されている。流し場Aは、長軸1.5m、短軸1.4mを測る梢円形のものである。升と思われる木製品

の一部が残存している。升は、板状の木材を丸い細木で支えたようなものであった。流し場Bは、長軸96cm、短軸80cmを測り、方形状を呈する流し場跡である。洗い升は方形を呈するものと推測される。洗い升は、この地方でカブネと称されている。流し場Cは、長軸1.46m、短軸80cmを測る。洗い升は、長軸1m、短軸60cmの長方形を呈する。洗い升の造り方は、四方を方形あるいは細丸い木に柄を握って板材を嵌め込む。そこで板材の外側に細木を埋め込み、その支えとしている。

流し場に付随する流し場Aと流し場Cの杭および木材は、水を流すU字状の管でなかったらうか。なお、KY76に関しては、流し場全体および周辺に付随する遺構を一括して分類している。

KY76に水を引く水路はKY51で、廃棄する水路はKY91であることを付け加えておく。

K Y 79

D区南側のはば中央で検出された流し場跡である。長さ5.4m、幅1mを測る長方形の遺構である。第40図では流し場Eと表示している。洗い升も長方形状に作られ、杭が9本残存していた。板材は、3枚出土しているが、この遺構に関連するものは、杭に付属している板材1枚のみである。

水を引く水路はKY51から分岐するKY50で、廃棄するための水路は、洗い場跡の所在するKY77濠跡へ流れる溝跡である。遺物は少量の陶磁器片と砥石の出土であった。居宅内の流し場と考えるより、升の長さや形から外に設置されたものと思われる。

D 洗い場跡

D区南北端、KY77濠跡の南端で検出された長い溝状の遺構である。長さ6.94m、幅1.38m、深さ70cmを測る。横断面形は丸みをもったV字状を呈し、水を溜るに適当な状態をもつ。溝状遺構とすべきところ、あえて、門跡の丁度北側で、濠跡の内側にあることから洗い場と考えている。なお、高台付の漆器木梳が2点出土している。両者とも、赤色を呈する漆が両面に塗られていた。破損しているところが多いことから、廃棄した遺物と考えたい。

E その他の遺構

D区南側に多く検出された方形あるいは長方形を呈する浅い土壙もしくは溝状を呈する遺構である。総数にして23基、特にKY57を中心として東西に分布する遺構は規模が大きい。

FY54は、長軸10.2m、短軸3.2m、深さ25cmを測る。FY93は、長軸8.6m、短軸3.9m、深さ22cmを測る不整形の遺構である。FY94は、長軸21m、短軸3.4m、深さ15cmといずれも大規模な遺構であった。

覆土の状態は、1層多くて4層に分けられる。しかし、いずれも、近世の遺構で確認された土質、土色と同じである。時期的には、近世から近代にかけての遺構であるが、年代まで把握するに至っていない。このような遺構が、どのような用途で使用されていたのかは、検討すべき課題であろう。なお、遺物はFY54より明治頃の製品と思われる陶磁器1点のみであった。

F 上浅川遺跡の百姓屋敷跡の変遷と年代について

上浅川遺跡出土の陶磁器は江戸時代以降のものである。そこで、D地区から検出された屋敷跡の変遷について、古文書、古図面を中心とする書類を参考にして、その使用者を浮き彫りにし、年代的位置づけをしてみよう。

この遺跡の所在するところは、旧屋代郷浅川村である。浅川村は、江戸初期に上杉領となつたが、領主などの諸問題が生じ、上杉領は15万石に減封された。それに伴い浅川村を含む星代郡は幕付直轄の天領となり、星代官所が支配するようになる。しかし、政治の変化や諸事情で幕府直轄の年と上杉弾正大弼預領の年とが入り混じる支配変遷であった。浅川村について最も古い記録として邑鑑がある。それによれば、村高397.38石で税率20%，戸数26軒内役家4軒、肝煎1軒、職人・寺・山伏・座頭・間駄共に21軒、人口は99人で内男15才～60才28人、男で坊主・山伏・座頭・老若共29人、女老若共42人である。元禄5年の浅川村検地水帳によれば、田畠屋敷合計都合79町5反8畝15歩、高合702石1斗2升三合六勺六才とある。

では、この遺跡から検出された屋敷跡について、各古文書からさぐってみよう。実際検出された屋敷跡は（第49図）に示す通り明治21年まで残っていた。屋敷面積約2,300m²で、屋敷の区画のため濠を廻している。濠の幅2m、深さ50cm～80cm程度、水田の用水路としても利用されていた。門は東向きで、主要道から門前まで幅1m50cm程度の私道がある。この私道は、今回の調査では不明確であった。屋敷内には3ヶ所の流し場をもち、門と堀をもつ屋敷跡である。以上屋敷面積や屋敷構成からみて、百姓でも格式のある屋敷であることが裏付けられる。

諸古文書や聞き取りによって、与右衛門の屋敷跡であることが明確になった。与右衛門について元禄5年の検地帳をひもといてみれば、上々田2畝14歩、上田1反23歩、中田5反16歩、下田1町1反8畝27歩、田合計1町8反2畝20歩、上畑2畝1歩、中畑1反8畝22歩、下畑2反21歩下々畑1反1畝22歩、畑合計5反3畝6歩、屋敷1反2畝28歩、合計2町4反8畝24歩の経営面積を有する。分米は、田18石9斗9升1合7勺、畑2石6斗6升8合3勺、屋敷1石3升4合7勺、合計22石6斗9升4合7勺、米俵にして55俵分である。当時の1石=2俵半=150kgであった。但、この石高は、検地帳の石盛から計算したものであるから、實際にはもっと収穫があったと考えられる。安永年間の検地帳には、検地竿手人の案内役を勤めている。このような事項から、百姓代相当の村役人になり得る格式のある屋敷であったことが伺われる。また、曹洞宗瑞雲院の筆頭として長年、惣代的な役割も勤めたという。

この事項や諸古文書による調査によって、次の事項が明確になった。

1. 元禄5年の検地水帳に南、屋敷1反2畝28歩 与右衛門とある。
2. 安永7年の浅川村新田検地帳に案内人として3名連名される1人に与右衛門とある。
3. 明治21年の字限図によれば宅地として示されている。

4. 明治34年4月調整の字限図他に宅地と畠に分筆している。

5. 明治44年6月に都村宅地から畠地へ地目変更。

6. 昭和14年11月に畠地から田地へ地目変更、現在に至る。

このようなことから、元禄5年にはすでに屋敷として存在していたことがわかる。出土陶磁器などから推察しても、初期伊万里のくらわんか手以降の製品が出土している。出土した陶磁器の中で、江戸初期に位置付けられる製品は片口1点であった。そこで、この屋敷跡が機転したのは、江戸中期の元禄年間以前から明治44年頃までと考えられる。その中で、屋敷が大型化したのは、出土陶磁器の量から推測して幕末頃であろう。明治44年に宅地から畠地に地目変更した理由は、火災によるということが言われている。それを裏付けることが調査によって明確になった。木本、特に梁や柱が焼けた状態で出土していることや、陶磁器の中に二次焼成によって変形したものなどが出土している。

調査によって検出された濠跡で東側の部分が明治21年の字限図には残っていない。その他は、昭和30年代の土地基盤整備（圃場整備）以前まで用水路として利用されていた。そこで、明治21年には、東側の濠は埋め立てられていたことがわかる。出土陶磁器からも、明治中頃のものは混在していないかった。流し場跡については、底面に自然礫を敷きつめ、楕円形状を呈するものと、土をかためた、やや方形を呈するものとがあった。時期的には大きな差はみられなかつたが、FY76がやや新しいものと思われる。それは、KY76から20世紀前半と推定される陶磁器が出土したことにある。流し場跡の変遷をしてみればKY57→KY76・KY79のようになる。流し場に付随するKY51等の溝状造構は、流し場への入水と排水用の溝跡で、時期的には、流し場跡とは同時期と考えられる。門跡は、FY53から出土した凝灰岩質の礎石から推定して、6尺四方の角材を用いたものである。コエダメについては、当時の便所として使用したものであろう。不明造構とした浅く大形の土壤は、時期的近世後半の造構であるが用途不明である。もし、酒造、醤油、みそ製造を行なっていたという言い伝えを信用した場合、梅を置く一段低い土間の可能性を考えられよう。

では、ここで屋敷跡の造構配置から平面図を想定してみよう。門は東向きで板塀を東・北・西に廻し、その前を濠が廻る。門のすぐ南側に足洗いや道具流いの池を配する。門を入れると北側に居宅が配され、北端に流し場がある。土蔵の配置は不明であるが、壁片が数点出土していることから南側に数戸あったろう。記録には残っていないが、もし、農業加工品を製造していたと仮定したら、調査区の南半に製造に関連した建物もしくは保管の建物が配置されていたであろう。

屋敷の面積は元禄5年頃に単なる高譜本百姓で1反2畝28歩の宅地であったのが、安永年間頃には、新田検地の案内役を勤める格式をもつようになり、本調査で確認された2,300m²と大規模な屋敷の地主的存在へと変化していくのであろう。

遺構別出土量の比較

総出土量

FY77 27%	FY76 17%	D区東 10%	D区南 9%	KY61 8%	D区 6%	D区北 5%	FY78 4%	KY53 4%	FY53 3%	その他 7%
----------	----------	------------	-----------	------------	----------	-----------	------------	------------	------------	-----------

陶磁器出土量

FY77 21%	FY76 17%	D区東 10%	D区南 10%	KY61 9%	D区 7%	D区北 6%	FY78 5%	KY53 4%	FY53 3%	その他 8%
----------	----------	------------	------------	------------	----------	-----------	------------	------------	------------	-----------

本製品出土量

FY77 78%	FY76 68%	KY68 68%	FY53 99%	KY53 99%	その他 6%
----------	-------------	-------------	-------------	-------------	-----------

器種ごと産地別出土数の比較

東その他、不明は、東北在地産

茶碗

伊万里 55%	相馬 7.5%	平清水 10%	切込 5%	不明、その他 33%
---------	------------	------------	----------	------------

皿

伊万里系 30%	相馬 7%	平清水 10%	切込 5%	不明、その他 57%
----------	----------	------------	----------	------------

片口・キッタ子

成島 70%	相馬 27%	不明 6%
--------	-----------	----------

徳利

平清水 55%	切込 10%	その他 15%	不明 20%
---------	-----------	------------	--------

IV 検出された遺物

今回の調査で得られた遺物の大半はKY49、DN1と言った遺構内部からの検出が圧倒的に多く、僅かにB区・C区に限り、縄文時代の包含層が認められたにすぎない。ことにB区・C区の大半を占める大形溝状遺構やD区の屋敷跡内は特に顕著である。ここでも前述と同様に年代順に沿って説明を加えたい。なお、検出された遺物の総数は自然遺物を除き3,079点となる。

1 縄文時代の遺物

A 出土土器〔第50図〕

D区のHY1～5の竪穴住居内、B・C区の包含層から検出されたもので総数278点ある。出土層がシルト質であることが影響して土器の磨減が著しく文様が判別できるのは15点にすぎない。この中で竪穴住居から検出された唯一の復元土器1点を含む18点を図化した。出土土器は年代によって縄文中期中葉と後期中葉の二者に大別され前者をI群土器、後者をII群土器と区分し、それぞれ文様構成の吟味からI群はa類・b類の2類にII群はa類・b類・c類の3類に分けた。以下、細部について述べたい。

I群 a類土器〔第50図2、4、8、9、11、12、14、16〕

大木8a式の中でも大木7b式に近い要素を持つグループを一括した。大木7b式のひとつの特徴としては、大木6a式より存在する交互刺突穴による文様表現が9、14に認められる。2条の沈線文を引き出した後に棒状工具を交互に施文し構成するものである。I群b類とした第50図1の鋸歯状は粘土紐を貼付した後に整形している。「の」字状突起を有して2条の沈線を口唇部に配する14も土器面交互刺突による鋸歯状を有す。口縁部がゆるやかな波状を呈す9も同様である。粘土紐を貼付したグループとして2、4、8、16があり8、16は撲糸压痕を施し、16は横位に8は渦巻に沿って配す。8の口唇部には複節压痕も見られる。粘土紐を貼付したものとして4、16があり前者は「X」字状、後者は「の」字状に配す。器面に施文された縄文は無節のR $\left\{ \begin{array}{l} \text{e} \\ \text{e} \end{array} \right\}$ を横位や斜に回転させたのが大半を占める。器形は深鉢形土器で口縁部がやや内反する8を除き外反を呈し口唇部形態は9に類似するが多い。

I群 b類土器〔第50図1、3、6、7、10、13、15、17、18、19、第21図版〕

大木8a式でも古手の土器群である。HY1出土復元土器は口径31.8cm、器高47.7cmを計り、折り返し口縁帶に三本多条單節撲糸压痕を縱位に施し胴部をL,R $\left\{ \begin{array}{l} \text{e} \\ \text{e} \end{array} \right\}$ の斜縄文を全面に施す。1は口縁部に方形状突起部を有し中央にコブ状貼付、突起した上端の内面は方格状の貼付を有する。口唇部と口縁部に貼付した山形文は一見鋸歯状的な特徴を示し、口唇部は棒状工具によるひきだし、口縁部はヘラ状工具による継ぎキザミを持つ。口縁部が外反する器形であり、口唇部突起部は4単位とみられる。斜位に施文された縄文はR $\left| \begin{array}{l} \text{e} \\ \text{e} \end{array} \right|$ の無節を転回している。10も口唇部に5本多条單節撲糸压痕を施し鋸歯状をえたもので口縁部付近に粘土紐を貼付してから鋸歯状に棒

状工具を用い交互に引き出した文様を表出したものが多く存在する。10は横位と縦位にも粘土紐を貼付し鋸歯状を加えたものである。13も粘土帯を貼付し、その間に撚糸を圧痕しその大半に弧状の沈線文と無節の縄文を施すもの。15は粘土紐を貼付し半截竹管を横走するものである。隆起線や沈線の組み合わせと、無節縄文を転回して文様を構成するもので6、7、18がある。口唇部内面に「の」字状突起を有す7は縦位の貼付文であり貼付器面に文様はなく沈線により区画した縄文と無文帯を有す。6は沈線と縄文だけが施されている。17、19は無節の縄文だけが施された粗製土器であり19には縦位の稜路を施す。

土器品

D区の豊穴住居跡付近より検出された。長さ3.5cm、中央部に最大幅を有し1.8cmを計り、重さは10gある。タマブ形状を呈し中央に幅1.5mmある一条の溝を配し中央部に径1.5mmの貫通した孔を持つ。大木8-aに比定される土錐である。

II群a類土器〔第51図20〕

加曾利B I式に位置する土器であり20の1点がある。口縁突起部タケノコ状を呈し内面口唇部に三本の沈線、口唇部側面は棒状工具による突孔により構成される。充満縄文を主体にした文様で沈線、縄文、無文帯が横走する。II群土器は米沢市大字赤崩の左沢遺跡に類例がある。

II群b類土器〔第51図21、26、28、29、30〕

加曾利B II類に比定する土器群であり、B・C区出土土器の中心をなす。文様構成は入組文中心で他に26、28、30の様に口唇部や口縁部に列点、棒状工具による連続刺突文を施すものもある。29は胴部が球形状を呈する小形の壺形土器であり入組文沈線の文様を有し、沈線内に赤褐色の彩色をなす。左沢遺跡でも同様な土器が出土している。

II群c類土器〔第51図23、24、25、31〕

器面全体を縄文で施文する粗製土器を一括した。器形は底部から斜に立ち上がる斜形状を有するものが多く、口唇部が器厚なものもある。地文となる縄文はいずれの土器片も磨滅が著しく縄文原体について詳細にすることはできないがR、L $\left\{ \begin{array}{l} \ell \\ \ell \end{array} \right.$ の単節や多条縄文が施文されていると考えたい。

B出土石器

总数で17点出土している。整形された形状や製作方法により6形態に大別できる。I群石器を石鎌、III群石器、石錐、IV群石器、石匙、VII群石器、スクレーパー、XI群石器、石核、XII群石器磨製石斧とした。分類は米沢市埋蔵文化財報告書第8集や12集を参照願う。

I群石器〔第52図1~4〕

有茎2点、無茎1点が検出され、4は茎がハジケにより欠損している。1は両面に一次剥離を残して縁辺より調整され、基部が内湾するタイプであり脚部は尖状を呈し垂直にのびる。内湾す

る石錐の脚部は内反、外反、垂直の三形態がある。ちなみに縄文時代早期、前期に位置する石錐は外反する形態が米沢では多い。I群e類に細別した縄文中期大木8a式の所産である。2は中央部に最大幅を有す縦長の菱形状を呈し基部は尖状に整形された有茎石錐である。茎部は断面が菱形で中央に棱線が認められるが先端は平坦である。3は紫色チャートを素材とし両縁辺が基部付近で張り出す形状を呈し、中央に後線を有す。I群g類とした、両者とC区包含層出土であり縄文後期加曾利BII式に比定される石錐だ。

III群石器〔第52図5〕

縦長の自然面を有す剥片を素材としている。縁辺調整を施した面は、自然面と一次剥離面の棱線がゆるやかなカーブをなすものあり、縄文前期に多い調整面が素材の剥片が類似する。作業縁辺は簡単な剥離調整を加えて整形し、打面付近に両縁辺より抉りを意図とした調整を施す。使用痕の観察から削る作業に使用された石器であり、手前に引く使用方向を示す。縄文中期の石匙であり、HY2より検出された。IV群f類に細類した。

VII群石器〔第52図6〕

素材に使用した縦長の頁岩は良質である。両縁辺の片面だけを整形した石器でありVII群j類とした。このタイプに類似するスクレーパーに縄文時代に普遍的に認められる。

XI群石器〔第53図1〕

豊穴住居跡の北方に隣接する方形周溝墓東側溝内出土であるが古墳時代の石核でないことがバテナの観察から判断できる。ハジケ面と自然面を有す石核残痕であり、XI群b類とした。

XII群石器〔第52図7・8〕

7は住居跡群地点より出土した。緑色粘板岩を短冊形に敲打と研磨によって製作されたものであり若干の敲打面を残す。石斧より鑿としての用途を持つ形状を呈す。長さ8.0cm、中央部最大幅2.7cm、頭部で2.2cm、厚さ1.1cm、重さ60gを計り、刃部は両刃形の形態を有す。XII群e類に分類した。縄文中期中葉に位置する。XII群f類に分類した8は頭部が欠損しており現長で5.5cm、刃部が最大幅であり3.8cmを計る。素材は緑灰色粘板岩を使用して整形する。C区包含層出土であり縄文時代後期加曾利BII式の所産である。

礫 器〔第57図1～6〕

豊穴住居跡内を中心に6点出土した。凹石3点、磨石2点、蜂の巣石1点がある。凹石、磨石は安山岩の河原石を素材とし、平面形状は楕円形を呈す。凹部は浅い。住居跡東側溝付近より出土した蜂の巣石は両面に多数の凹部があり、深さは0.8～1.2cmを計る。石材は凝灰岩性の偏平な自然礫を選択している。磨面を有すことから当初は石皿として使用し、その蜂の巣石の素材に転用している。凹部の底面は円形状、楕円形状を呈す。垂直及び斜の方向の棒状工具による回転作業によってできた形態を有す。この礫器の性格については今後の課題としておく。

2 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としてはD区のMN 1とした方形周溝墓の溝内及び周辺に分布する土壙内とB区のKY 81より認められたもので、土器群を中心に僅かの石製品が存在する。

A 出土土器〔第58図～第60図〕

方形周溝墓内出土土器を中心に39点を図化した。器形の吟味よりI群土器からVII群土器の7形態に大別し、細かな特徴からさらに数類にそれぞれ細分する。

I群土器

壇形土器を一括した。7点認められる。器形的には基本的に大差は生じないが、口縁部が「く」状に外反し、丸味を帯びた半円形状を呈するもの15a類、a類と類似するが、外反する角度が弱く、むしろ内部に顎者に認められるものb類17・71、口縁部が逆に内曲するものc類18、丸底から平坦な底部をもち、外広する胴部からさらに頸部が大きく外反するもので、一見環にもみられるものd類21、外反する口縁を境に丸味を有する底部が胴長に曲するもので、壇に近い器形を有するものの26e類、ポール状の底部が僅かに内凹する底部破片であり、桑山遺跡No.3の塊に類例を見ることができる。調整は内外面ともに口縁から口頸部を横位のナデ、体部を横位のヘラミガキを施すものが多く、他にハケやヘラ調整、ナデを用いるものもある。この種の土器が多量に検出されている桑山No.5遺跡と比較すれば、a類がa¹、b類がa²、c類がa³、e類がe¹類の塊に比定され、関東地方での和泉I・II式の特徴を呈し、東北地方では広義の南小京式に分類されよう。

II群土器

方形周溝墓の東側溝内から壇1点が検出されている。胴部から底部にかけて明瞭な球形状を呈するのが特徴で、上半部は欠損している。調整は磨滅しているので不明であるが、外面調整に関しては横位のヘラミガキを示している。

III群土器

方形周溝墓の主体部RN 4を含め10点検出されている。壇形土器とみられるものを一括する。a類一頭部から口縁部が直立する様に立ち上り、胴部上半に最大径をもつ壇形土器であり、9・30の2点が加わる。両者とも下半部が失なわれているので全体的な形状や大きさは不明であるが30に関しては器高が55cm前後を有するものと考えられる。調整は外面調整を斜位のハケメと横位のナデを用いているのに対し、30は1次調整のハケメからヘラミガキを丹念に加えハケメを打ち消すのが特徴となる。内面調整も同様の意図であり、9はハケメのd²とd³を施す。

b類一直角に立ち上る頭部が口縁部で強く外曲するグループであり、古手の器形をもつ。いずれも方形周溝内からの検出で6と8の2点がある。

c類～b類と同様に口縁部片に限られているので器形を推測することは難しいが、口縁部が「く」字状に外反し、胴部が球形に近いプロポーションを呈するものとみられる。114・111・119の3点

がある。調整は内外面ともにナデからハケメを施したものが多く、部分的にヘラミガキを有する114もみられる。

d類一壺形土器と推測される底部片を一括した。12・27・28の3点がある。

IV群土器

壺形土器の仲間を一括した。D Y23, R N 1, D Y24と言った方形周溝墓付近に点在する土壤内に埋納された完形土器の他に方形周溝墓やK Y81の大形溝内からも認められる。

a類一口縁部がゆるやかに外曲し、胴部が球形よりもタマゴ形に近いプロポーションをなし胴部最大径を胴部中央にもつ。29・33の完形と下半部だけの16の3点がある。調整は外面を29が横位のヘラミガキと斜位のナデから下胴部にかけてケズリを加えている。33は口縁部から頸部にかけての横位のナデから縦位のハケメを胴部全体に施す。16は磨滅によって、部分的にしか確認されないが、目の細いハケメを不定方向に加えているものとみられる。一方、表面調整は磨滅が著しく図化するのは困難であった。ただ16に関しては横位のヘラナデを底部に置き、胴部を横から斜位のハケメを施した様である。

b類一外に大きく外反する口縁部と頸部から胴上部にかけてふくらみをもたせ、そのまま底部に垂下する長身の器をもつ。D Y24の土壤内から1点だけ検出されている。32。調整は口縁部から頸部内外面を横位のナデ、胴部は磨滅が進行して不明であるが、全体をヘラミガキで用いた可能性がある。

c類一口縁部が強く外反し、器壁が厚いのが特徴となる。口縁部破片なので器形を想定することは難しいが、胴部が球形をなすI群c類に近いものと推測される。調整は外面が横位のナデから縦位のハケメ、内面は口縁部から頸部を横位のナデPをなす。方形周溝墓から検出された71点のみがある。

d類一壺形土器の底部と考えられるものを一括した。方形周溝墓内から出土した13、土壤内から検出した19・20それにK Y81の溝内から検出された116～119の6点がある。ただし、底部の立ち上りに丸味を有する19・20・116の3点については壺形土器の可能性も考えられる。

V群土器

壺器とみられる土器群を一括した。2点ありいずれもM N 1の方形周溝内からの検出によるものである。10は下胴部片で、桑山遺跡No.9の第2号方形周溝墓内から検出された壺と同じ器形を示すものであろう。31は斜位に立ち上る胴部が、頸部から口縁部にかけ水平に近く外曲し、一見古代の鍋風である。上半部のみしか発見されなかったが、おそらくは桑山遺跡のNo.5のe類土器と同形状を示すものとみられる。調整は10が内外面調整をハケメからヘラミガキを加えているのに対し、外面調整を横位のナデから斜位のナデ、内面はナデから横位のヘラナデをなす。

VI群土器

器台・高坏の仲間を一括した。M N 1 の方形周溝墓から 4 点、D Y 25 から 1 点の計 5 点が検出されている。すべて失損品であり、不明な点も多いが、脚部の広い器台及び高坏が大半を示しているものとみられる。a 類一腳部の中央に三孔を有する器台であり 1 点みられた。磨滅が著しく調整手法は明確でないが、内外面とも縫位のヘラミガキを施している。b 類 2 点ある。脚部の開きからみて短径の器台と考えられる。3 は磨滅のため不明であるが、4 は外面が細かな縫のハケメ、内部は指ナデとシボリがみられる。c 類唯一の高坏である。2 と同様に脚上端で坏部と接合し製作したもので、外に大きく聞く短径の高坏と考えられる。調整は縫のヘラミガキとハケメを脚部に坏部は横位のヘラミガキを有し、内面に関しては磨滅のため不明であった。

VII群土器

方形周溝墓の北溝内から 2 点、接する K Y 83 の溝内から 6 点の古式須恵器が検出され、復元したものは 1 の环蓋と 14 の厄 1 点であった。前者の环蓋は口径 136mm、縫径 140mm、器高 50mm で丸味を帯びた天井部、中央に縫があり、縫から口縁部にかけて直立する。陶邑編年第 I 型式第 3 ~ 4 段階の時期である。焼成、胎土から宮城県大連寺窯に近いと考えられている。厄は口径 130mm、凸線部径 82mm、頭基部径 57mm、体部最大径 157mm、現存器高 117mm を測り、体部は扁球状で、頭部は直線的に外反する。口縁端部の下位と凸線下位、体部中央に拂拭波状文を充填して全周する。胎土・色調とも良好である。時期的には陶邑編年第 I 型式第 4 段階併行。

B 古墳時代の石製品〔第 54 図 1 ~ 13・第 55 図 1〕

M N 1 の方形周溝墓東南側コーナー部覆土より検出され、管玉と砥石がある。管玉はすべて欠損品で占められるのが特徴だ。点数は、研磨痕のあるもの 13 点、石核 1 点、剥片 647 点、剥片形態はチップと呼ばれる 1 cm 未満が全体の 90% を占める。石材は緑色頁岩と緑色泥岩の 2 種類が使用され、前者の剥片は 572 点、後者は 75 点であった。管玉、砥石の順で以下に述べる。

第 54 図の 1 は緑色頁岩の石核残痕である。この石核から剥離された剥片を使用しているのは 2、4、8 ~ 11、13 の 7 点であり管玉の製作順序をよく表わす資料として注目したい。図に沿って若干の説明をすると次の様になる。2 は石核から剥離され長方形に整形された剥片であり研磨面は有していない。この剥片を縫邊から敲打による調整を加え 8 の形状に整形してゆく。次は 11 の様に多面体に研磨を加えながら丸い形状へと整形し 12 の段階までに仕上げる。ここで 12 に示したように両端面から穿孔する。その場合、目的とする穴の径よりもや大きな案内穴を設けて作業に入る様子が理解できよう。13 の穴の径は 0.18cm であり、この過程の失敗品であろう。まだ完全な丸い形状にはなっておらず穴の貫通後さらに最後の仕上げを行なうことを示している資料だ。

第 55 図 1 は灰色泥岩を素材として用い最大幅 0.1cm の刻線を全面に有す。尖状を呈す三角形状の縫邊には、敲打によって整形された痕跡を残す。2 は緑灰色泥岩の自然縫をそのまま石材として用いたものであり、片面にだけ作業面を有す。長期に渡って使用されたものではない。

第1表 上浅川遺跡第3次調査出土器物観察表

通し番号	器物番号	登録番号	出土地点	口径	高径	底径	外面調査	内面調査	断面調査	比率	分類	備考	
1	4128	A Z152	MN 1	13.5	5		ロクロ+g	ロクロ			BIV群+類	直筒器付器	
2	1893	A Z126	MN 1				マツツ不明+g ²	マツツ不明+g ²			BIV群+類	土器筒三足器	
3			MN 1				マツツ不明	マツツ不明			BIV群+類	土器筒器	
4	4109	A Z14	MN 1				マツツ不明+g ²	マツツ不明+g ²			BIV群+類	土器筒器	
5	1864		MN 1				マツツ不明+g ²	マツツ不明			BIV群+類	土器筒高杯	
6	1803		MN 1	11.5			1 ²	1 ²			BIV群+類	土器筒器上器	
7	4094		MN 1	20.6			1 ² +g ²	1 ²			BIV群+類	土器筒器上器	
8	1866		MN 1	18.2			1 ² +g ²	マツツ不明+g ²	1 ² +g ²		BIV群+類	土器筒器上器	
9	1842	A Z119	MN 1	12.2			1 ² +g ²	マツツ不明+g ²	1 ² +g ²		BIV群+類	土器筒器上器	
10	4004, 405		MN 1				1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ² +g ³ +g ⁴			BIV群+類	土器筒器	
11	1941		MN 1		8.2		g ² +g ³	1 ²			BIV群+類	土器筒器上器	
12	1971		MN 1		7		g ² +g ³	1 ² +g ²			BIV群+類	土器筒器上器	
13	1917		MN 1		7.6		1 ² +g ²	マツツ不明			BIV群+類	土器筒器上器	
14	4124	A Z1408	KY30	10.3			ロクロ+瓶底成段	ロクロ			BIV群+類	瓶底付器	
15		DY34	(M3)	6.2			マツツ部分不明+g ²	マツツ部分不明			B IV群+類	直筒器付器	
16	4300	DY34					マツツ部分不明+g ² +g ³	マツツ部分不明+g ² +g ³			BIV群+類	土器筒器	
17	4342-a	RN 4	14.7				マツツ不明	マツツ不明+g ²			B I群+類	土器筒器上器	
18	4342-b	RN 4	14.1	5.7			マツツ不明	マツツ不明			B I群+類	土器筒器上器	
19	4342-c	RN 4					1 ² +g ²	マツツ不明			BIV群+類	土器筒器上器底部	
20	4043		RN 4				7.2	マツツ不明	マツツ不明		BIV群+類	土器筒器上器底部	
21		DY34	14.1	4.9	5.2		1 ² +g ²	1 ² +g ²			B IV群+類	瓶底付器	
22	4276	DY25					1 ² +g ²	1 ² +g ²			BIV群+類	土器筒器	
23	1894	A Z122	MN 1				g ² +g ³	マツツ不明			B IV群+類	直筒器付器	
24	1067	A Z6	DYK				マツツ不明+g ²	1 ² +g ²			C IV群+類	土器筒器	
25	1802	A Z7	DYK				マツツ不明+g ²	1 ² +g ²			C IV群+類	土器筒器	
26	1288	A Z17	DYK	11.4	(8.1)		1 ² +g ²	1 ² +g ²			B I群+類	土器筒器	
27	4042	DYK			3.4		マツツ部分不明+g ²	1 ² +g ²			BIV群+類	土器筒器底部	
28	620	A Z7	DYK				1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ²			BIV群+類	土器筒器底部	
29	1841	A Z128	DY34	16.2	26	7	マツツ部分不明+g ² +g ³ +g ⁴	マツツ部分不明+g ² +g ³	マツツ部分不明+g ² +g ³		BIV群+類	土器筒器	
30					23		1 ² +g ² +g ³ +g ⁴	1 ² +g ² +g ³ +g ⁴	1 ² +g ² +g ³ +g ⁴		BIV群+類	土器筒器	
31	1894	A Z122	MN 1	42.1			マツツ不明+g ²	マツツ不明+g ²	マツツ不明+g ²		BIV群+類	土器筒器	
32	1840	A Z117	DY24				マツツ不明+g ²	マツツ不明+g ²	マツツ不明+g ²		BIV群+類	土器筒器	
33	1607	A Z51	RN 1	16.1	29.1	7	1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ² +g ³		BIV群+類	土器筒器	
34	2533	A Z6	KY49	14	4.9	6.9	ロクロ	1 ² +g ² +g ³ +g ⁴	1 ² +g ² +g ³ +g ⁴		C	B1群+類	土器筒器付器
35	2567		KY49	12	3.6	7.7	ロクロ+g	1 ² +g ²	1 ² +g ²		B	B2群+類	土器筒内形
36	966	A Z40	KY49E	14	3.7	8.4	ロクロ+g	1 ² +g ²	1 ² +g ²		B	B4群+類	土器筒内形
37	318	A Z22	KY40	14.6	4.1	8.4	ロクロ+g	ロクロ	ロクロ		B	B4群+類	土器筒器
38	3476	A Z88	KY49	14.8	3.9	9.6	ロクロ+g	1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ² +g ³		B	B2群+類	土器筒内形
39	3482		KY49	13.9	3.8	9.3	ロクロ	1 ² +g ²	1 ² +g ²		B	B2群+類	土器筒内形
40	3473	A Z465	KY49	15	4.3	9.6	ロクロ	1 ² +g ²	1 ² +g ²		B	B2群+類	土器筒内形
41	2608	A Z79	KY49	15	3.6	9.6	ロクロ+g	1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ² +g ³		B	B3群+類	土器筒内形
42	3667		KY49C	14			ロクロ	1 ² +g ² +g ³	1 ² +g ² +g ³		B	B4群+類	土器筒内形
43	3467	A Z167	KY49C	14.7			ロクロ+g	ロクロ+g	ロクロ+g		C	C1群+類	土器筒内形
44	812		KY49	16.7			ロクロ+g	ロクロ+g	ロクロ+g		C	C1群+類	土器筒内形
45	899		KY49E	9.4			ロクロ+g ²	g ²	g ²		C	C1群+類	土器筒内形
46	809	A Z21	KY49			10.3	ロクロ+g	ロクロ	ロクロ		C	C1群+類	土器筒内形
47	895	A Z19	KY49D	14.6	3.7	9.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ		C	C3群+類	土器筒内形
48	2132	A Z72	KY49E	12.9	4.2	6.7	ロクロ	ロクロ	ロクロ		B	B4群+類	土器筒内形
49	3480	A Z108	KY49	15	3.9	9.7	ロクロ+g ²	ロクロ	ロクロ		B	B2群+類	土器筒内形
50	847		KY49	14.5	4.2	9.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ		A	A2群+類	土器筒内形
51	2534		KY49				ロクロ	ロクロ	ロクロ		C	C2群+類	土器筒内形
52	994		KY49	15	4	8.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ		B	B5群+類	土器筒内形
53	829	A Z25	KY49	13.4	2.4	6.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ		A	A7群+類	土器筒内形
54	2102	A Z30	KY49C	14.1	4	9	ロクロ	ロクロ	ロクロ		A	A2群+類	土器筒内形
55	776	A Z13	KY49	13.8	3.4	8.9	ロクロ	ロクロ	ロクロ		A	A4群+類	土器筒内形
56	825	A Z24	KY49	13.5	3.6	7.3	ロクロ	ロクロ	ロクロ		A	A5群+類	土器筒内形
57	761		KY49			9	ロクロ	ロクロ	ロクロ		B	B2群+類	土器筒内形
58	921		KY49			8.7	ロクロ	ロクロ	ロクロ		C	C2群+類	土器筒内形
59	799	A Z20	KY49E			10	ロクロ	ロクロ	ロクロ		A	A2群+類	土器筒内形
60	791		KY49			9.6	ロクロ	ロクロ	ロクロ		C	C2群+類	土器筒内形
61	2565	A Z71	KY49C	16	3.9	9.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ		D	D5群+類	土器筒内形
62	1863	A Z126	KY49B	15.3	3.9	7.6	ロクロ	ロクロ	ロクロ		D	D7群+類	土器筒内形
63	2211		KY49B			7.9	ロクロ	ロクロ	ロクロ		D	C2群+類	土器筒内形
64	623	A Z9	KY49B	15.3	4.1	11	ロクロ+g	ロクロ	ロクロ		B	B0群+類	土器筒内形

種類	通称	登録番号	生息地	口済	高程	性別	外観調査	内観調査	重さ	比率	公算	備考	
65	3887	A Z 107-a	KY 49E		9.31	♂クロ	ロフロ	ロフロ	B	C II群	現地踏査合併		
66	3490	A Z 107-b	KY 49		7.9	♂クロ	ロフロ	ロフロ	B	C II群	現地踏査合併		
67	698		KY 49		9.8	♀クロ	ロフロ	ロフロ	B	C II群	現地踏査合併		
68	819	A Z 23	KY 49E		9.2	♂クロ	ロフロ	ロフロ	B	C II群	現地踏査合併		
69	969		KY 49		9.7	♂クロ+♀	ロフロ	ロフロ	C III群	現地踏査			
70	886		KY 49	15		♂クロ+♀	ロフロ	ロフロ	C III群	現地踏査			
71	2152		KY 49E	16		♂メソ+♀明	メノフ不明	メノフ不明	C III群	土師器内			
72	964		KY 49E			♀×	♂1	♂1	C III群	土師器内			
73	2065		KY 49C			♂メソ+♀明	メノフ不明	メノフ不明	C III群	土師器内			
74	621	A Z 8	KY 49			♂メソ+♀明	メノフ不明	メノフ不明	C III群	土師器内			
75	2600		KY 49	16		♂+♀1	♂+♀1+♂2	♂+♀1+♂2	C IV群	土師器内			
76	875,2299	A Z 22	KY 49		6.8	♂+♀	♂+♀+苗穂伝灰	♂+♀+♂1	F	C V群	現地踏査小鳥		
77	2532	A Z 22, 44	KY 49		6.8	♂+♀	♂1	♂1	C V群	土師器内			
78	799	A Z 20	KY 49E	11.7		♂+♀1	♂1	♂1+♀+♂2	C V群	土師器内			
79	3473		KY 49	(11.7)		♂+♀	♂1	♂1	C V群	土師器内			
80	996		KY 49	18.8		♂+♀1	♂1	♂1	C V群	土師器内			
81	3490	A Z 108	KY 49	11		♂+♀1+♂2	♂1	♂1	C V群	土師器内			
82	2992		KY 49	12.5		♂+♀1+♂2	♂1+♂2	♂1+♂2	C V群	土師器内			
83	2605		KY 49		10.5	♂+♀	♂1	♂1	C V群	土師器内			
84	3604		KY 49		9	♂	ロフロ	ロフロ	C VI群	土師器内			
85	337	F Z 2	KY 49						C VI群	土師器内		刀子	
86	679	D Z 10	KY 49						C VI群	土師器内			
87	3442	A Z 108	KY 49			♂+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C VI群	土師器内			
88	97,596		KY 49	19.6		♂+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C VI群	土師器内			
89	3178		KY 49	10.7, 3	6.5	♂+♀+♂2	♂1	♂1	S3: 15: 32	C I群	土師器内		
90	3494		KY 49	13.9	3.1	7	♂1	♂1	S8: 13: 29	C I群	土師器内		
91	3215		KY 49	15	4.5	(7.8)	♂+♀1+♂2+♂3	♂+♀1+♂2+♂3	S5: 16: 29	C I群	土師器内		
92	3332	A Z 108	KY 49	15	4.7	♂+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C I群	土師器内			
93	3648	A Z 105	KY 49	13.5	5.1	6.2	♂+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2+♂3	F: 54: 21: 25	C I群	土師器内		
94	3465		KY 49	13.5	4.2	5.8	♂1	♂1+♀1+♂2	E: 58: 16: 24	C I群	土師器内		
95	3469		KY 49	13.2	4.4	6.4	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	E: 55: 16: 27	C I群	土師器内		
96	3464	A Z 109	KY 49	13	5.3	5.4	♂1	♂1+♀1+♂2	D: 55: 22: 16	C I群	土師器内		
97	3055	A Z 108	KY 49	13.8	3.8	9	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	B: 52: 14: 34	C I群	土師器内		
98	3022	A Z 122	KY 49	15	5	9	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2+♂3	B: 52: 17: 33	C I群	土師器内		
99	3388	A Z 144	KY 49	13.5	4.2	6.8	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	B: 55: 17: 28	C I群	土師器内		
100	2600	A Z 112	KY 49	15	(4.7)	(10.8)	♂1	♂1	E: 50: 16: 33	C I群	土師器内		
101	2987	A Z 120	KY 49		12.6	♂+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C II群	土師器内			
102	3500		KY 49		♂1		♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C II群	土師器内			
103	3499,2611		KY 49			♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	C II群	土師器内			
104	3651		KY 49	14		♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	C II群	土師器内			
105	2952		KY 49E	17.3		♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	C II群	土師器内			
106	3004		KY 49C	20		♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	♂メソ+♀明	C II群	土師器内			
107	3665	A Z 122	KY 49B	18		♂+♀1	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C II群	土師器内			
108	3642		KY 49	22.2		♂1+♀1	♂1+♀1	♂1+♀1	C II群	土師器内			
109	3136		KY 49	16.7		♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C II群	土師器内			
110	3343		KY 49		10.1	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C II群	土師器内			
111	3009		KY 49		16.7	♂メソ+♀部分不明+♂2	♂メソ+♀部分不明+♂2+♂3	♂メソ+♀部分不明+♂2+♂3	B II群	土師器内			
112	3661	A Z 127	KY 49			♂1	♂1	♂1	C II群	土師器内			
113	3402	KY 49			16.7	♂1+♀1	♂1+♀1+♂2	♂1+♀1+♂2	C II群	土師器内			
114	3009他	KY 49				♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	B II群	土師器内			
115	3642		KY 49			♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	B II群	土師器内			
116	3438		KY 49			♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	B II群	土師器内			
117	2966		KY 49			♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	B II群	土師器内			
118	3005		KY 49			♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	B II群	土師器内			
119	3403		KY 49	21.6		♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	B II群	土師器内			
120	2292		F Y 71	17.8		♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C I群	土師器内			
121	2253	A Z 43	F Y 71		9.2	♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	A	C I群	土師器内		
122	1175	A Z 11	D Y 28	15.2	4.2	10	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	S3: 14: 30	C I群	土師器内		
123	4240	D Y 28	D Y 28	15.6		♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C I群	土師器内			
124	4316	A Z 137	D Y 28	15.4	3.9	8.2	♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C 56: 14: 30	C I群	土師器内	
125	615	A Z 4	C K			♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C I群	土師器内				
126	3740		D Y 10			♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C I群	土師器内			
127	3669	D Y 10	D Y 10			♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C I群	土師器内			
128	1681	K Y 77	K Y 77	9.9		♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C I群	土師器内			
129	719	D Y 3	D Y 3		4	♂1	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	♂1+♀1+♂2+♂3+♂4+♂5+♂6+♂7+♂8+♂9+♂10+♂11+♂12	C D群	土師器内			

3 奈良時代の遺物

大型溝状遺構の存在するB区・C区に集中する。遺物は須恵器、土師器を中心としてBY4～BY7等の柱底と木器類、砥石等の礎器、それに刀子等のその他の遺物の4に分けられる。ここでも順次項目に従って説明を加えたい。

A 出土土器〔第61～69図〕

B区・C区の大形溝状遺構であるKY49、KY81を主体に1,043点検出し、その中で完形土器を中心に図化したのが130点ある。基本的には須恵器と土師器とを大別し、さらに器種を細別すると11群に分類することができた。

1群土器

土師器環のグループを一括する。すべて内面を黒炭化処理を施した環類で占められている。器形の形状と底部の切り離し、調整手法の吟味から8類に分ける。

a類 (89～92・120)

ロクロ成形を使用しない環類で5点認められた。この中で89と90は器高が低く内外面ともに明らかなヘラミガキやナデを施していることから区分されるのかも知れない。他の91・92・120の3点は口縁部を横位のナデを呈し、底面を手持によるヘラケズリを施すのが特徴であるが、FY71から検出された120に関しては胴部に横位のヘラ調整を加えており、a類の仲間では一段階古手の要素をもつ。全体的には国分寺下層式でも比較的新しい年代が得られよう。

b類 (37・40・44・46・97・98)

KY81から2点、KY49より4点の6点が認められている。底径の比が大きく、僅かにふくらみをもたせながら口縁部でゆるやかに外反するが多い。底部上端から下脇部にかけロクロナデ後に回転ヘラケズリ調整を呈するのが特徴で、内面は横位から斜位にかけてヘラミガキを施すものとミガキを加えない37・46・98とに分れる。底部切り離しはヘラ切り後に回転ヘラケズリ調整を有する。口径、器高、底径を100とした場合の比率は平均53:15:32である。篠原のA群4類の仲間に近く、篠原II期とIII期を埋める8世紀中葉後半頃とみられる。

c類 (45・122)

KY49、D区の各1点の2点がある。器形的には前のb類と類似するが、底部から脇部にかけての曲線が口縁部までのが、僅かに口唇部で外に曲すことから区分する。底部の器壁は厚く、切り離しはヘラ切り回転調整で、外側調整をロクロナデから底脇部のみをヘラケズリ45と回転ヘラケズリを呈している。内面はヘラミガキ $a^2+a^3+a^8$ を施す。篠原のA群2類に相当し、篠原II期8世紀中葉頃と考えられる。

d類 (38・39・41～43・123)

外形的には口縁が外反するものと内反気味に立ち上がる二通りが存在するが、内面の口縁部付

近にわずかな棱をもつことから他の環とは明らかに区分される。K Y49から5点とK Y81・K Y24から1点の計7点が検出された。調整はロクロナデから底辺部を回転ヘラケズリを用いるものとそうでない二通りが認められる。内面調整は基本的にヘラミガキを多用し、口縁部から棱を有する間と区別してある。底部の切り離しはb類、c類と同じヘラ切り後に回転のヘラケズリ調整を示す。ロクロ成形をもつ土師器環の内面に棱を呈する仲間は米沢市の八幡原周辺のNo34(細原)遺跡、No30・31(竹井境)遺跡等四遺跡より検出されている。ことにNo34の細原遺跡は須恵器生産遺跡として知られ、その中に共存する様に土師器穴窓数基が認められている。この窓内から検出された内黒土師器環の大多数には内部に棱が顕著に残っている。环は小形で上浅川の例をとればg類に近い器高の高い特質があって、糸切りの後に手持のヘラケズリを施し、底辺部を大胆な手持ヘラケズリを行うのを特徴としている。一見器形だけを実見すると9世紀以降の环類にも近い様だが、須恵器との比較と調整手法の吟味から、8世紀中葉前半で得られるものと考えている。すなわち、棱をもつ国分寺下層式から土師器にもロクロ成形を導入した中で、古手の技法を継承して製作されたのが細原遺跡の环類となり、やがて一般的な器高の低い流れの中で消滅して行ったとも推測されうる。こうした背景の段階にd類が含まれると考えたい。8世紀の中葉から後半で位置付けられる笹原遺跡には本類が含まれていないこともうなづける。従って本d類は8世紀中葉もしくはやや先行する可能性があろう。本類の比は平均的52:14:34である。

e類 (35・36)

K Y49・K Y49の上端各1点が出土している。先のc類の环を口径だけを短くした形状を呈した小形の环を本類とした。両者とも底辺から胴下半部にかけて回転ヘラケズリを加え、内部を横のミガキを示す。底部切り離しはヘラ切り、同回転調整をなし、比率は52:15:53とb類に近い。笹原のA群4類に相当し、II期に併行する。

f類 (93・125)

K Y81とC区から2点認められた。器高が高く、胴部が丸味を帯びながら口縁で小さく外反するのを特徴とする。外面調整はロクロナデと125の様に水引ロクロ成形痕を明瞭に残し、底辺部に手持のヘラケズリを施すのとあり、内面は底面から胴部にかけてヘラミガキやヘラ調整を加えた後に横位のヘラミガキを丹念に施すのを特徴としている。比率は54:19:27で笹原のIII期に近いものとみられる。

g類 (93~96)

K Y49のみで4点ある。器形的には先のf類に近いが外反せずに立ち上りを示す。調整は外面をロクロ成形から底辺部を手持のヘラケズリ、ヘラ調整を加えたもの93・95そうでない94・96の二者がある。内面調整もf類と同じ様に底面調整とともに引き上げるヘラミガキとヘラ調整後に横位のヘラミガキを呈している。底部切り離しはこの類から糸切りを用い94・95は手持のヘラケ

ズリ・93は回転のヘラケズリ調整を加えている。比率は平均で55：20：25となり、篠原遺跡には類例はない。器形的には川西町道伝遺跡のS D 1第IV層出土環に近い。9世紀前半位に求められよう。

II群土器

須恵器の環のグループを一括した。器形の吟味から8類に分類した。

a類 (47・49・51・57)

K Y 49のV層、VI層から4点検出されている。底径の比が大きく器高の比が少ない環類で、底辺部が角を有してから斜位に立ち上がるのを特徴とする。水引のロクロ成形痕は比較的顕著であり、底辺部をヘラ調整を加えた49もみられる。底部の切り離しは47がヘラ切り後に手持のヘラケズリ、他の3点はヘラ切り後に回転ヘラケズリ調整を加えている。比率は53：13：14で篠原のA群12類に近いものとみられる。篠原のII期に位置付けられよう。

b類 (50・52・55・56・58～60・121)

F Y 71から1点とK Y 49から7点の計8点が認められ、本群の環類では最も多いグループである。先のa類と同様に器高の低い環類である。底辺部にふくらみを呈しながら立ち上り、口縁部で僅かに外反する。底部の切り離しもヘラ切り無調整の特徴があり、52だけが回転のヘラケズリ調整を施す。環の比率の平均は54：15：31で篠原のA群12類に比定される。

c類 (48)

器高の高い環類で先の土師器環I群g類に近い。K Y 49より1点のみ認められている。底部の切り離しはヘラ切り回転ヘラケズリ調整で比率は54：18：28となる。広義の篠原A群12類に含まれ、篠原のII期でも新しい方に位置付けられる。

d類 (54)

底部から外曲して立ち上がる環類で、器壁の厚いのが特徴となる。底部の切り離しはヘラ切り無調整でK Y 49から1点検出している。比率は52：15：33となり篠原A群11類に近い。篠原のII期でも古いグループである。

e類 (61～63・124)

底径の比率が大きく、器高の低い大形の環類で、底面が内曲しているために上げ底風となる。胸部が膨り口縁部が外反し、口唇部が丸味を有するのを特徴とする。この類の底部切り離しはすべて糸切りを主体としており、篠原遺跡や川西町道伝遺跡などにはみられない環類である。山形盆地周辺では上山市葉山3号窯跡、同三千刈第1地点等数箇所から検出され、その後に継続するのが上山市久保手1号窯跡・山形市熊野堂窯跡と考えている。前者に8世紀後半、後者を8世紀末の年代を得える。本類の環群は葉山3号窯跡よりもやや先行し、8世紀中葉とし、篠原のA群3類土器と併行するものとみている。

f 類 (64~67・100)

高台環の一群を一括した。この中で100を除く他は胴部の下半に稜をなす所謂『稜塊』の仲間に属し、県内では置賜特有の分布を示している。稜をもつ初現は8世紀の前半に木和田窯跡に初期の姿として現われ、8世紀の中葉頃に明確な稜として出現する。それが笠原のⅡ期にみられ、それが発展期となる8世紀の後半から末頃になると川西町塙山窯跡で多量に生産され、9世紀に入るとともなく稜は衰退して行くものと考えている。発展期の稜塊は稜部を強調するために回転ヘラケズリ調整を丹念に施しており、衰退期になるとヘラケズリの手法は消滅もしくは粗雑になり稜をもたない環と変化するのである。本類の64~67は発展期、100は衰退期に属する。前者の発展期の環は上浅川遺跡以外には笠原遺跡、大浦遺跡、川西町道伝遺跡、同塙山窯跡、高畠町十文字遺跡より検出されている。

g 類 (99)

器高がやや高く、丸味を帯びた胴部から僅かに口縁部が外反するもので、外面を水糸クロの成形痕跡を顕著に残すのを特徴とする。底部の切り離しはヘラ切りで後に回転ヘラケズリ調整を加え若干上げ底風を示す。この種の環は糸切りを有する例はかなり存在するがヘラ切りをもつものは少ない。笠原のⅡ期に相当するとみられる。比率は55:17:28であり、KY81より1点出土している。

h 類 (53)

底辺部に僅かな高まりをもつ環で、糸切りを有する环にしばしばみられる环類に似ている。笠原のA群14類はその代表であるが、糸切りを有することから同時平行と認める説にはいかないしぱケズリ調整を示すことは笠原のⅡ期もしくはⅢ期頃に求めるのが妥当と言えよう。环の比率としては57:15:28 e類と共通する。

III群土器

須恵器蓋の仲間を一括した。KY49から2点、DY10内から1点の3点がある。すべて破片で占められているので、全体的な形状は不明であるが、70は肩の張る蓋で、ツマミを除く、天井部を回転ヘラケズリで調整する仲間が多い。69と126はツマミが内凹したもので、ツマミ付近が沈む様な天井をもつ。

IV群土器〔第64図104〕

KY81から検出された長頸壺形土器の頭部片である。1cm位の帯状の口縁部から90°に内傾し、斜状に垂下する頭をもち上端部には一条の稜線をもつ。稜線の上部には横位する櫛搔波状紋がかすかに認められる。全体的に磨滅が著しい。おそらくは14の様な縫に近い壺形を示すものとみられる。ここでは奈良時代の範疇に加えたが、古墳時代の遺物とも考えられる。

V群土器〔第62~66図〕

須恵器の壺形土器を一括した。KY49より2点、KY81・KY77より1点の4点が検出された。a類-112は長頸壺の頸部片で、頸部中央部がすさまり口縁部で大きく開くものと、b類一同じく128は折り返し気味に口縁部が折曲する壺形土器の口縁部片である。c類-77は小形壺形土器であり、頸部が欠損している。胴部上端に最大径を有し、器高の低いものを特徴とする。胴部から頸部に向う曲面から察し、笠原のD群4類の様な水瓶に近いものとみられる。d類-130はKY49から検出された唯一の完形土器で、直立する僅かな口縁から「タマゴ」状に胴部が張り出す。底部は一見平底的に見えるが、丸底に近く、全体が赤褐色に焼を受けたものである。調整は外面を綫長の板目状のタタキから、横位のカキ目を加えて主体的な調整を行い、さらにその後に下胴部から底面にかけ、板目状タタキ、格子目状タタキを施してある。内面調整は胴部を回転したカキメ、底面より縱から横、斜位のヘラ調整をなす。

VI群土器〔第62～65図〕

土師器の壺形土器を一括した。5類に分ける。

a類 (109・88・80・81)

口縁部が「く」字状に外反し、胴部が球形状にふくらむ壺形土器である。調整は内外面ともにハケメを有するものが中心となる。KY49に3点、KY81に1点ある。

b類 (78・82・108)

口縁部がゆるやかに外反し、胴部は僅かなふくらみを有しながら内傾気味に底部に向う長身の壺形土器の一類である。調整は外面をナデからハケメを用い、内面は横位のナデとハケメ、それにミガキを有するものもある。82は外面の胴下半にケズリをもつ。KY49に2点とKY81に1点ある。

c類 (107)

頸部を境に外に開く様に外反し、口唇部に一条の縫をもつ。外面は横のナデ、1面は横から斜位のハケメ、横位のナデをもつ。KY81から1点認められた。

d類 (113)

口縁部が内傾気味に外反し、綫長の胴部下半で最大径を有する特徴を示し、縄文中期後葉の大木9b式に多く存在する所謂「キャリバー」に類似する器である。調整は外面を縱のハケメ・内面を横のハケメで施し、口縁部は内外面ともに横ナデをもつ。KY81より1点認められた。

e類 (83・84・110・116～118)

壺形土器と推測される底部片を一括した。KY81に4点、KY49から2点の計6点が認められる。110・83・84はb類、116～118はa類の壺形土器の底部に当る。

VII群土器〔第62図79・第63図87〕

須恵器の壺形土器を一括した。KY49だけから4点出土している。口縁部が外反し、肩の張る

胴部は胴部上端に最大径を置く、長身の器であり、79はロクロ成形のみであるが87は内外面に横のカキメを有し、外面の胴下部には斜から縱位にもカキメを施し、さらに縱のヘラ調整を加えている。

VIII群土器〔第59図22・24・25・第62図72~74・第64図101~103・105・106〕

高坏の一類である。すべてが破損品で占められ、脚部が多い。脚部の開き具合から次の4類に分けられる。柱状を有するものa類、127と103の2点がある。坏と脚の接合部から脚下部にかけて半扇状に開くものb類、24・25・74・72・101・102の6点ある。細味の柱状を有するものc類、73、1点がある。高坏の坏の部分で口縁部が開き気味に外反し、頭部に棱をもつものを特徴とするものd類、105・106の2点がある。調整は磨滅が著しく不用なものが大半であるが、大体は外面を縱位のヘラミガキ、内面を横位のナデ、縱位のヘラ調整を示すのが多くみられる様である。

IX群土器〔第65図129〕

D Y 3から検出された瓶の底部1点がある。底径の比の小さな瓶であり、突孔部は焼成前に開口したものである。調整は外面を斜位のハケメ、内面を縱のハケメで施し、孔辺部を横のハケメとケズリを加えている。

X群土器〔第62図76〕

龜の胴部片である。K Y 49の最下層に1点と離れてK Y 79から1点が出土したが、接合した。このことからK Y 49とK Y 79の関連が注目される。龜は胴部が短径で横に大きく膨するのを特徴とし、最大幅を有する中央に突孔がある。その中央部を境にして上方に2条、下方に一条の沈線を配した内部に6条の備描波状文を埋めている。内部調整は頸部との接合面をヘラミガキ、胴部をロクロナデを加えてある。年代は陶邑編年でのII型式III段階に相当するものとみられる。

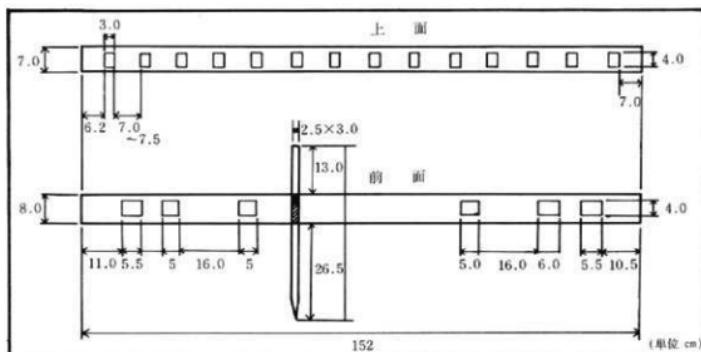
最後に坏底部の切り離しについて述べてみよう。ここでは須恵器と土師器に大別し、触れてみたい。基本的に須恵器と土師器とは異なる様である。

須恵器〔第67図〕

ヘラ切り無調整を有する底部(A)1・2・10・17。ヘラ切り後に回転ヘラケズリ調整を加えた底部(B)3・4・7・9・11・13~16・18・19。ヘラ切り後に手持のケズリを有する底部(C)8。糸切り無調整を有する底部(D)20~23。糸切り後に回転ヘラケズリを加えた底部(E)12。糸切り後に手持のケズリを加えたもの底部(F)5・6・24が代表である。底部(B)・底部(A)・底部(D)・底部(F)・底部(C)の順で多く存在する。

土師器〔第68図〕

底部(B)を示すもの7~19。底部(C)を示すもの20・21。底部(D)を示すもの1・6。底部(F)を示すもの2~5が土師器の代表である。底部(B)・底部(F)・底部(E)・底部(C)の順で多く存在する。この中で底部(A)と底部(D)がまったく含まれていなく注目される。



上浅川遺跡第3次調査出土馬鉄計測図

B 出土木器〔第82~93図〕

BY 4 ~ 9, KY 81, KY 49の遺構内より、馬鉄1点、木製品7点、土突き1点、弓1点、曲物底部1点、柱根46点の出土があり、器種別に説明する。

馬 鉄〔第90図〕

KY 81第6層面より出土した農耕具であり第90図、復元想定図に示す様に歯を14本有形態を呈す。4・6が完形、2・3・5・7・9は3分の1が欠損、12が2分の1欠損、13は歯の先端の検出であった。1・14は出土していない。台木は両端が上にややはねあがる形状を有し、上面に等間隔で3.0×4.0cmの方形状の歯孔をあけている。歯の先端は錐状に整形されて2.5~3.0cmが台木の歯孔に打ち込む部分である。歯の完形品と歯孔の観察から使用方向が理解できよう。打ち込みは歯を台木と同面まで挿入するものではない。各位の寸法は計測図に図示したので参照願いたい。引棒は発見されてないが前面にある6孔から判断して、柄孔と引孔用と考えている。

馬鉄は西日本を中心に総数11点出土している。(1986年1月現在) 本遺跡が12例目になる。出土土地を列挙すると、北九州市カキ遺跡、香川県中村遺跡に各1点これは古墳時代に位置す。大阪府上田部遺跡2点、静岡県伊場遺跡3点、御殿二宮遺跡1点、兵庫県辻井遺跡1点、吉田南遺跡1点、東京都八王子市石川天野遺跡1点。上田部遺跡出土の台木は105cmと120cm、兵庫吉田南遺跡は108cm、石川天野遺跡170.8cm、上浅川遺跡152cmであり、石川天野遺跡の形状に類似しているが、前面にある孔が一对多いのが特徴といえよう。材質は栗材を使用し8cm×7cmの方形状に整形し各角度面に面取りを施す。年代はKY 81出土のII群g類に比定され8世紀中葉に位置する。

BY 4の柱根〔第41図 TY 1 ~ TY 9、第82図 1 ~ 3、第83図 1 ~ 3、第84図 1 ~ 3〕

BY 4より検出された9本の柱根について観察すると次の様なことが注意される。第一の特徴として、柱根のすべてに片面の切り込みを有す形態を呈すことが挙げられる。この技法は根かせと呼ばれる。第2に上端部が四面錐の形態を有し、これは鋭利な刃物によって切り取られた痕跡を示す。この事は柱根だけを残し、再利用したものであろう。柱根は、不定形を示しているが最大幅は16cm～20cmの範囲にあり木の向きを変化することによって全体のバランスを保った配置になっている。素材となった栗材の大半は、削木を使用している。木の形態に応じて整形を加えていたことを示すものと言える。

BY 5の柱根〔第41図TY10～TY18、第85図1～7、第86図1・2〕

TY16第41図を除き原形を保つ。TY12第41図は自然の形態で皮をはいだだけで使用されたものであり、他は削木である。TY12の径は15cmを計り60年の年輪を数える。年輪の吟味により次の事が理解できよう。BY 5に使用された材は他の建物に使用された材料と比較すると年輪の幅が狭く、標高の高い地域に産地を求めることが可能であり、材料調達の過程において広範囲に求めたことを示す。根かせの技法を用いているのはBY 4とBY 9だけである。BY 4と同様上端を切り取られている。

BY 6の柱根〔第41図TY21・24・25・27、第86図3・4・5、第87図1〕

4本があり、TY24・25は削木、TY21・27が丸木の形態を有す。10cm～20cmと太さにバラツキが認められる。東北隅に最も太いTY21を置く配置である。ちなみにTY21の年輪は幅が広く、BY 5との産地の違いを明瞭に示している。

BY 7の柱根〔第41・42図TY29・32・33・35、第86図6、第87図2・3・5〕

4本あり、いずれも削木である。TY32が10cmの方形に整形された形態を有し、今回検出された建物の柱根では最小である。TY29・35は半截、TY33は4分の1に割って使用している。

BY 9の柱根〔第42図TY50～56・44・49、第88図1～5、第89図1～5〕

建物を構成する11本の柱根が出土している。BY 4の根かせ工法の形態を有すものでBY 9の柱根は全て切り込みが全周するのが特徴だ。倉庫群としたBY 4～7の柱根よりやや方形状を呈す。使用された素材は、TY51の様に方形状に整形した物とTY44の自然形態を有す両者に区別できる。先述したBY 4・5に認められた再利用の痕跡は欠損部分が多く確認できなかった。

その他の柱根〔第89図6・7、第87図4・7・6・8〕

TY37、TY45・46、TY132～136がある。TY45・46を除き小口径が5cm～10cmと小形であり、D区東側の出土で占められる。柱として使用されたのかは不明である。

土突き〔第91図1〕

現長で長さ67cmを計り、ほぼ原形を呈す。握り柄部と方形に整形された土突き部から構成され土突き部は長さ33cm、幅15cmある。握り柄部は長さ34cmで直径5cmの円形状に製作している。K

Y49の第7層出土であり土突き部本体の中央部に自然流木が上面に重なっていたことから実測図で示す様にその部分がややくほんでいる。用途としては掘立柱建物の構築際に柱穴の根固めに使用したものであろう。整形には一本の丸木から製作したものである。

弓〔第93図4〕

KY81の第6層面より検出された。長さ91cmを計り、中央部で1.3cmある。断面形態は台形状を呈し両端部が尖状を有し、弓筈はわずかに整形根痕を残す。檜材を使用して製作している。この弓は、形状より理解して例えれば古代、陰陽道の中の儀式に用いられたと考えられ、密教や修驗道に用いられる法弓儀式と同様な使用法が想定される。

曲物〔第92図2〕

現形で20.5cm、厚さ1.2cm、約2分の1が欠損している曲物の底部である。材質は檜を使用し周縁に幅0.8cm、深さ0.3cmの段を有す。KY81第6層より出土した。

木製品〔第92図1・3・4・5、第93図5〕

1はKY81出土であり厚さ2.0cm、幅2.3cm、現長で49cmを計り、両端部面は欠損している。断面形態は長方形で整形されたものである。用途としては建材の一部と考えたい。3・4はDN1最下層出土であり、両者とも欠損面を有す。3は小口面に面取面を持つ。4は長さ17cm、厚さ2.5cmの板状に製作されたものである。5はKY81の検出である。長さ49cm、断面は四角形で2.5cm×2.0cmある。1と同様な使用としておく。第93図5はKY81南側壁面から出土した。完形品であり現長で長さ93cm、断面は長方形で8.4cm×3.0cmを計る。中央部に突起部を有し端面から突起部まで26.3cmと19.5cmと両端部からの寸法に差がある。突起部は46.5cmであり、幅は一定である。

出土地点は馬糞が検出された場から西方へ約20m離れている。当初、馬糞に付隨するものと考えていたが馬糞の形態吟味により関係は見い出せなかった。この木製品自体を単独で使用した痕跡は認められない。この事から何かに付隨して使用する目的を有すものと言えよう。

自然遺物

遺構の中で述べた事と重複する部分もあるが、今回の調査で出土した多量の流木群について述べたい。流木は、KY49・81の溝内のすべての範囲に渡っており、その数は大型トラック數十台分に達する。流木の一部は、運搬したが他の多くは今も地底に眠っている。流木はすでに炭化しているものがあり、切断するのが困難な物もあった。この周辺一帯は、暗渠排水路工事が行われた地域でその間に大木が出土したことが、この調査結果から理解されよう。またこの大木が出土する地域が戸塚山をとりまく様に報告されていることから、KY49・81といった溝が古代には馬橋川と天王川を連結して存在していたことを示す。流木は自然災害により倒壊したものと溝を利用して運搬されたものの2者に分けられよう。

C その他の遺物

(1) 刀子〔第63図86〕

刀子はK Y49大溝跡の端部から出土している。刀子の現存長14.5cm、刃現存長8cm、刃巾1cm、刃厚0.5cm程で、腰帯に付属する魚袋刀子であろうと考えられる。茎部の鞘間に木質痕が残る。サビが著しい。茎部は鞘間につき刺すように槍先風の铸造である。鍔は、魚のひれのように「△」を呈しており、鞘留的な役割を兼ね備えている。木筒等をケズルに使用した小型ナイフであったろうと考えられている。

(2) 紡錘車〔第63図85〕

紡錘車は、K Y49大溝跡の端部から単独で出土している。現存での直径5.7cm、厚さ1.05cm、孔の大きさ0.8cmである。原形は土製円盤状を呈し、中央に突孔したものであった。表面の調整等は磨滅が著しいため不明。孔の使用痕はあまり見られない。

(3) 石製品〔第53図9〕

K Y81大溝跡の底面から出土している。石質は緑灰色を呈する頁岩で、形は不正な正方形を呈する。表裏面に研磨を加えた後、一定方向から研磨を施している。中央よりはなれたところに怪2mm程度の孔を有する。用途不明である。出土地が、弓が出土した地点とはほぼ同位置にあることから、儀式用の石製品とも考えられる。

4 近世・近代の遺物

D区で検出された百姓屋敷跡およびその付随する遺構から出土している。出土遺物は陶磁器類木器、石製品、金属製品などが出土しており、特に陶磁器、木器などの出土量が多い。全て日常生活、農作業などで用いられる製品ばかりである。ここで、多量に出土した遺物のうち代表的な製品について述べてみよう。なお、出土遺物の総数は819点に及んだ。

A 出土陶磁器〔第70~81図〕

(1) 染付碗〔第70・71・72図1~25〕

1~6はねずみ色の胎土で、コバルト発色も薄ねずみ色を呈し、呉須は薄青黒色のもので、染付雪輪梅文が描かれている。器厚は厚手の作りで比較的重みがあり、九州伊万里、波佐見地方のくらわんか手と呼ばれるもので、17世紀後半頃の所産と考えられる。なお、底部に「冂」・「々」などが描かれている。7~9・14は、網目文様の茶碗である。ねずみ色の胎土で、コバルト発色も薄ねずみ色がかかる。7~14は内側にも網目文様があり、器厚は厚手の作りで、九州伊万里地方の製品である。同製品は18世紀前半の所産であろう。8~9は、外面に網目文様をもつ製品で、7~14に比較するとコバルト発色が鮮やかである。10はねずみ色の胎土で、コバルト発色も鮮やかで薄ねずみ色を呈する。呉須は薄青黒色のもので、草花葉を描いている。底部からゆるやかに傾斜し、途中で直立する器形である。18世紀前半の所産と考えられる。11はねずみ色の胎土で

薄ねずみ色のコバルト発色を施した後、白灰釉がかけられている。文様は黒っぽい鉄釉で描かれている。器厚は厚手の作りで小型で重みがある初期伊万里の製品と考えられ、享保年間頃と思われる。12・13・15は薄ねずみ色の胎土で、コバルト発色は白色の強い薄ねずみ色を呈し、呉須は薄青色である。12・15は器厚が薄く比較的軽い。13は古伊万里の影響が強く厚手である。15は10とほぼ同じような器形で、白ねずみ色の胎土に薄ねずみ色のコバルト発色で鮮やかである。呉須は薄青色を呈し、草花などを描いている。17・18は白ねずみ色の胎土で、コバルト発色は白色を帯び、呉須は薄藍色のもので、17は口唇部に雷文が、体文に山水画を模した絵が描かれている。時期的には18世紀後半から19世紀初頭と考えられる。

19・20は白灰色の胎土で鮮かなコバルト発色を呈する。呉須は薄青色のもので菱形文、草花などを描いている。この磁器は、伊万里系の地方窯のものと思われ、江戸末頃の所産と考えられる。

22は白灰色の胎土で鮮かなコバルト発色がみられ、呉須は藍色のもので竹葉などを描いている。やや呉須の色調や特徴から西洋風の呉須が輸入された後の製品であろうと考えられる。

23~25は、宮城県切込焼の製品である。23は藍黒色の薄い呉須でたこ唐草文を外面に描き、内面の口唇部に菱形文を中心にして、その上下に三角文を描いている。25はくすんだ青色で細い線を描いた上に緑黒色ぼい呉須で草葉を連続して描いている。いずれも、江戸時代末期、特にここでは幕末期としておこう。

(2) 陶器碗

1) 灰白釉茶碗〔第72図26〕

胎土はねずみ色を呈し、外側は肌色がかっている。釉はねずみ色の灰釉の上に白灰釉を上から流している。ねずみ色の灰釉はガラス質を帯びる。胎土や焼成などと釉の使用から考えて、福島県喜多方市上三宮焼と考えられる。時期的には、嘉永5年に提出された「瀬戸場再興について願」以降のものであり、明治時代には廃窯されたため、その間の時期と考えられる。古文書等文献書類がほとんど無いため明確でない。

2) 灰釉無文碗〔第72図27~30〕

白く荒い胎土に灰釉を施したもので、高台が低い。30は、やや細い胎土に陶石が混じったような胎土である。27~29は、在地平清水で生産された碗で20世紀前半頃の製品と思われ、30は器形や製法が類似する胎土の差がみられることから、同時期の瀬戸系窯の製品であろう。

3) 緑灰釉無文碗〔第72図32〕

やや肌色ぼい胎土で、緑灰色の釉が施され、貢入の製品である。底部の切り離しが京焼風のヘラ切り技法の影響を受けている。高台の作りも丁寧である。時期的には幕末頃の大堀相馬焼に類似するところが多い。

4) あめ釉半磁器平碗〔第72図33・34〕

33・34はあめ釉の施された碗である。高台は丁寧に作っており、底部から傾斜し、体部中央頃から直立する器形である。体部中央には棱がきている。胎土は陶土と陶石とが混っているような胎土で、全面に細かな貫入が入った釉は、薄い灰緑色を呈し、ガラス質を帯びている。時期的には、明治頃から大正頃にかけて生産されたもので、大堀相馬焼の製品であろう。

(5) 灰白釉平碗〔第72・73図31・35〕

胎土は陶土に少量の陶石が混っているような胎土で、白っぽく荒い土を使用している。釉はややガラス質を帯びた灰白釉が施されている。餅窓を用いた豪華であろうか。器形や胎土から、明治中葉頃に生産された大堀相馬焼の製品と考えられる。

(3) 絵付け磁器碗〔第73図36・37〕

36は白色の精整された胎土で、コバルト発色も鮮かなものである。外面には青色の呉須を基本にして、朱色や緑色の絵具を用いて、鳥や草花などを描いている。内面は朱色の絵具を基本として、金色の絵具を用い花文を描いたり、薄紫色や緑色の絵具で松を描いている。絵具は、日本絵具に東洋系の絵具を用いていることから、まだ外国の絵具を陶磁器で用いていない時期の製品と考えられる。時期的には、文化・文政頃、種別は伊万里柿右衛門手の製品のものと考えられよう。37は、外國の影響を受けた後の絵具を用いて描いているもので、19世紀後半から20世紀初頭頃から生産されたものであろう。

(4) 猪口〔第73図38・39〕

そばの猪口であろう。この地方で白磁（新製白焼）が軌道に乗りかけていたのが文政年間頃で本格的に生産されるようになったのは幕末である。この白磁は伊万里系のもので、幕末の製品と考えられる。胎土や釉からみて、宮城県白石萩の坂焼に類似するところがある。

(5) 盆〔第73図40～44・46〕

40・41は、白磁の盆で産地は地方窯の製品であろう。非常に薄手で丁寧に作っている。明治頃から大正にかけての製品であろう。42・43・44は染付盆で、鮮やかなコバルト発色である。42は鉄釉によって文字形の文様を描いており、43は、動板遺跡出土図版86の153の器種に類似するところがある。44は、京焼系の染付盆で山水画を模倣した画が、うす青色の呉須で描かれている。46は青磁の盆でいろいろな特徴から三田青磁であると思われる。

(6) 絵付神仏具〔第73図45〕

仏龕具で赤・緑・青などの絵の具で絵付けされたもので20世紀前半に有田地方で作られた製品であろう。他に青紫色のもののみ破片でみられた。

(7) 染付匙〔第73図48〕

陶石は日本産のものでなく、胎土は白色の土に黒いゴマが混じる朝鮮系のものである。コバルト発色は鮮やかで、呉須は黒みのおびたうす青色である。もしかすると伊万里の製品で朝鮮李朝

の影響を受けたものだろうか。

(8) 白灰釉小皿〔第73図49~51〕

白っぽい胎土で、陶土と陶石が混じっているようなもの。釉は、無薬灰の白灰釉を流している。高台はいずれも付け高台である。49・50は高い高台で、51は低く丸味のある高台で、いずれも北九州地方か伊万里地方で文化・文政頃に生産されたものである。

(9) 緑灰釉小皿〔第73図52〕

灰色っぽい胎土で、全面的に細かな貫入が入った灰緑色にややあめ色がかった色調を呈し、ガラス質のあめ釉がかけられている。

(10) 壺〔第73図53〕

肌色を呈する胎土に黒いゴマが混りものに鉄釉を流し、その上に灰釉をちらばしている。底部の切り離しは、まわし糸切りで、成島焼の製法である。時期的には19世紀前半であろう。

(11) 小型薺灰碗〔第73図54〕

灰色の胎土に薺灰をかけた碗である。半焼成の不良製品で、釉も完全にとけておらず、作りも雑である。

(12) エサ入れ〔第73図55〕

鳥のエサや水を入れたと言われるもので、他の遺跡からも出土量が多い。肌色の胎土で、全面的に文様をきざみ、釉は貫入が入ったあめ釉である。底部はヘラ切りヘラナデを施したもので、把手は細長くした粘土紐を丸めてつけており、ほぼ中央に径3mm程度の孔がみられる。

(13) 白磁皿〔第74図56〕

器外面に型による文様を施したもので新しいものである。内面に焼成の時に使用するドチがそのまま付いて残っている。胎土は白色を呈する精整された陶石を使用している。

(14) 染付皿〔第74・75・76・77図57~61・63~66・71・72・75~77〕

57はねずみ色の胎土で、やや青黒色をおびる呉須で描かれている。58は、玉縁口縁で蛇ノ目高台が付く。底部一全体部へかけて明瞭な屈曲をもつ。目跡が4ヶ所にみられ、葉の描き方が左回りであることから、在地平清水焼である。59・61は、浅く美しい花の文様を描いている。柿右衛門手の製品である。63~66は、白ねずみ色の胎土でコバルト発色も鮮やかである。呉須は青色がややくすんだ色で、池の魚を描いている。71・72は、角縁の皿で蛇ノ目高台が付く。形態は58にみられる特徴がある。75は、細い礫が混じる胎土で、焼成や釉の状態から、伊兵衛の研究した半焼成の鉢石手と名付けられたものである。75~77は、在地平清水焼の小皿である。

(15) 染付德利〔第75図67~70〕

67・68は白色の胎土に細いゴマが混り、コバルト発色はガラス質を帯び鮮やかである。呉須は、うすい青黒色を帯びる。69・70は、精整された陶石を用いた白色の胎土で、内面がやや肌色っぽい。

呉須は青色で、山水画を描き、腰の部分に帯状縱輪文様を描いている。67・68は宮城切込焼で、69・70は在地平清水焼の製品である。

(1) かき釉鉢〔第76図73・74〕

白色の胎土で、コバルト発色も鮮かである。呉須は、濃い青色でドイツ製の輸入コバルトを用いた製品。玉縁口縁で蛇ノ目高台が付く。伊万里系の地方窯の製品である。

(2) 急須・急須蓋・片口〔第77・78図78～86〕

78は、荒い胎土で灰釉のかかけられた片口である。底部切り離しは回転糸切りで無調整のまま。注口は粗雑で作り付けである。79は鉄釉のかかった温古焼である。注口の下部に温故と刻印されている。80は、薄手の美しい京焼である。注口の側面に道八造と描いてある。81は鉄釉の万古焼で83は、四ヶ市周辺の製品である。82は、半磁器の急須である。84は、油指の蓋と思われ、大堀相馬産である。85・86は、79・81・83と同様な胎土の急須蓋である。

(3) 青磁壺〔第78図87〕

器厚が薄く、表面にだけ青磁釉がかけられた製品で、三田青磁又は、相馬で焼成された青磁の可能性もある。

(4) 植木鉢〔第78図89〕

小型のもので、地方窯の製品である。大正年間以降の製品で、やや茶褐色がかかった胎土に、あめ釉がかけられている。

(5) 片口〔第79図95～98・101〕

95・96は器厚が厚く、灰釉がかけられた片口である。口縁部は折返し口縁で、高台は直立した付け高台である。97・98は半磁器化しているもので、「L」状の口縁である。器厚は薄手で、口縁部の一部分が内湾している。101は95・96とはほぼ同様な器形であるが、高台がやや外傾する特徴がみられる。

(6) キックテ〔第80図104～108〕

全製品とも在地成島焼である。104・106は灰黒色を呈する胎土で空気孔が多い。陶土の中に混じる砂が多い。蒸焼製品に黒ばいあめ釉が施されている。105は口縁部・底部径が大きく、やや緑黒色がかかったあめ釉が施されている。107は薄手で玉縁口縁である。成島焼の初期製品らしく美しさをいやしみ、丈夫さにとんでいる。文様も細かく描いており、文化年間頃の製品と推察される。施釉はあめ釉を施し、その上、口縁部から胴部上面に白釉を大胆な釉流をしている。108は成島焼で明治末頃の製品と思われる。喫煙具としての使用。

(7) 陶器すず徳利〔第79図102〕

瀬戸系の一升すず徳利である。幕末頃に大量に生産された徳利で、底部内面や頸部のところにロクロ痕が残る。大形で釉は白っぽい色である。

(22) 楠鉢〔第78・81図94・111~114〕

出土した楠鉢は素地のものと鉄軸がかりの2種類に分けられる。94は硬質でくし目が少しもすりへらないもので、小型である。くし目を入れた後、鉄軸が施されたもので、質や胎土から相馬地方で生産されたものと推測する。111・112は、素地色で軟質である。口縁部の化粧のため白色の灰釉やあめ釉が大胆に釉流しされている。113・114は、前者より軟質で大部使用したものとみられ、くし目がスリ減っている。両者とも、美濃窯を中心に室町時代から焼造された楠鉢の系統をひくものである。時期的に、113・114は江戸後期頃以下には下らないと思われ、111・112は近年まで焼成されたタイプである。もしかすると、ほとんどが、美濃・瀬戸の系統をひく在地窯の可能性も考えられる。

(23) 盤〔第80図109〕

やかんや鉢びんなどを上げる盤である。器厚が全体的に厚く、ロクロ痕が全体的に残る。時代的には不明である。

(24) 植木鉢〔第80図110〕

素焼の製品である。外面と口唇部は美しいミガキが施され、内面はザラザラしたままである。外面の焼跡は火災のときの痕跡であろう。なお、この製品は5点出土している。同一の製品で素焼き火鉢とも考えられる。

■出土木器〔第93~98図〕

総数で61点ある。形態別に分けると、漆器椀類17点、エンブリ1点、杵1点、櫛1点、杓子9点、へら1点、箸12点、下駄1点、木槌1点、木製品17点となる。他に流し場とした地点から多量の杭が出土したが紙面の都合上実測図は転載できなかった。図示した木器類を器種別に取り上げて説明を加えたい。

漆器椀〔第98図1~17〕

6点の完形品と11点の欠損品があり、口縁部に欠損面が多く認められ、15・16・17は木皿である。この内4・5に家紋が描かれており、4には丸に剣片喰、5は丸に根鉢を有す。これらの漆器は赤漆と黒漆による彩色である。明細については図にスクリーンショットで示したので参照願いたい。器形の整形は木工ロクロにより製作されたものである。口径は9.9cm~13.8cm、器高は1を除き4.6~6.6cmの範囲にある。形状は、6の底部が異質な他はほぼ同様なものといえよう。3点出土している木皿は16・17は同一形態を有し、口径9.9cm、器高2.5cm、底部は7.0cmを計る。15の口径は11.0cm、器高は2.9cm、底部は4.5cmである。日用品とともに食事の際の米飯容器として使用されたものであろうか。家紋は今回検出された屋敷居住者のものかは疑問である。

エンブリ〔第93図3〕

長さ40cm、幅12cm、厚さ2.3cmある。針葉樹を使用して製作され中央部に5.2×3.1cmの有穴を持

つエンブリ本体である。エンブリは、最近まで使用されていた農具であり、代播き後、水田の凸凹をならす作業に使用されたものである。有穴の部分には長さ2cm位の棒をつけて作業用とする。機械の普及や耕地区画によって水田が広くなったことから一部の山間部を除き、現在ではほとんど使用されなくなった。K Y77出土

杵〔第93図1〕

半分が欠損している形状である。現長で長さ72cm、握り部は17cmが現存している。太さは7cmあり、断面形態は円形状を呈し、先端部が丸味を帯びる形状である。石臼も出土していることから穀物の製粉等の際に使用されたものである。杵としては大形の形態を呈す。

樋〔第93図2〕

F Y57から出土した樋の先端部である。形状は先端部がねあがり、断面形態に示したように中央に稜線が走る三角形状に整形されたものであり、2本が一对として使用される。雪上の運搬には欠かせない道具である。また、山林からの材木運搬などには土樋と称して土の上でも使用されてきた。ちなみに、雪や土の上の作業の場合、樋に関しては木製品の方が適している。

杓子〔第97図1～13・16・17〕

1・2は一本の木から整形した形態を有す。1は長さ30cm、柄は23cmを計る。液体を抄う量は3・17に劣る。飯豊町の中津川など山間部の冬の副業として盛んに製作された杓子類である。現在は杓子本来の機能は薄れて小豆などを鍋の中で潰す道具として用いられている。3・16・17は木工ロクロにより製作されたもので柄を後から杓子部に溝を掘りこんで挿入したものである。16は鋭利刃物で削り製作された痕跡を残す。1・2との年代差はなく、これらの形態は共在するものである。柄は竹を薄い板状に整形して使用している。素材はブナなどの広葉を用いている。現在は、木に変って化学的な素材を用いて製作されるが形態に変化はない。第97図18は、へらの頭部であり柄部が欠損している。頭部9.5cm、幅6cm、厚さは0.4cmを計る。

箸〔第97図4～15〕

4は杓子の柄の部分で両端面が欠損している。幅1.3cm、厚さ0.4cmの板状を有す。箸は、円形及び方形に仕上げられ長さは16cm～23cmを計る。用途、使用者の人により長さを選定したのであろうか。端面は丸味を帯びる形態、他は尖状をなす。5・8・12は赤色に彩色を施している。

下駄〔第96図1〕

長さ24cm、幅14cm、厚さ2.5cmある。齒の部分と下駄面との差はあまりない。三ヵ所の有孔を二等辺三角形状に配し、鼻緒を差し込む。この下駄は職人が製作したのではなく、素人により製作されたことが形態から判断できる。中央に2本の丸い釘が打ち込んであり、台として再利用したものである。

木梯〔第96図6〕

丸木を16cmに切断して、中央に3.5cmの四角形を有孔したものであり、半分が欠損した状態で出土している。中央部の有孔は、やや斜行して貫通している。柄の挿入部分も半截している。柄の上端面中央には、切り込みを入れてクサビを打ち込んでいる。K Y77出土であった。

本製品〔第95図1～6、第94図1～8、第96図2～5〕

形状が円形を有するグループとして、第95図1・2、第94図1～8がある。第94図2・4は中央に有孔を呈すもので、2は不整楕円形状の長軸1.8cmを計る有孔、4には正方形状で2.2cmの有孔を持つ。2は14cm、4は11cm、厚さは両者とも1cmである。何に使用されたかは、はっきり言えないが形状から理解して回転させる道具の部品としたい。

第95図2は樽の上蓋と有るもので側縁から1cm離れて直径3.5cmの有孔を有す。醤油樽に使用されたものであろう。材は針葉樹を使用している。第94図1は隅丸方形状に整形した平面状を呈す。片面に赤色と黒の彩色を施したお盆といえよう。

第94図3は縁辺に深さ2cmの段を有し、厚さ3cmと厚い形状を呈すもので、中央部に丸釘を打ち込んでいる。樽の底に使用されたものを第96図1の下駄と同様に台として再利用している。第94図の5は、第95図の1と同じ用途である。第94図7・8は中央に小さな突孔を持つタイプである。8は完形品で直径10cmを計る。曲げ物の底に類似するが何に使用されたのかは、現在のところ不明と言わざるを得ない。

方形状を呈する木製品として第95図5・6、第96図2・3・4・5がある。第95図5は漆塗の板状を有すもので一条の凹部を持つ。これは膳の一部であり、脚が欠損したものである。漆は表面に赤漆、裏面は黒漆が塗られている。第95図6は箱形膳の一部であり側面に竹クギが8本残存していた。長円形の空洞部は手を入れて持ち運びする部分である。第96図3は樽の側面に使用されたものであり長さ18cm、幅10cm、厚さ1cmあり、断面はゆるやかな湾曲を呈す。上端部を6cm下った地点にゆるやかな階段を有す。第96図4は長さ13.5cm、幅5cm、厚さ2cmの長方形状に整形し、中央部に2.5cm×3.5cmの方形状の有孔を持つ。縁辺は全て面取りされ、丁重に仕上げられた形状を有す。第96図5は長さ31cm、幅10.5cm、厚さ6cmの長方形状に整形した杉材に長さ12cm、幅7.5cm、深さ3.5cmの凹部を配したものであり、4と同様、使用目的は不明と言わざる得ないが、5については、凹面は物を貯める部分、他の面は、まな板の要素を持つという意見もある事もつけ加えておきたい。

第95図3は、スコップ、フォークの柄と理解される木製品である。端面は切断された形態を有し上端の握り部分の一部が欠損している。握り部のやや下方に鉄製のピンが貫通し、抜けない様に両端部を丸くしており握り部を強化するためのものである。この面には、焼印が押圧されている。持主を表示するためのもので、家紋とは性格がちがう。焼印は直径3cm、幅2mmの円形の帶を三個、三角形状に配したものである。

第95図4は、宍状を呈し長さは33cm、長さ1.5cmを計る。味噌などを付瘤を防ぐ際に使用する宍と理解したい。以上、述べた様に出土した木器は日常品に密着しているのが多い。しかし、近世近代に位置する木器の中でも、その使用目的が解明できないものがある。

C 出土石製品〔第55・56・57図〕

砥石24点、礫き白2点、土台石1点、板碑1点がある。その他に多量の礫が流し場としたKY91を中心に出土した。その中には凝灰岩を加工した破片も混入しているが大半は自然石で占められる。礫の表面は焼成面を有するものが多い。以下、これらの礫器群について説明したい。

砥石〔第55・56図〕

近世、近代の礫器としては砥石が最も多い。使用された砥石の石材は3種類ある。地元の戸塚山々麓に産する粘板岩、泥岩を素材としたもの。他に県外の産地からの搬入品、これも石材の観察により2ヶ所の産地がある。形状は、戸塚山の石材を使用したものは自然の破片をそのまま砥石として利用している。他は、鉄製の工具で断面を方形に整形し、長さは平均12cmある。遺構別に出所場所を列挙するとKY61、17点、FY92・KY51・KY77・KY83・FY76・FY53各1点となる。第55図6は全面に磨石を有す形態を有し、53cmの凹を持つもので砥石とは別の用途が考えられよう。また第55図3はD区から出土したもので「U」字状に一条の溝を持つ。石材は戸塚山の白灰色粘板岩を使用している。形態から判断して近世、近代に位置するものではない。溝状の観察から、曲玉や管玉の研磨に使用されたものと考えている。

土台石〔第57図11〕

高畠方面に産する凝灰岩を素材として、方形に整形したものであり約半分が欠損している。屋敷内の建物に利用していたものであり、欠損後、廃棄されたものである。この他にも、これに類似する礫数10点確認されている。尚、破損しない土台石は屋敷移転の際に搬出された。

板碑〔第57図10〕

二条の沈線帯を配す形態を呈す。文字やその他の文様などは確認されていない。板碑を再利用して整形した石製品であり、端面に再調整の盤の痕跡を有す。第一次調査区内からも板碑が再利用された状況で出土しており、信仰の変化を示すものとして注意されよう。

礫き白〔第57図8・9〕

形状は同じでも、大きさの違う2個体分が検出された。礫き白上部体であり、穀物を入れる有穴がある。底面には、放射状に沈線を配している。この沈線は地方によって差があることが指摘される。これは、対象となる穀物に応じて沈線の幅、あるいは角度を変化させた事を示す。他に石臼の2点も出土しているが破片であることから形態は不明である。石材は安山岩を使用している。第一次調査では13世紀に位置する石臼が4点出土しているが礫き白は出土していない。この事から理解して、礫き白は17世紀頃に登場していくものと言えよう。

D 出土金属製品〔第99図5～12〕

(1) 煙管〔第99図5～8〕

5は雁首、6～8は吸い口で、材質はいずれも銅製である。雁首はロクロ錐で穴を開いた火皿部分と銅板を丸めて円筒状にして火皿に続く部分を結合して製作している。脂返しの鴻曲が小さい。首部のところとウラを結合するための止め溝が残る。6は、ウラが残っていた吸い口である。7・8は六角形で厚みのある吸い口である。7の吸い口の口付け部がやや開きぎみで円形なため法度になった製品ともいわれるが不明である。時期的には、7が18世紀前半でその他は18世紀後半から19世紀のものと推測される。

(2) 古銭〔第99図9～12〕

9～12は寛永通宝。本遺跡では5枚出土しているが、その内採掘可能で完形のものが4枚で、1枚は破片であるため、4枚図示した。寛永通宝は大きく「古寛永」と「新寛永」に分けられる。古寛永は「寶字がス寶」となり、圓字体などの特徴がある。新寛永は「寶の字がハ寶」となっている。その他、「ハネ永」など種々な特徴で鋳造年代が異なる。本遺跡から出土したものはすべて新寛永で、ハネ永が9・10である。9は背文銭で俗に文銭とよばれる。

(3) 農耕具

鉄製の鍬とくつわと思われるもの2点が出土している。鍬は4個である。

E その他の遺物

(1) ガラス瓶〔第99図1～4〕

これらはFY77の濠跡から出土したものであるが、いずれもその覆土の中からのものであった。いずれも鋳型を用いて作られたようで、頭部、肩部、腹部に鋳型の痕と接合部の痕跡が認められる。

1) ワイン瓶〔第99図1〕

色調は透明に近い薄緑褐色で表面の凹凸も少なく仕上がりが良好である。底部はやや上げ底である。肩が張らないもので、胴部から緩やかに頭部をへて口縁部にいたる器形。

2) 薬瓶〔第99図2～4〕

2・3は肩の張る円形の瓶である。2の色調は透明に近い薄緑褐色で表面の凹凸が多い。栓はコルクを用いたと考えられる。3は透明なものである。器体の胴部にホンシ薬、星製薬株式会社の社名、底部に社章が刻まれている。4は透明な長方形の瓶である。

(2) 檻他〔第99図13～15〕

13・14は、つけ製の横櫛である。13は草花の文様を描いたもので、返りをもった飾り櫛である。14は、厚手で日常使用したものと思われ変形している。15は飾具である。

第2表 上浅川遺跡第3次調査出土陶磁器観察表

番号	器種名	出土地	系統	產地	時期	計測値(cm)		
						口径	底径	器高
1	染付碗	K Y77 4222	初期伊万里	波佐見地方	17世紀後半	9.5	4.0	5.1
2	"	" 1658	"	"	"	10.2	4.2	5.3
3	"	F Y54 1226	"	"	"	10.2	—	—
4	"	K Y57 4314	"	"	"	10.2	4.1	5.6
5	"	K Y77 4206	"	"	"	10.2	3.7	5.0
6	"	F Y53 4313	"	"	"	—	4.1	—
7	"	K Y77 4330	"	"	"	10.4	—	—
8	"	K Y77 4350	"	"	"	9.4	3.5	5.1
9	"	K Y61 1358	"	"	"	10.3	—	—
10	"	D区	古伊万里		18世紀前半	8.4	—	—
11	"	F Y76	"	"	"	7.3	2.6	3.9
12	"	R Y77 1800	"	"	"	10.0	4.0	5.3
13	"	K Y61 1401	"	"	"	—	4.4	—
14	"	K Y77 4212	"		19世紀前半	—	3.3	—
15	"	1098	伊万里		19世紀初頭	10.0	4.1	5.0
16	"	F Y76 4378	"	"	"	6.6	—	—
17	"	K Y77 4217	"	"	"	7.0	3.0	5.6
18	"	F Y78 1552	"	"	"	—	3.2	—
19	"	F Y78 1585	"		19世紀中葉	10.8	3.5	5.8
20	"	K Y77 1642	"	"	"	12.0	—	—
21	"	F Y78 1575	"	"	"	10.7	—	—
22	"	K Y77 1809	"		19世紀後半	11.2	—	—
23	"	K Y77 1841		宮城切込焼	19世紀中葉	10.7	—	—
24	"	K Y77		"	"	7.0	—	—
25	"	R Y57		"	"	—	4.0	—
26	陶器碗	F Y76 4373		上三宮焼	19世紀中葉	8.6	3.6	5.2
27	"	F Y76 4371		平清水	20世紀初頭	8.7	3.7	5.0
28	"	F Y76 4371		"	"	7.9	3.3	5.1
29	"	F Y78 1715		"	"	8.2	3.7	5.3
30	"	K Y77		"	"	8.9	3.9	5.2
31	"	F Y78 4379		相馬焼	19世紀末葉	9.3	4.0	4.6
32	"	K Y77 1671		"	"	—	2.9	—
33	"	K Y51 1432		"	20世紀初頭	8.3	3.2	4.0
34	"	F X76 1604		"	"	—	2.9	—
35	"	F Y78		"	"	8.0	3.0	4.4
36	絵付陶磁碗	K Y51 120	伊万里		19世紀中葉	12.7	—	—
37	"	K Y77 4337	"		19世紀末葉	9.4	3.3	3.9
38	そば猪口	K Y57 1193	伊万里系	萩の坂焼	19世紀中葉	7.2	5.3	5.8
39	"	F Y78 1535	"	"	"	7.1	5.4	5.8
40	白磁酒杯	F Y78 1806			20世紀前半	8.0	2.9	3.0
41	"	F Y78 25			"	8.0	2.9	3.0
42	染付酒杯	K Y77		地方窯(不明)	20世紀中葉	6.7	3.6	4.2
43	"	D区 1467		"	"	7.7	3.4	3.5
44	"	F Y76 1500	京焼系	"	"	8.2	3.2	4.2
45	絵付仏具	F Y51	伊万里		19世紀後半	6.4	2.7	4.2
46	青磁酒杯	F Y78 1832		三田青磁	19世紀前半	7.8	—	—
47	染付	F Y78 4318	伊万里		19世紀後半	—	4.0	—
48	染付匙	K Y57 1097	朝鮮李朝		19世紀代	—	—	—
49	陶器小皿	K Y77	伊万里		18世紀代	9.6	3.4	2.6
50	"	F Y76 4378	"		"	9.6	3.5	2.5

番号	器種名	出土地	系統	産地	時期	計測値(cm)		
						口径	底径	器高
51	陶器小皿	F Y76 4366	伊万里系	相馬焼	19世紀前半	9.3	3.2	2.6
52	"	F Y78 1714		成島焼	"	11.3	4.6	3.0
53	陶器小壺	K Y61			"	—	3.5	—
54	陶器碗?	F Y78 1744			"	8.4	4.6	4.2
55	えさ入れ	K Y77	瀬戸系		20世紀代	5.6	5.2	3.0
56	白磁皿	F Y76 1506	伊万里系	平清水	20世紀代	9.9	9.2	2.7
57	染付皿	228	"		19世紀前半	—	5.9	—
58	"	K Y77 4343,1570	"	平清水	"	14.0	7.8	3.7
59	"	4365	"	柿右工門手	"	21.0	12.8	3.2
60	"	K Y77	"	宮城切込焼	19世紀中葉	21.8	—	—
61	"	F Y76 4385	"	柿右工門手	19世紀前半	20.3	13.6	3.4
62	青磁皿	F Y76 1500,4353		三田青磁	"	12.8	6.8	4.1
63	染付皿	F Y78 1568	伊万里		"	14.3	8.4	3.3
64	"	F Y76 2907	"		"	13.7	8.7	3.2
65	"	K Y77 1778	"		"	14.0	8.4	3.2
66	"	K Y77 4308	"		"	14.4	9.4	3.1
67	染付徳利	F Y78 1579		宮城切込焼	19世紀中葉	3.1	—	—
68	"	F Y78 1960	瀬戸系		"	—	6.0	—
69	"	K Y77 4335		平清水	19世紀後半	—	7.4	—
70	"	K Y77 1571	"	"	"	—	—	—
71	染付皿	K Y57 1197	伊万里		19世紀中葉	14.4	8.8	4.2
72	"	K Y57 1011,1238	"		"	14.2	8.8	4.0
73	かき釉鉢	K Y77 4391	"		19世紀後半	15.7	9.0	7.0
74	"	K Y77 西区	"		"	16.7	8.3	6.5
75	染付皿	F Y78 1585		本郷砂石手	19世紀前半	12.1	5.2	3.3
76	"	F Y78 4356	伊万里系	平清水	20世紀初頭	9.8	5.7	2.2
77	"	K Y77 1666	"	"	"	9.8	5.9	2.1
78	片口急須	F Y53 4303	瀬戸系		17世紀初頭	7.9	6.7	7.4
79	"	F Y78 1605		温故焼	19世紀中葉	6.8	4.6	4.7
80	"	R Y57 1078	京焼	道八窯	19世紀前半	6.4	—	—
81	"	K Y77 1634		万古焼	19世紀後半	—	5.3	—
82	"	F Y76 4368		相馬焼	20世紀前半	5.5	5.5	4.5
83	"	K Y77 1752		四ヶ市焼	"	6.0	5.0	5.5
84	豪蓋		4353		19世紀後半	6.6	2.0	1.3
85	急須蓋	F Y76 1560		万古焼	"	5.3	—	2.2
86	"	F Y76 1534		20世紀前半	5.4	—	—	—
87	青磁壺	F Y78 1567		三田青磁	19世紀前半	5.4	—	—
88	水注	F Y61 1360		宮城切込焼				
89	小型植木鉢	K Y77 1755		地方窯	20世紀代	8.4	4.8	5.3
90	鉄釉鉢	F Y76			19世紀中葉	10.3	4.6	3.3
91	陶器壺	K Y77		成島焼	"	7.9	—	—
92	陶器鉢	K Y77 1685		相馬焼	19世紀後半	—	6.4	—
93	"	K Y77 1799		"	"	—	5.9	—
94	捕鉢	F Y78 4344		"	"	17.2	5.9	7.7
95	片口	F Y78 1587		"	"	18.4	7.4	7.7
96	"	K Y77 1671		"	"	16.8	7.6	8.5
97	"	F Y76 1371		"	"	16.1	6.7	8.3
98	"	K Y77		"	"	18.5	—	—
99	鉢	F Y76 4372		成島焼	"	17.8	—	—
100	"	K Y77 1666		"	"	21.0	—	—

番号	器種名	出土地	系統	產地	時期	計測値(cm)		
						口径	底径	器高
101	片口	G119-124(基石)		成島焼	19世紀中葉	21.0	8.2	10.6
102	すす徳利	F Y76 4360	瀬戸系		20世紀初頭	—	10.2	(17.6)
103	壺	K Y77 1532		成島焼	19世紀中葉	11.9	6.7	17.6
104	キッタチ	K Y77 1685		"	"	16.0	—	—
105	"	K Y77 1778		"	"	18.4	15.8	12.5
106	"	F Y78 1587		"	"	14.0	10.6	16.4
107	"	K Y76 1498		"	19世紀前半	9.8	8.1	12.7
108	"	F Y78 1587		"	20世紀前半	11.5	10.8	11.8
109	盤	K Y77 1776				21.0	—	—
110		F Y51				30.0	—	—
111	擂鉢	K Y77 4220	美濃系		19世紀後半	32.7	—	—
112	"	K Y76 1688	"		"	32.4	—	—
113	"	K Y77	"		"	32.0	—	—
114	"	K Y76 4374	"		18世紀中葉	—	11.0	—

第3表 上浅川遺跡第3次調査出土ガラス瓶観察表

番号	器種	出土地	計測値(cm)			色調	備考
			口径	底径	器高		
1	ワイン瓶	K Y77 1634	2.2	5.0	17.1	緑褐色	
2	薬瓶	K Y77 1746	3.0			"	
3	"	K Y77 434	1.5	1.8	4.8	白透明	「星製薬株式会社」「日薬」
4	"	K Y77 601	1.7	2.2	6.8	"	

第4表 上浅川遺跡第3次調査出土煙管観察表

番号	部位名称	出土地	計測値(cm)			分類	備考
			長さ	最大径	巾		
5	雁首	D区 1407	6.2	1.1	1.0	V	
6	吸口	K Y76 1606	8.6	0.9		V	
7	"	K Y61	9.8	1.0		IV	六角形肩である。
8	"	G107-110 1405	(6.1)	1.0		V	

第5表 上浅川遺跡第3次調査出土古銭観察表

番号	銭名	出土器	備考	初鑄造年
9	寛永通寶	K Y76 1550	「文」銭	寛文8年
10	"	1300		
11	"	K Y76 1830		
12	"	K Y77 b		

(注) 1. 陶磁器については実測番号と共通する。

2. 煙管の分類は、古泉弘(1983)『江戸を掘る』を参照。

V まとめ

上浅川遺跡の第III次発掘調査を終了し、多くの成果を上げることが出来た。それらを幾つかの柱として触ると、第1に縄文時代の集落跡の検出、第2に方形周溝墓の発見、第3に奈良時代の建物群の検出、第4には近世から近代にかけての屋敷跡と多量に出土した陶磁器類と木製品とに分けられるのであるまい。ここではこれらの成果の目玉を要約し、個々のまとめとする。

A 縄文時代

縄文時代の遺構の多くは今回の圃場整備外となる北側を中心と推定していたが、第1次調査では東側に中期後葉、今回は全域に不偏的に認められ、年代もB区・C区が後期初頭から中葉、D区が中期中葉となる。とりわけD区からは竪穴住居跡が切り合って5棟検出されている。住居跡の多くは円形プランを示すものであり、壁柱穴を配し、中央に地床をもつのが特徴である。年代は土器の分析により、大木8a式でも比較的古手の様相を強くし、むしろ大木7b式の特徴を呈している。この時期に近い竪穴住居跡の発見は米沢市の法将寺遺跡、山形県内では鶴岡市岡山遺跡などがある。ただ、法将寺遺跡の例や岡山遺跡でも炉跡は石囲いを示しており、形態的に大きな異なりを示す。このことは大木8a式前後に地床炉から石囲いに変化する前段階の過程を有するのかも知れない。この他にB区、C区では包含層内からではあるが後期の土器も認められ、縄文時代に關しても長期に亘る生活が営まれた貴重な遺跡と言えよう。

B 古墳時代

今回の調査の中で予想以外の成果として古墳時代の遺構がある。古墳時代中期に属するもので、方形周溝墓1基と土壙、溝状遺構が検出されたにすぎないが、24万m²の広大な遺跡面積を有する上浅川遺跡内に古墳時代の遺構が発見されたことは単に複合した別の時代を付け加えただけではなく、戸塚山古墳群、ことに山頂古墳群との関連性をみすごしには出来なくなったのである。山頂古墳群は言うまでもなく、前方後円墳と帆立貝式古墳2基が繼続して構築された首長墓と推測されている。5世紀後半から同末期に求められるもので、今回の上浅川遺跡の方形周溝墓の年代と一致する。残念ながら調査面積が限定されていたこともあって、住居跡等の痕跡は発見されなかったが、付近に存在することは確実である。

さらに遺物だけではあるが、K Y83の溝内とK Y81の溝内から6世紀代の遺物も僅かながらに発見されている。そして、F Y71においても环身1点と鉈が検出し、これらは7世紀代に求めることが可能である。この様に5世紀中葉から同末、6世紀、7世紀代の遺物の発見は戸塚山古墳群の成立と発展を古墳だけではなく、平地である集落においても今後示される可能性を指示するものと言えよう。

中でも方形周溝墓はその終末を山形県内において5世紀後半に重下させるとともに米沢市だけに認められている方形周溝墓の変容を比丘尼平遺跡→八幡堂遺跡→上浅川遺跡と推測することも

可能となった。とりわけ、置賜盆地の大形首長墓の変遷との係わりについては興味深いものである。方形周溝墓は東北南部に集中しており、今回の上浅川遺跡を加えると12例となる。紙数の都合でいちいち取り上げないが、大きさでは宮城県名取市今熊野遺跡（15m）に次ぐ、東北二番目となる。名取市と言えば全長168mの東北最大の前方後円墳も存在し、方形周溝墓の発見される地域にはこの様に古い大形古墳が伴う特徴もある。ここ置賜盆地内でも例外ではない。

ただ年代的には共存することも事実であり、古墳発生との係わりや、古墳との性格的な相異も問題となろう。

遺物としては古式須恵器の発見が注目される。上浅川遺跡からは方形周溝内から検出された坪蓋1点とK Y83の魁、F Y71の魁と坏身がある。先の坪蓋は焼性や技法の推察からして、宮城県仙台市の大連寺窯に類似する特徴をもつ。後の魁は大阪市陶邑窯跡群の特徴を持ち、少なくも当地で生産された可能性は少ないと見える。よってこれらの須恵器群は県外からの搬入品と考えた方が妥当と考える。この様な古式須恵器は県内を含め、東日本各地から検出されているが、方形周溝と共存した例はない。県内の場合、搬入したと推測している古式須恵器の多くを、一段階下げる方向にあるが、上浅川遺跡の場合は出土した土師器とも一致しており、それ程の時期差をもたないうちに導入したことを示すものであろう。F Y71の环は県内で唯一の酸化焰焼成の搬入須恵器であり、注目されるものである。

C 奈良時代

本年度の調査によって確認された遺構は全調査区に渡る。倉庫跡4棟、1間四方の掘立柱建物跡3棟、2間四方の掘立柱建物跡1棟、その他の掘立柱建物跡8棟が検出されている。倉庫跡は2間四方で鍾柱の建物で、その多くは径30cmの柱根が残存していた。それらの柱根は、水分に強い柔材を使用している。柱根には根械せという柱根の埋設部に鋭利な刃物で刻みを入れ、柱の安定を図らせる技法が用いられていた。その他に底面を焦して使用しているものもみられた。このような技法は、東北では類例がみられず、建築技法としての意義を追求していかなければならない。時期的には、建物の配置および主軸方向の配列などからIII時期からIV時期に亘る建物の変遷が窺われる。

大溝跡は戸塚山の山裾から小規模な蛇行を繰り返しながら、數本の溝へ分離する。その溝の中には数多くの大木が横倒した状態で検出され、横倒の方向や木質の状態から台風あるいは、東南東の風が強い時に落雷があったなどの火災によることが、ほぼ明確になってきている。これらの大木は、溝縁端部に植移されたものと自然に繁茂したものに分けられた。大木の中には径160cmを越えるものがみられ、年輪の一部などから想定して350年以上の老木であろうと考えられる。出土遺物においては8世紀前葉から末頃の土師器、須恵器が多量に出土している他、類例の少ない木製品の出土があった。全国で12例目に数えられる馬糞は、他遺跡出土のものとの相違点が認

められている。それは、台木に歯をうえる孔が14、柄と引棒を取り付ける孔が6孔みられることである。大阪府高槻市上田部遺跡、東京都八王子市石川天野遺跡の場合、孔が4ヶ所のため、一対分多いことになる。検討すべき課題であろう。その他に祭祀で用いられたと考えられる弓、石製品、「尾」などの文字の墨書き器、建物の基盤を固める土突きなどが溝底面から出土している。

本遺跡の全盛期と考えられる8世紀中葉から8世紀末頃の置賜郡における他の遺跡と対比した場合、本簡や円面鏡が出土した笠原遺跡、八幡原No30・31（竹井境）などは全て方形の竪穴式住居跡に比べ、本遺跡は全て掘立柱建物跡である。

この時期の政治的背景を想定してみると、畿内では奈良東大寺の創建、地方では国分寺、国分尼寺を配置することなど国家的行事が盛んな頃と考えられる。置賜郡においては、和銅5年に陸奥国から出羽国に分割されて、ようやく政治的内状の安定を図る時期であった。しかし、東北北部では蝦夷の反乱が相続く時期であって、律令体制の浸透を国家的に行なおうとする頃の遺構である。

以上のように、本調査での成果をもとに遺構全体を把握した場合、同時期の遺跡との対比あるいは儀式的行事の痕跡がみられることや、直ぐ西にそびえる戸塚山の終末期群集墳との関係などから推測して、8世紀中葉から末頃を中心とする官衙跡としての色彩と特質の濃厚な遺跡として考えるのが妥当であろう。

D 近世・近代

上浅川遺跡から検出された濠跡をもつ屋敷跡は、高請本百姓与右衛門家の跡ということが明確になった。屋敷は、元禄年間には、この地に存在していたことが、遺構の状況や遺物から明らかになったとともに、明治30年代に火災にあって移転したということを立証することができた。

また、多量の陶磁器をはじめ木製品など多くの遺物が出土している。出土した陶磁器の主体は地方在地窯の成島焼、平清水焼、大堀相馬焼、宮城県切込焼などで製造されたもののほか、伊万里、美濃・瀬戸地方の陶磁器であった。それらすべて国産品の陶磁器であるが、その他、中国明朝時代の青磁片や朝鮮李朝期の特徴をもつ陶磁器片もみられた。それらは大方、18世紀前半から20世紀前半を中心とする製品である。成島焼は、安永7年上杉藩三手士であった相良清左衛門によって築かれた窑場である。平清水焼は、常陸国の住人小野藤治平が山形の平泉寺を訪れ、文政年間に築かれた窑場である。いまだ調査されていない喜多方市の上三宮焼の古窑跡で製造された製品も、上浅川遺跡から出土している。

最近、江戸時代の遺跡が調査されるようになり、江戸時代の考古学という分野が誕生して、研究が進められるようになっている。また、江戸時代の在地窯跡の調査も行なわれ、今まで文献でひもとくことのできない事実が明らかになってきた。しかし、それらの窯は唐津、伊万里、美濃瀬戸系の技術を引き継ぐもので、窯あるいは地元の大きな地主層の投資によるものが多い。そ

れらを含め、その生産に関する技術的な面や経済的流通経路などとその実態の把握は重要なポイントとなってきた。また、その消費地から出土する陶磁器類に関しては、その流通と使用者層、そして経済生活様式を反映すると同時に、在地農業を左右するものがあろうと考えられる。

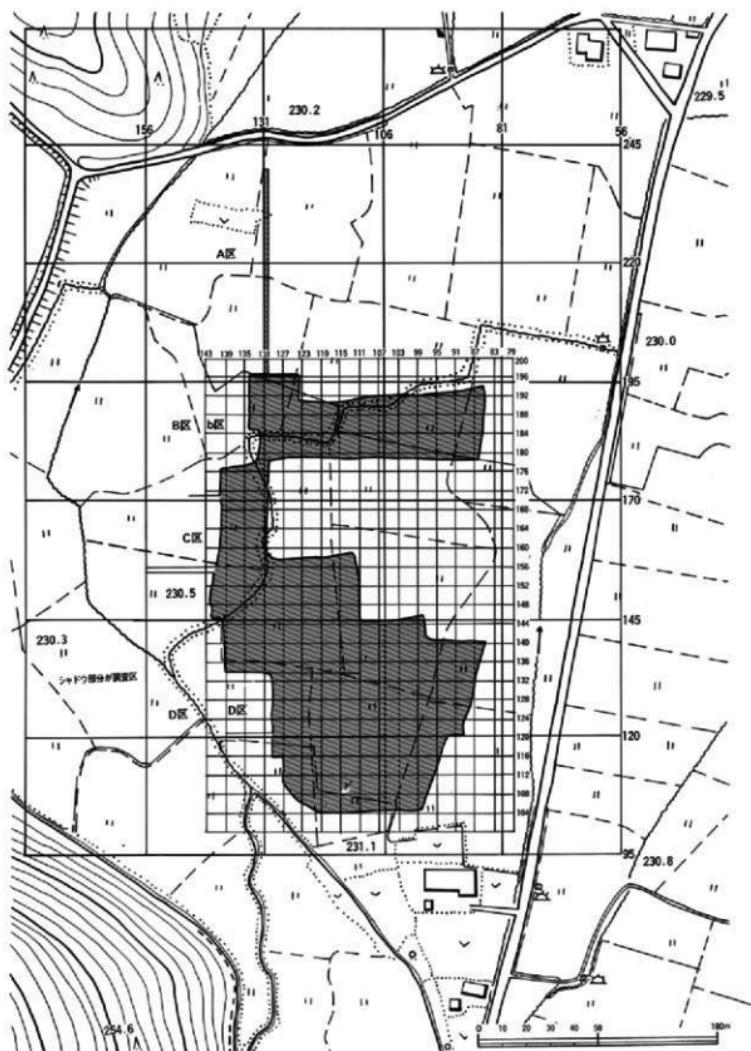
遺構については、近年急速に新住宅化が進み、江戸時代の建築物が減少する傾向にある。その中で、江戸中期頃からの高諳本百姓の屋敷跡を検出したということは、記録に少ない百姓屋敷の平面構造と配置を知ることができた。これらは、地方農民の居住生活あるいは生活様式を反映するとともに、江戸時代から明治時代にかけての村落形成を知る一つの手がかりとなる。調査をすることによって、文献あるいは言い伝えを実証し、新しい目での研究も必要でなかろうか。ことより文献史あるいは民俗学、土壤学など多くの研究分野と考古学はタイアップして、新しい歴史の事実を後世に伝えなければならぬ責務を痛感させられる。

今後、この上浅川遺跡の発掘調査を契機として、さらに充実した文化財の保護、活用ならびにその発展を望むものである。

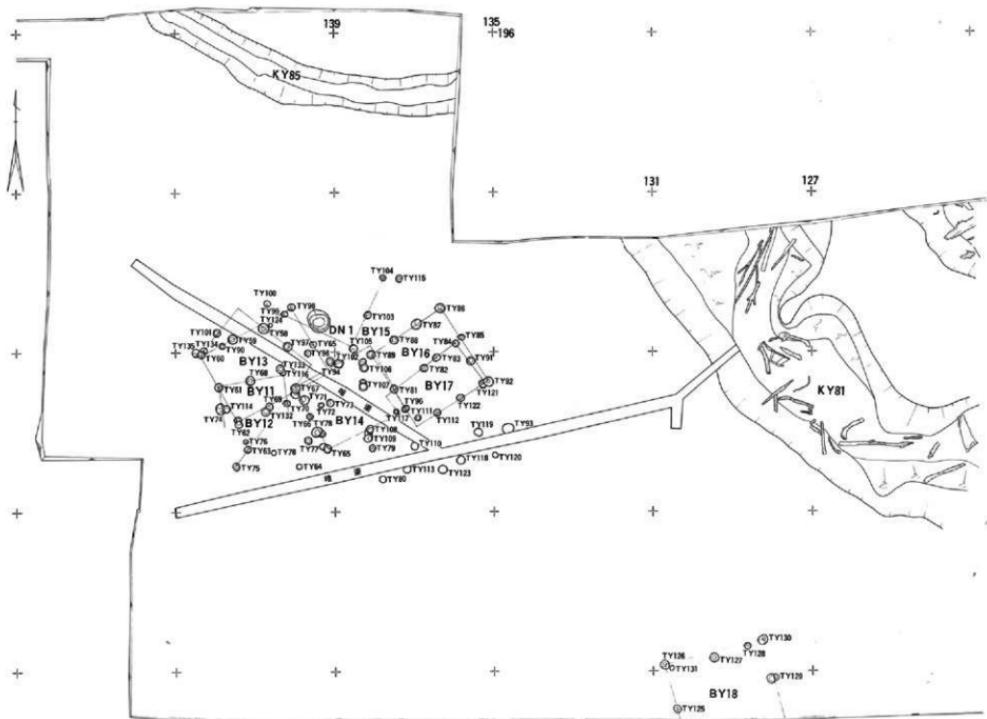
最後に本調査及び本報告書をまとめるにあたって種々な面で献身的な御協力と御理解を賜った上郷地区史跡保存会、地元上郷地区及び地権者の伊藤功氏をはじめその他の地権者の方々、山形県教育庁文化課、県立博物館、山形大学図書館、福島県の資料については吉田雅行氏、水野哲氏をはじめ諸学兄より御教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

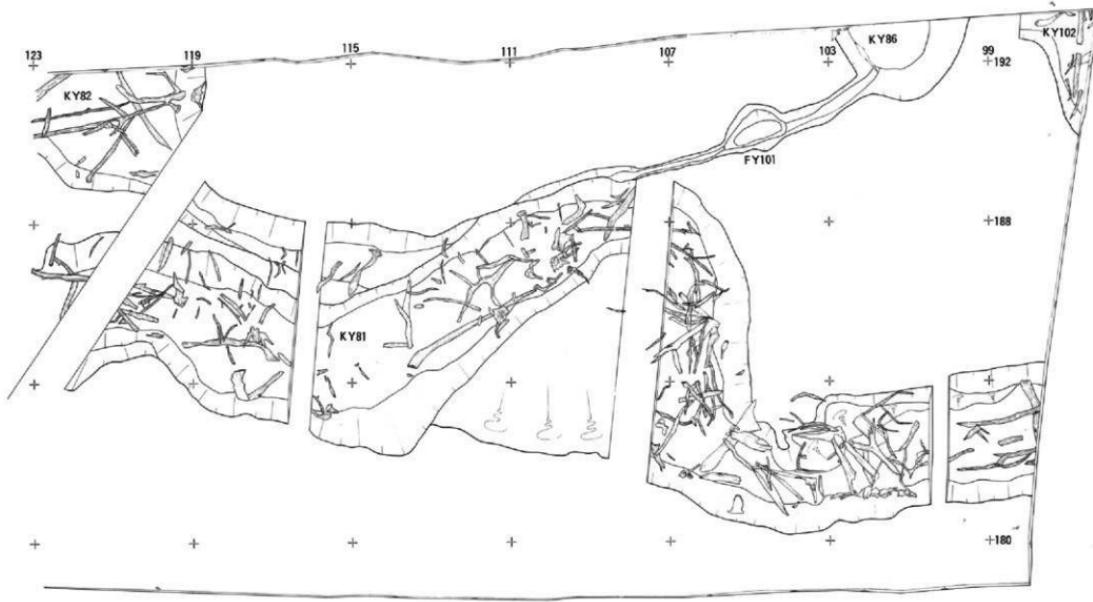
- 動坂貝塚調査会（1978）『文京区動坂遺跡』
手塚 孝・菊地政信（1985）『上浅川遺跡』（米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集）
古泉 弘（1983）『江戸を撮る』柏書房
中村 浩（1979）『陶邑IV』（大阪府文化財調査報告書第31輯）
まんぎり会編（1981）『並原』（米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集）
手塚 孝・菊地政信（1983）『米沢市万世町桑山团地造成地内埋蔵文化財報告書第II集』
（米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集）
手塚 孝（1979）『八幡原No43〔比丘尼平〕遺跡発掘調査報告書』



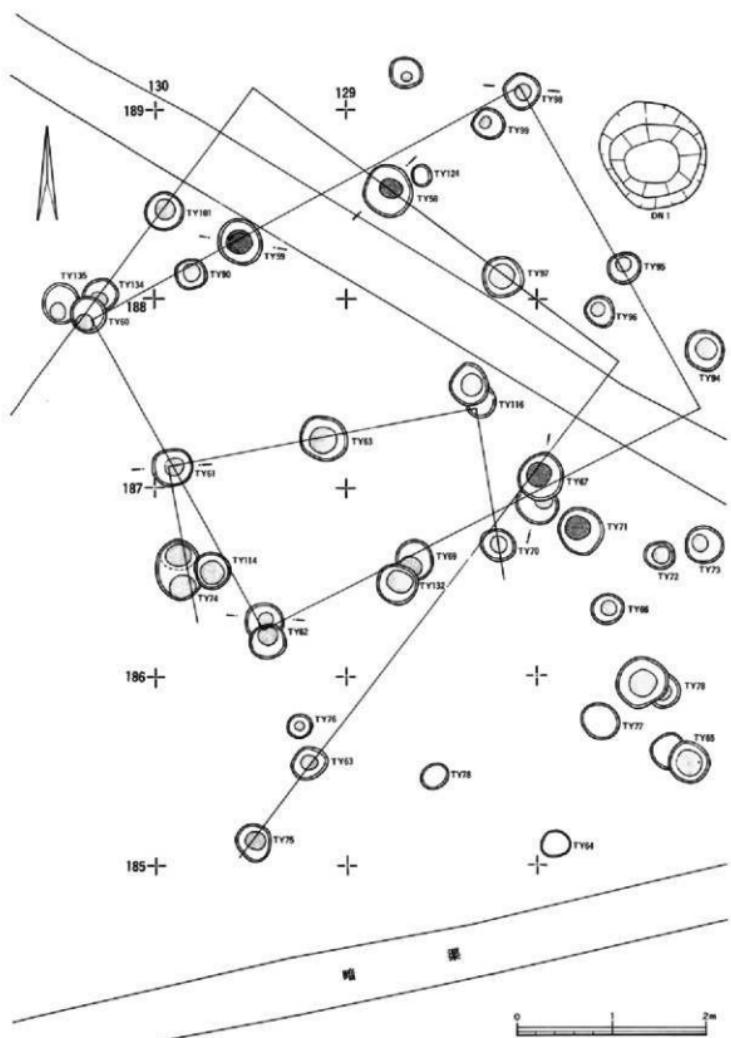
第1図 上浅川遺跡第3次調査グリット配図並に調査区全体図



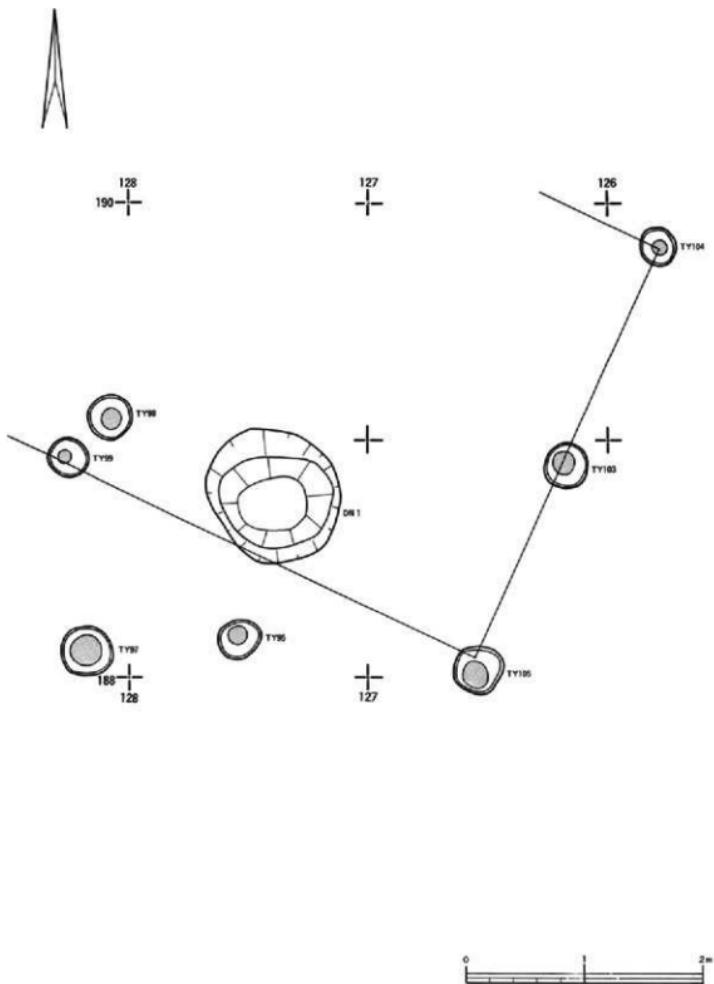
第2図 上浅川流域第3次調査B区全体図(1)



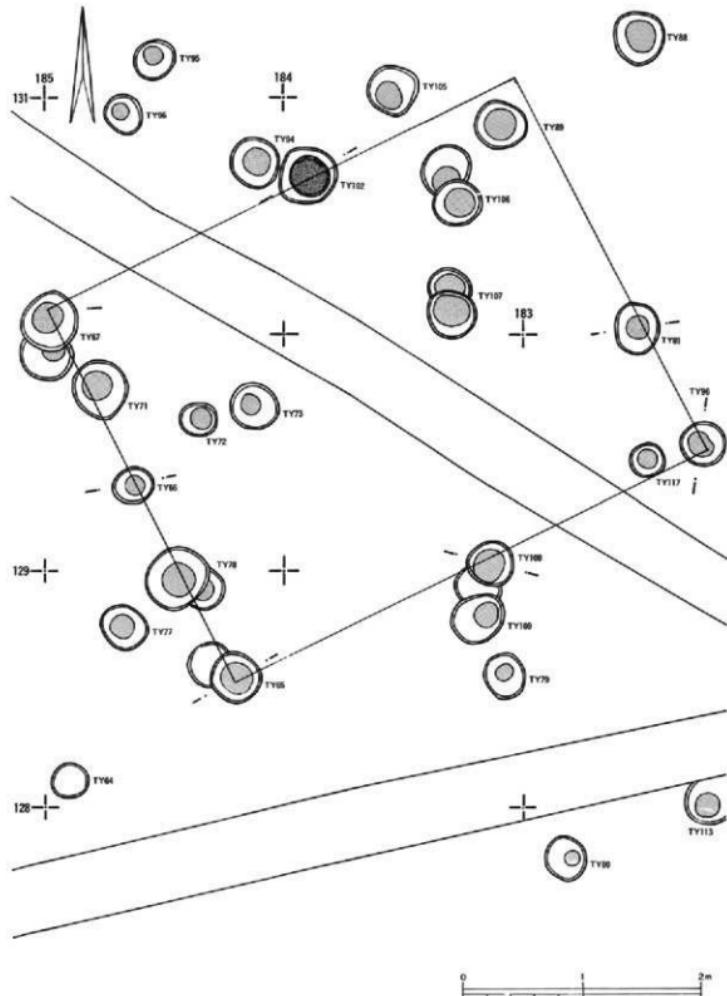
第3図 上浅川道路第3次調査B区全体図(2)



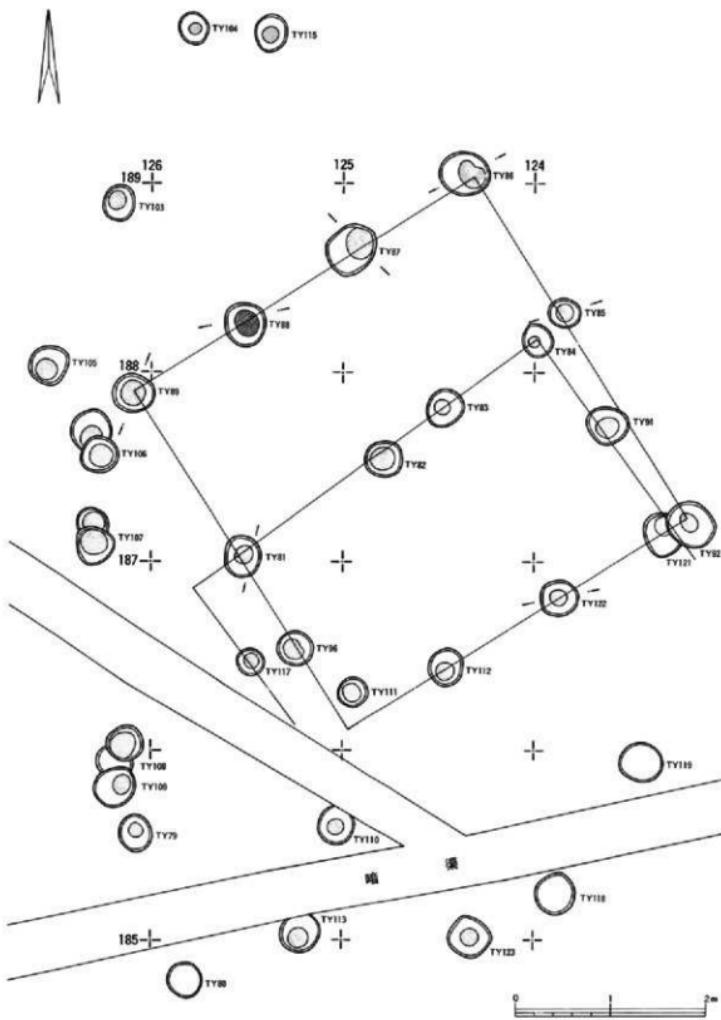
第4図 上浅川遺跡第3次調査BY11・12・13平面図



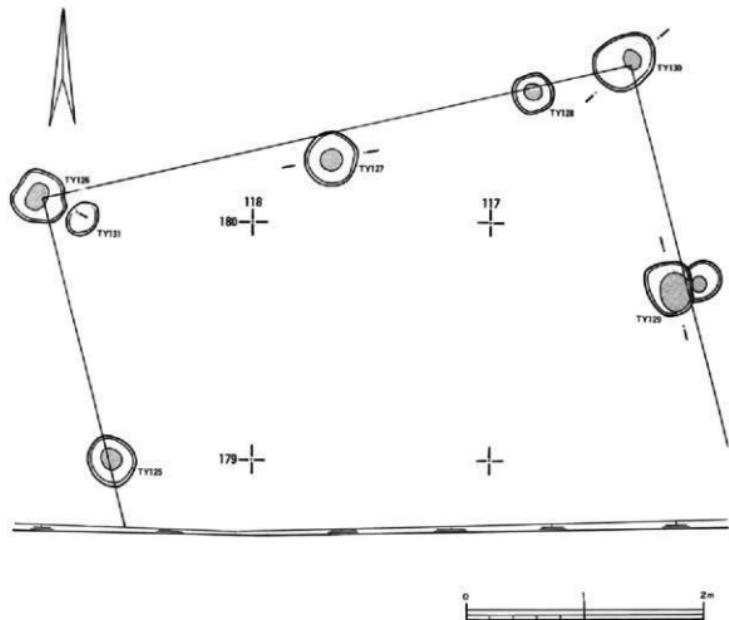
第5図 上浅川遺跡第3次調査BY14平面図



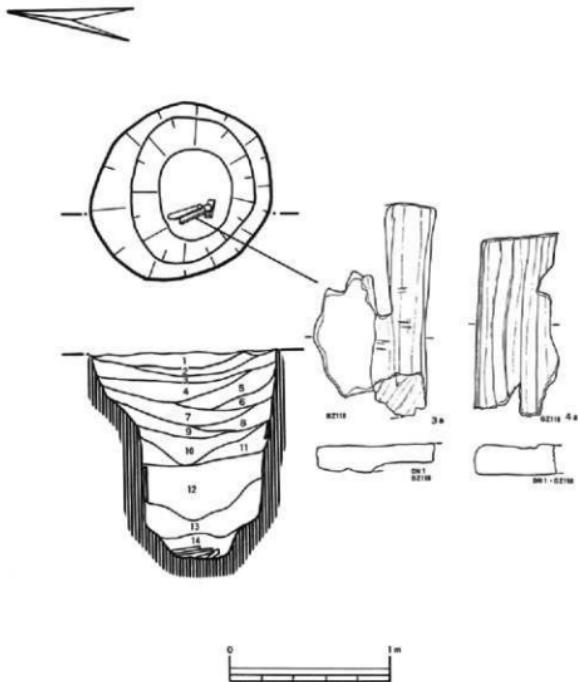
第6図 上浅川遺跡第3次調査BY15平面図



第7図 上浅川遺跡第3次調査BY16・17平面図

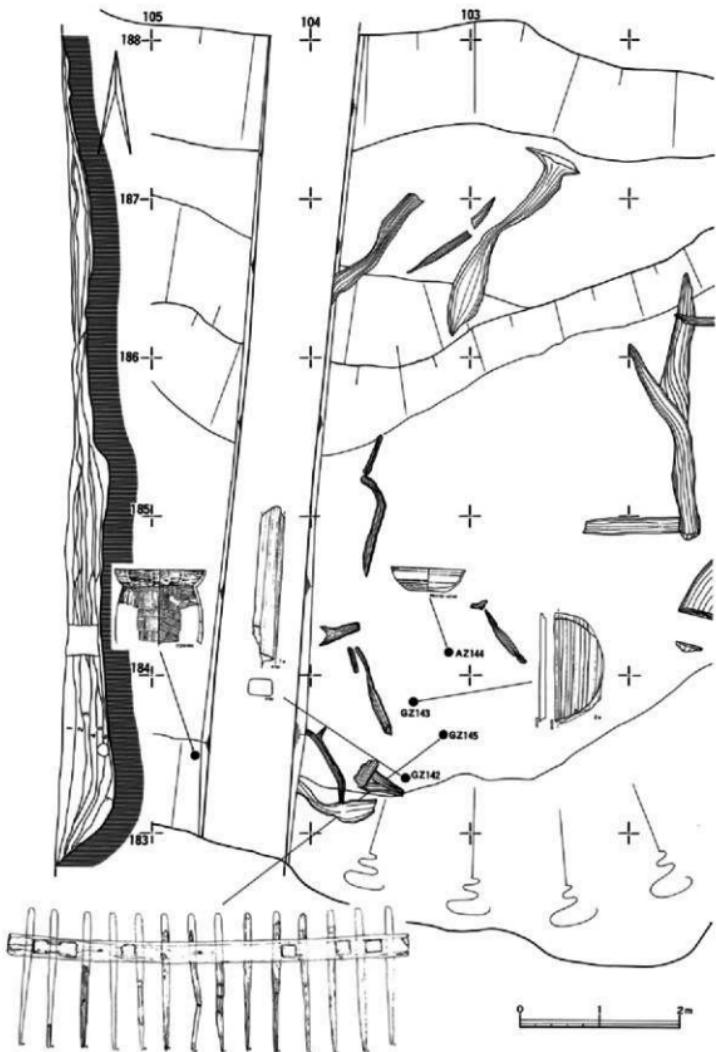


第8図 上浅川遺跡第3次調査BY18平面図

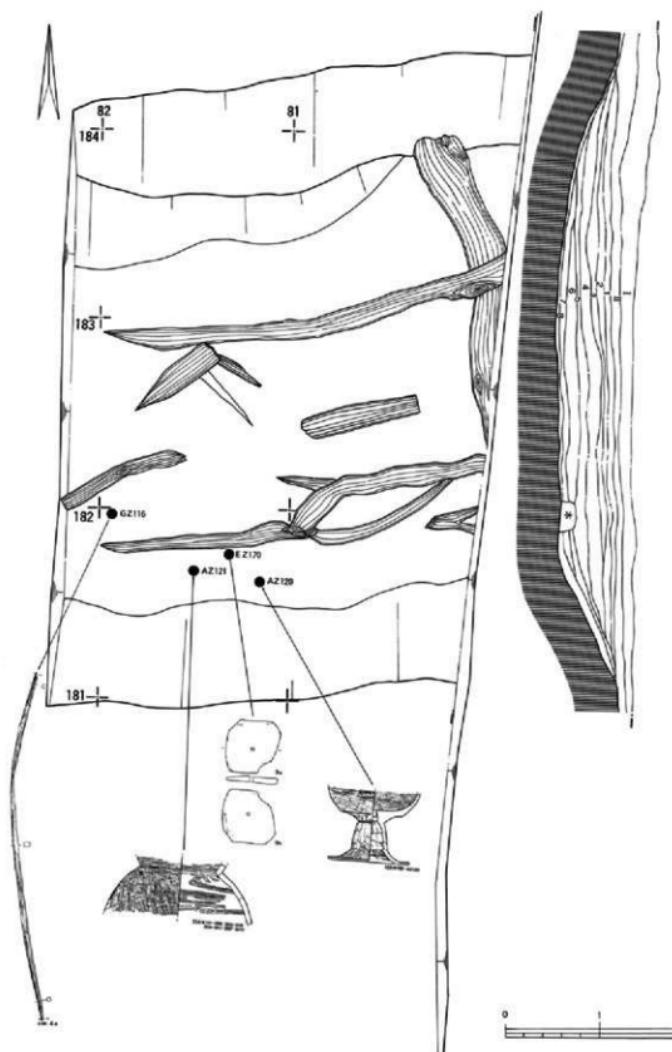


層 No.	土 色	土 質	備 考
1	褐色10YR 4/4	砂質	
2	黒褐色10YR 1/3	シルト	
3	暗褐色10YR 4/3	シルト	
4	灰褐色10YR 4/2	シルト	
5	にぶい黄褐色10YR 5/3	シルト	
6	暗褐色10YR 3/4	シルト	
7	暗褐色10YR 3/4	シルト	
8	灰オリーブ色5Y 4/2	シルト	
9	暗褐色10YR 3/4	シルト	
10	青黒色5B 2/1	泥 質	
11	青黒色10BG 1.7/1	シルト	
12	青黒色10BG 2/1	泥 質	
13	青黒色5B 2/1	泥 質	
14	暗青灰色5B 3/1	泥 質	砂質を含む

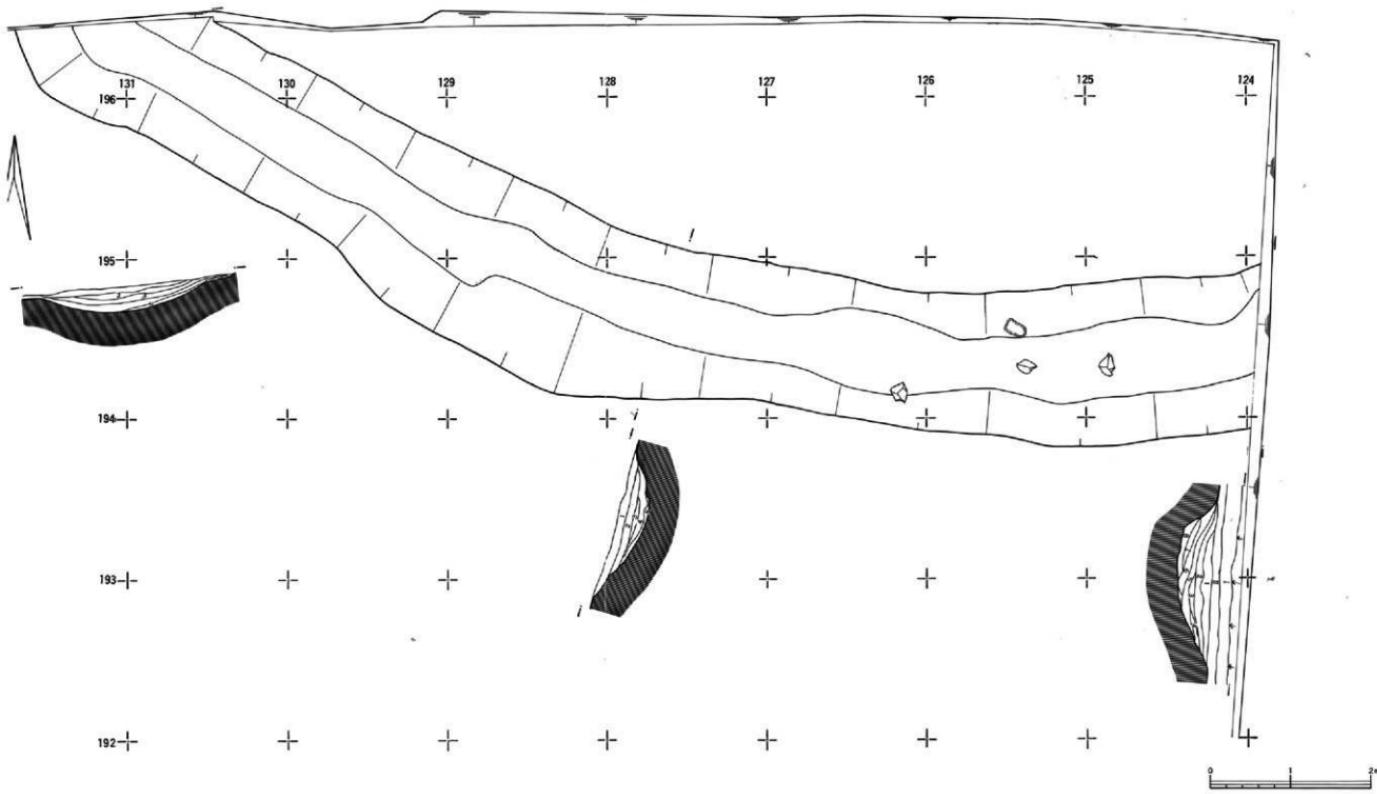
第9図 上浅川遺跡第3次調査DN 1 平面図



第10図 上浅川遺跡第3次調査KY81平面図(1)

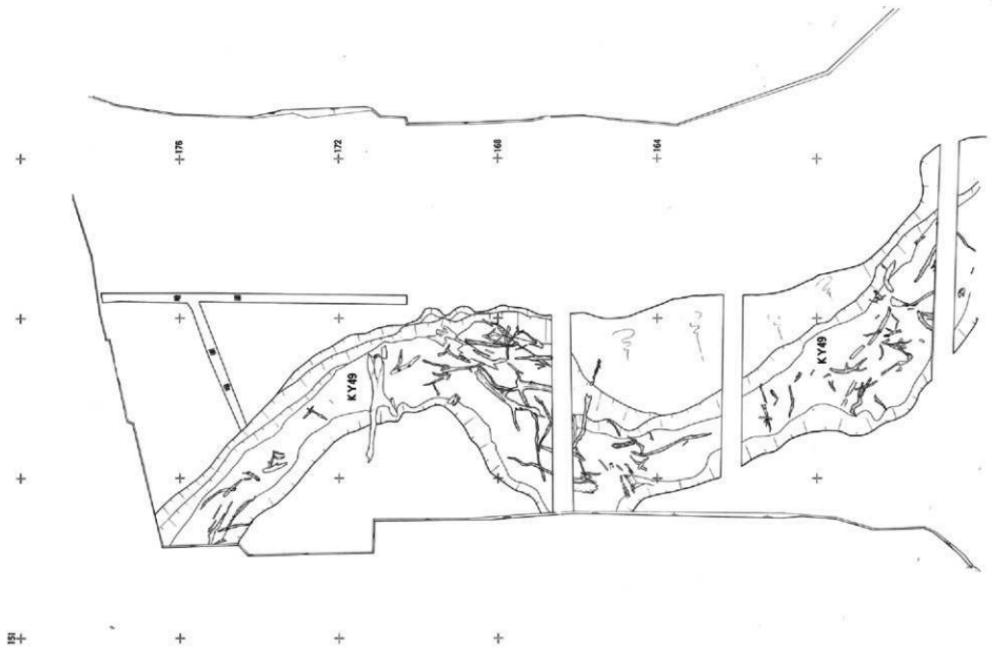


第11図 上浅川遺跡第3次調査KY81平面図(2)

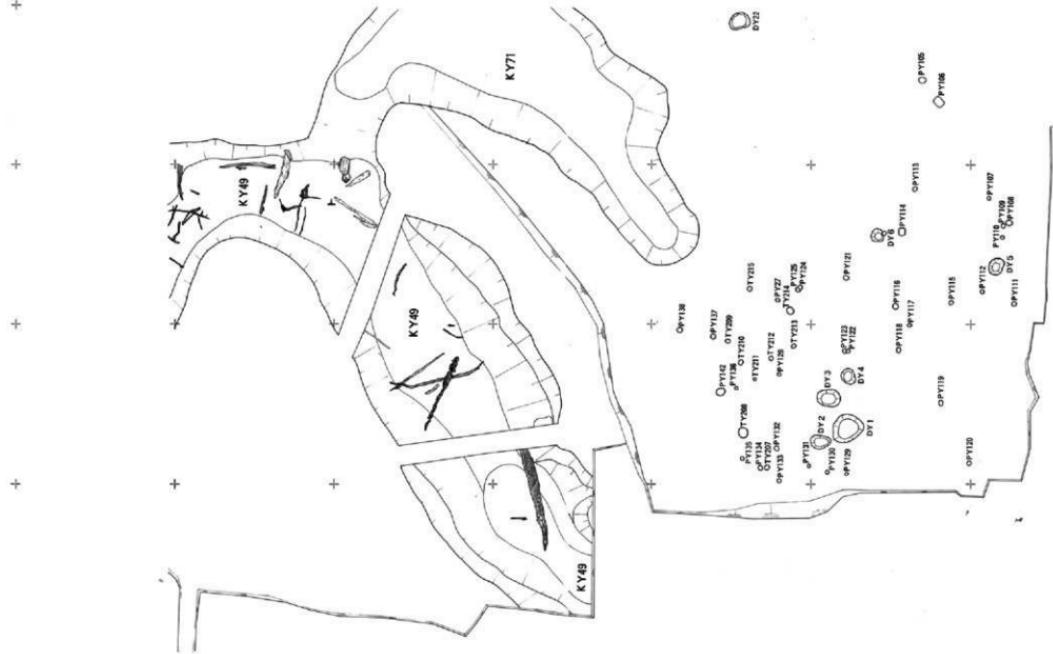


上流川遺跡第3次調査KY86平面図

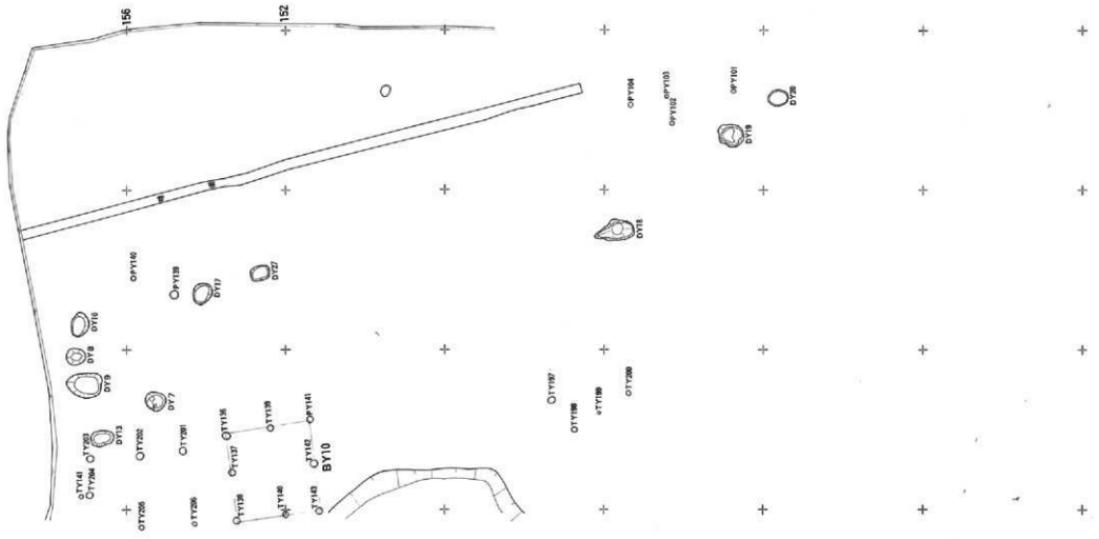
第13圖 上流川道跡第3次測量C区全体図(1)



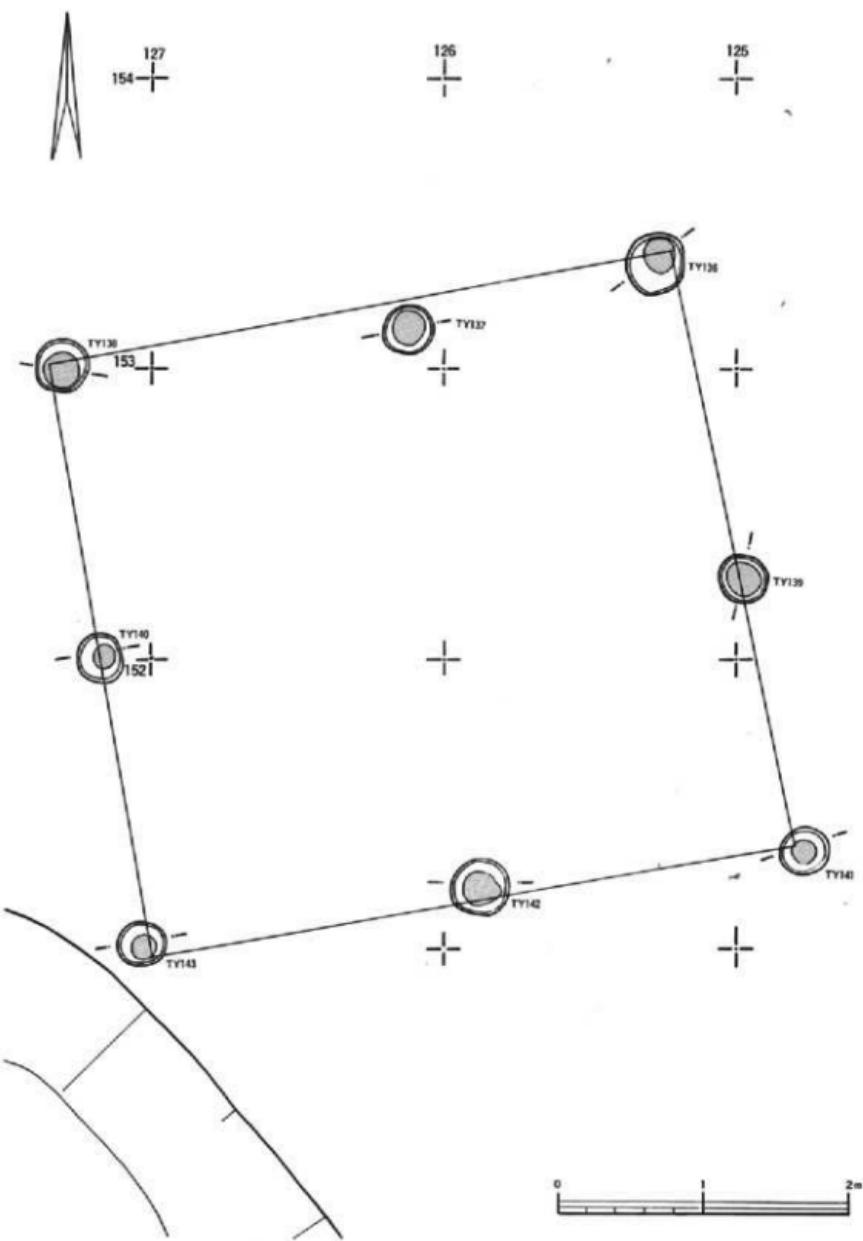
+160



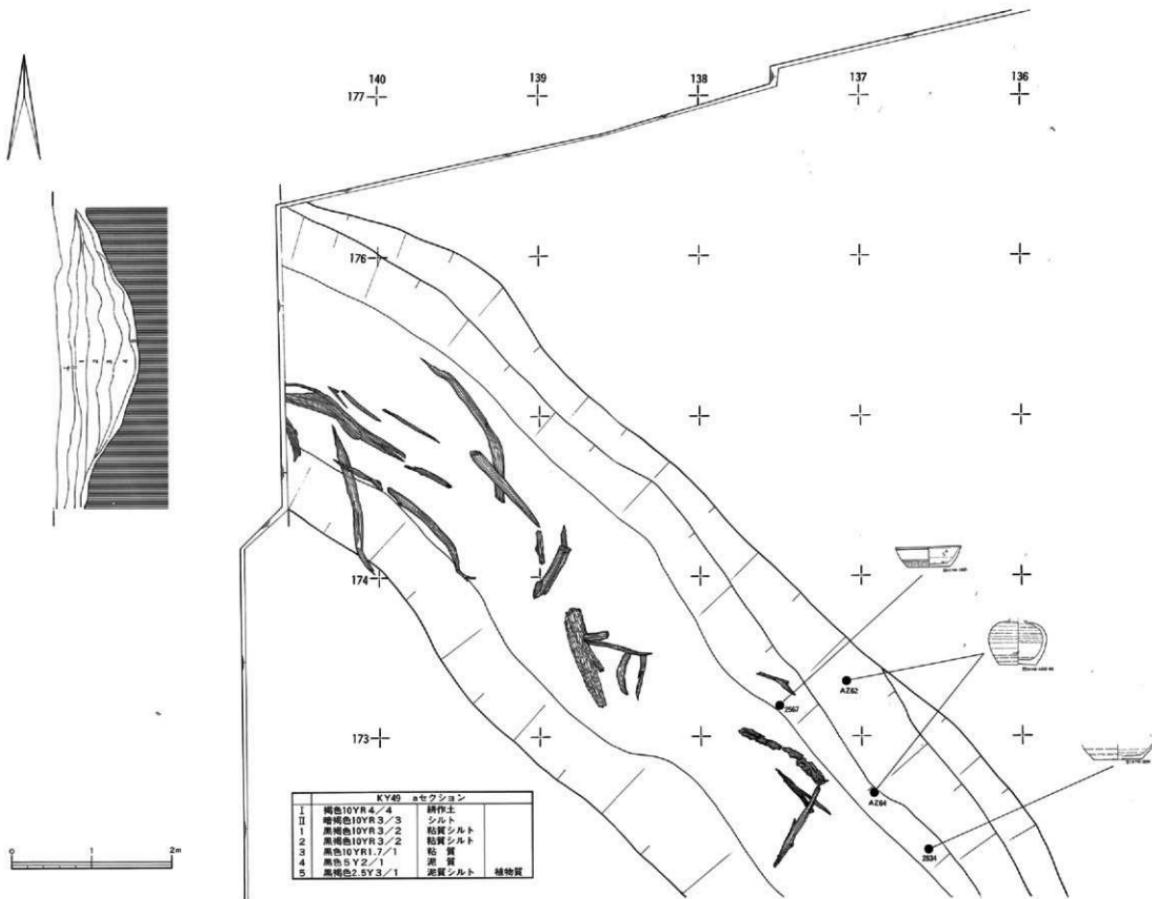
第14図 上浅川遺跡第3次調査C区全体図(2)



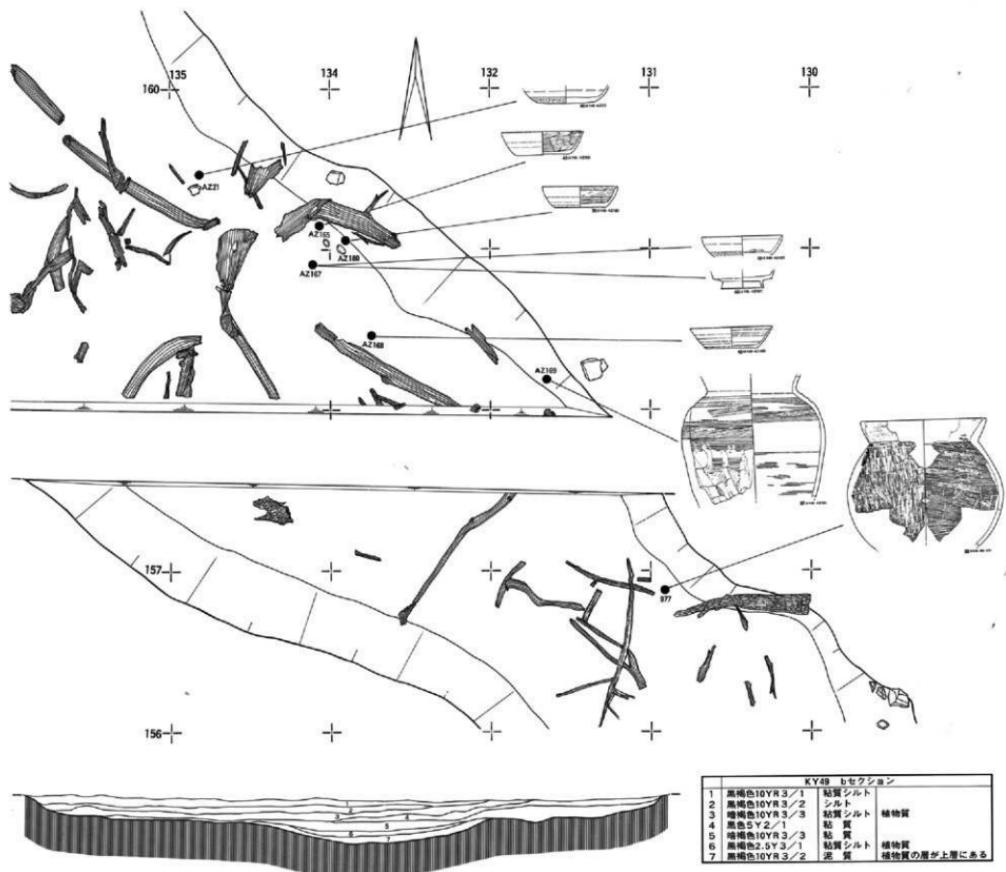
第15図 上浅川遺跡第3次調査C区全体図(3)



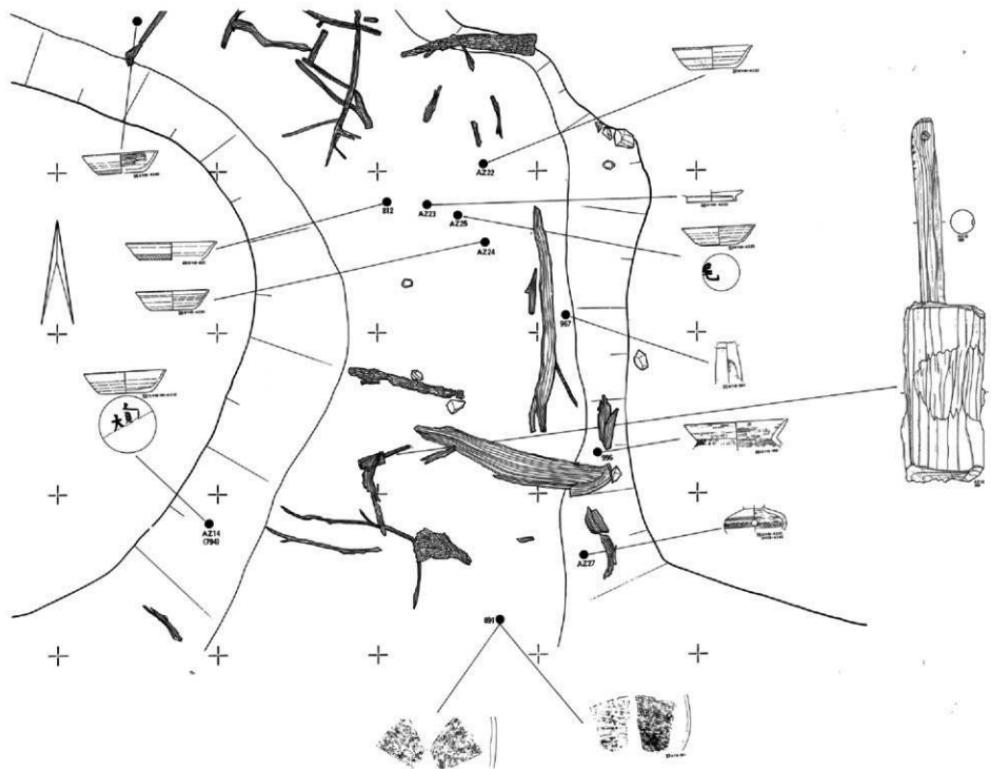
第16図 上浅川遺跡第3次調査BY10平面図



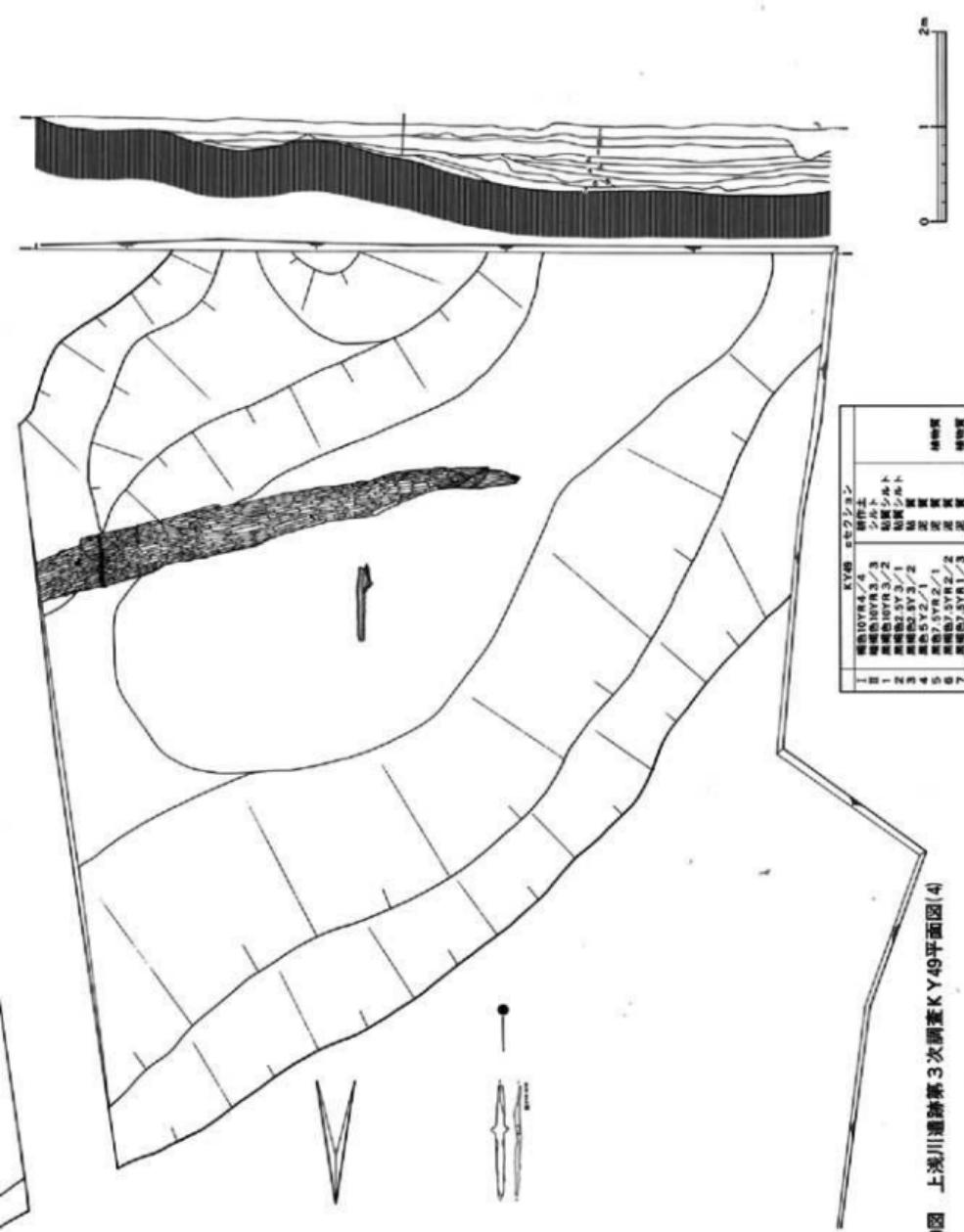
第17図 上流川遺跡第3次調査KY49平面図(1)



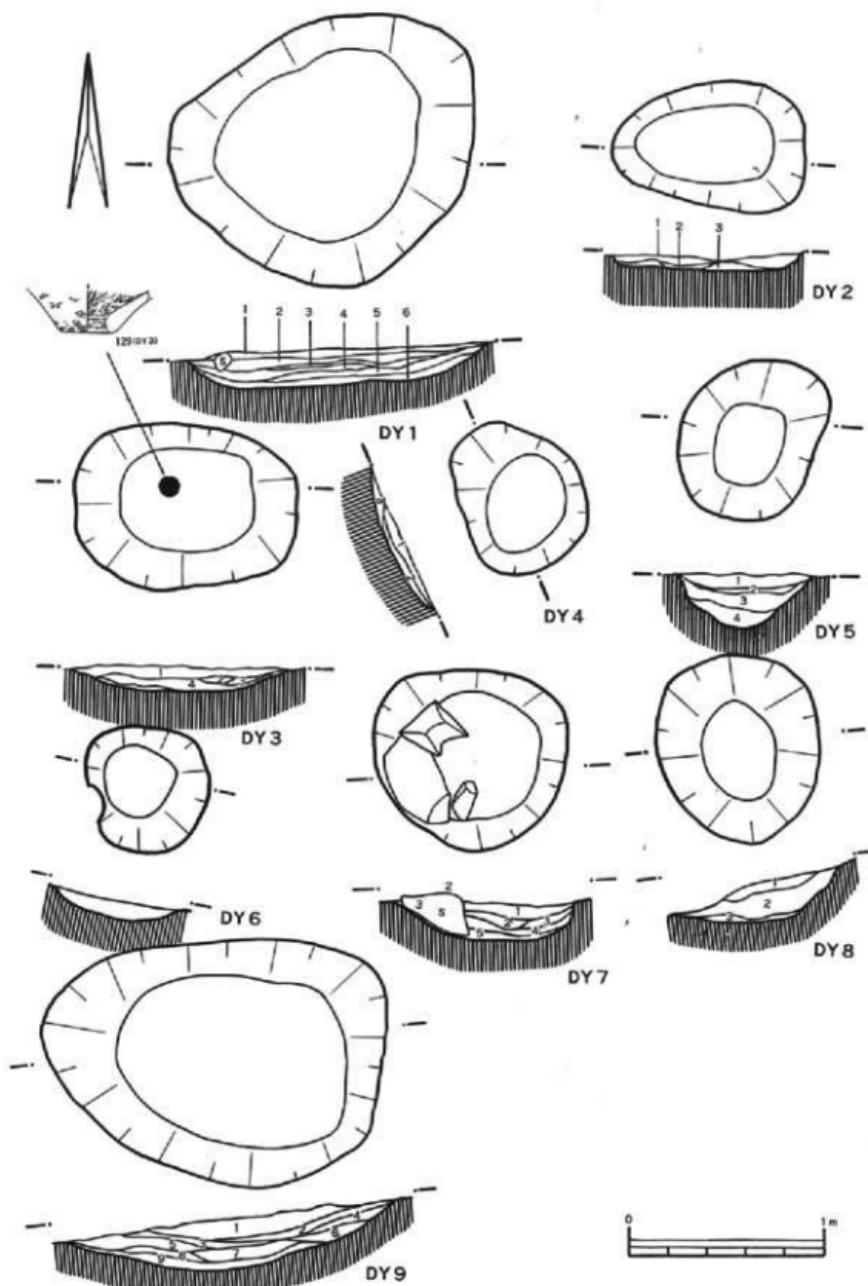
第18図 上浅川遺跡第3次調査KY49平面図(2)



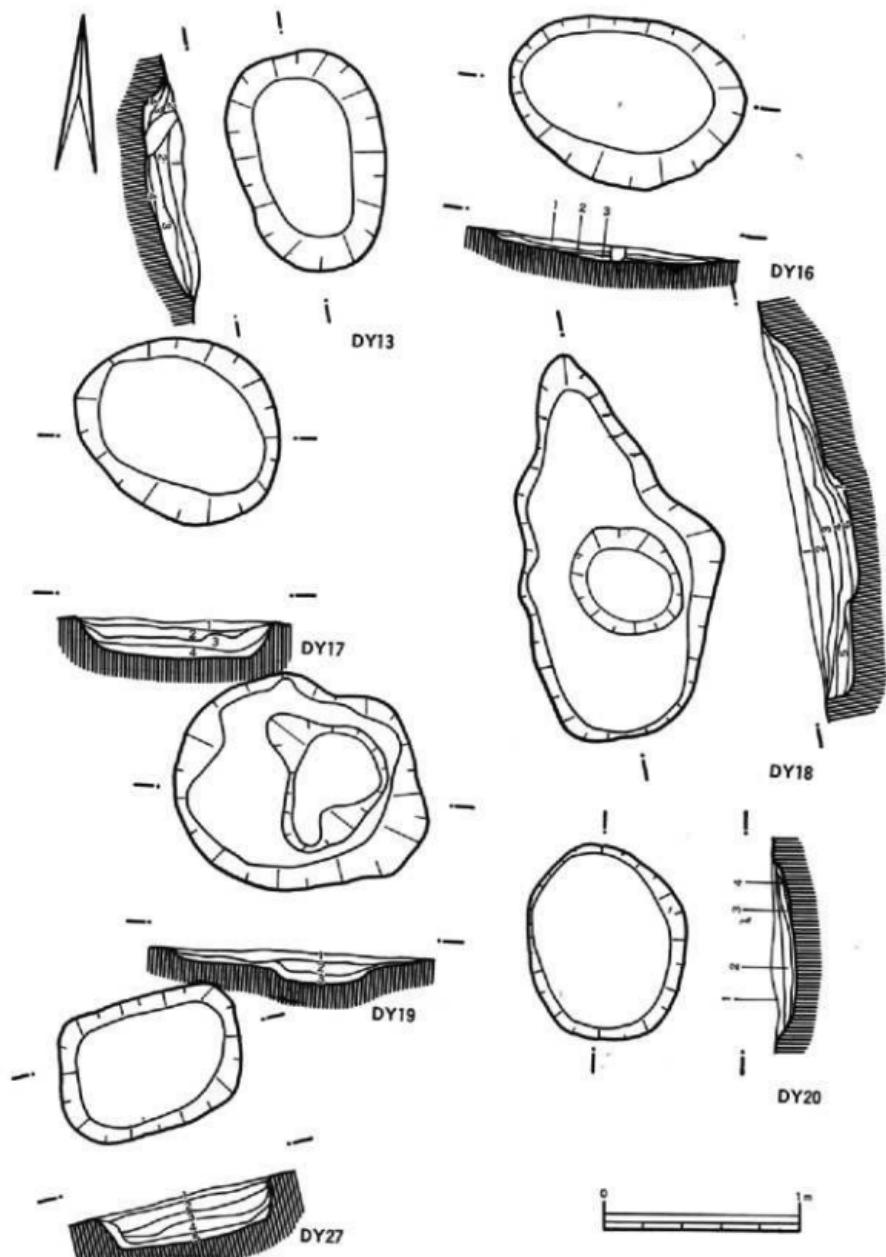
第19図 上浅川遺跡第3次調査KY49平面図(3)



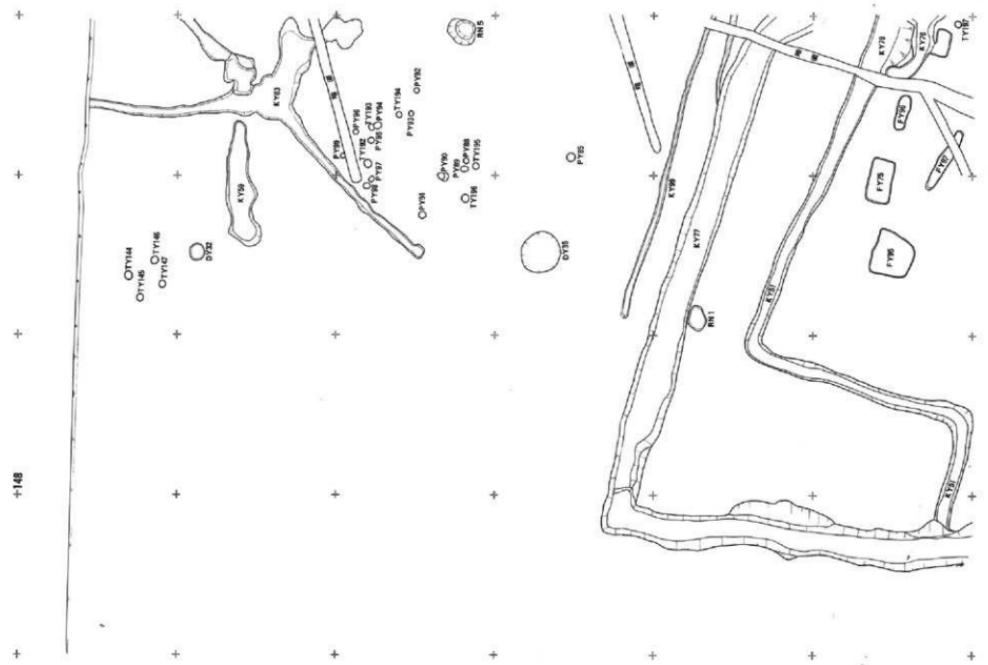
第20図 上浅川遺跡第3次調査KY49平面図(4)



第21図 上浅川遺跡第3次調査C区土壤平面図(1)



第22図 上浅川遺跡第3次調査C区土器平面図(2)



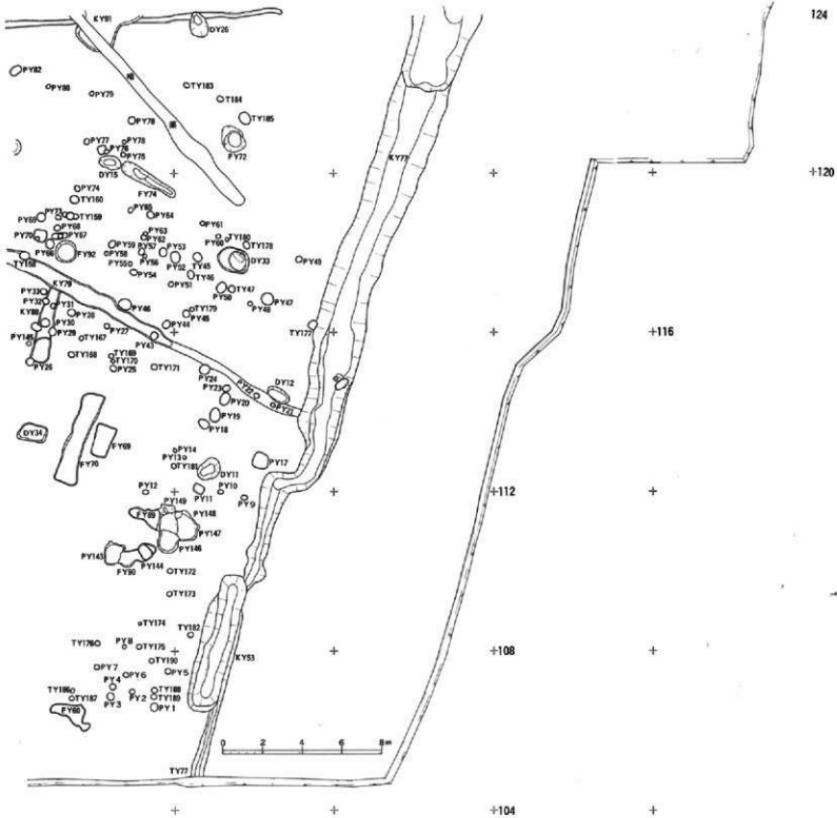
第23回 上浅川遺跡第3次調査D区全体図(1)



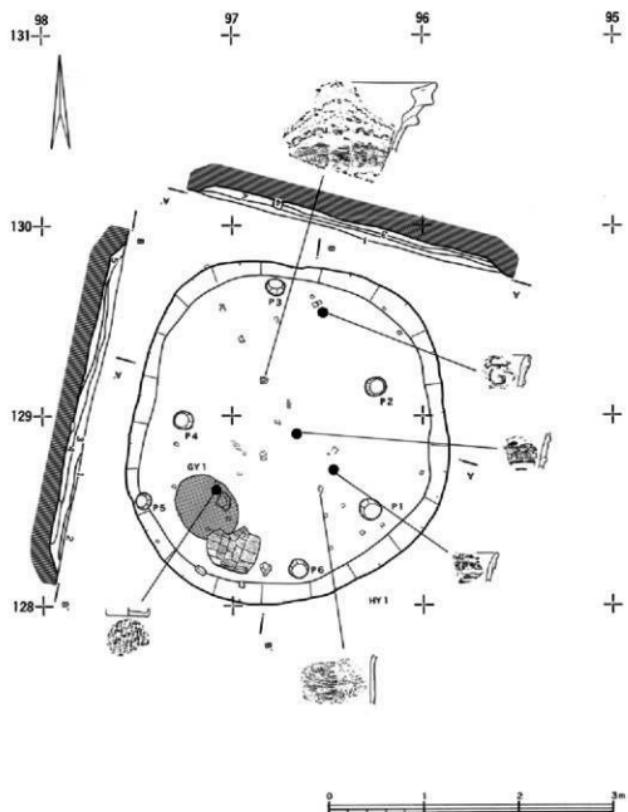
第24図 上浅川遺跡第3次調査D区全体図



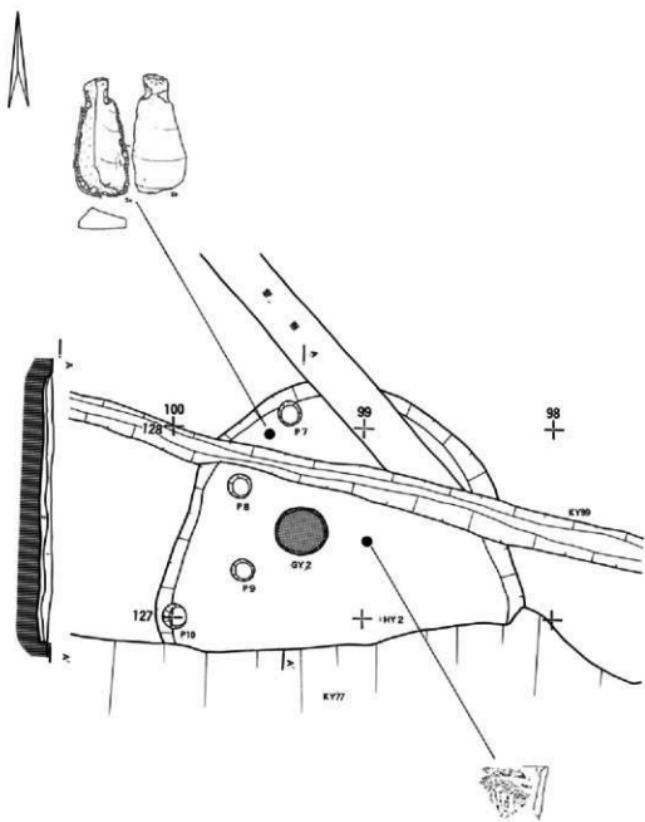
第25図 上浅川遺跡第3次調査D区全体図(3)



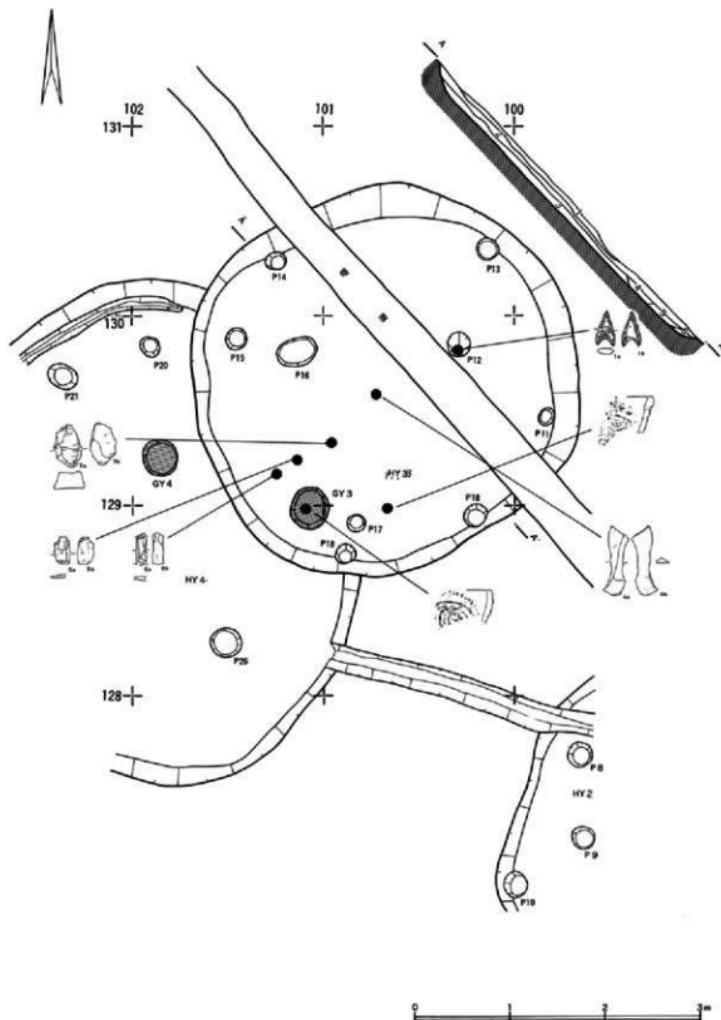
第26図 上浅川遺跡第3次調査D区全体図(4)



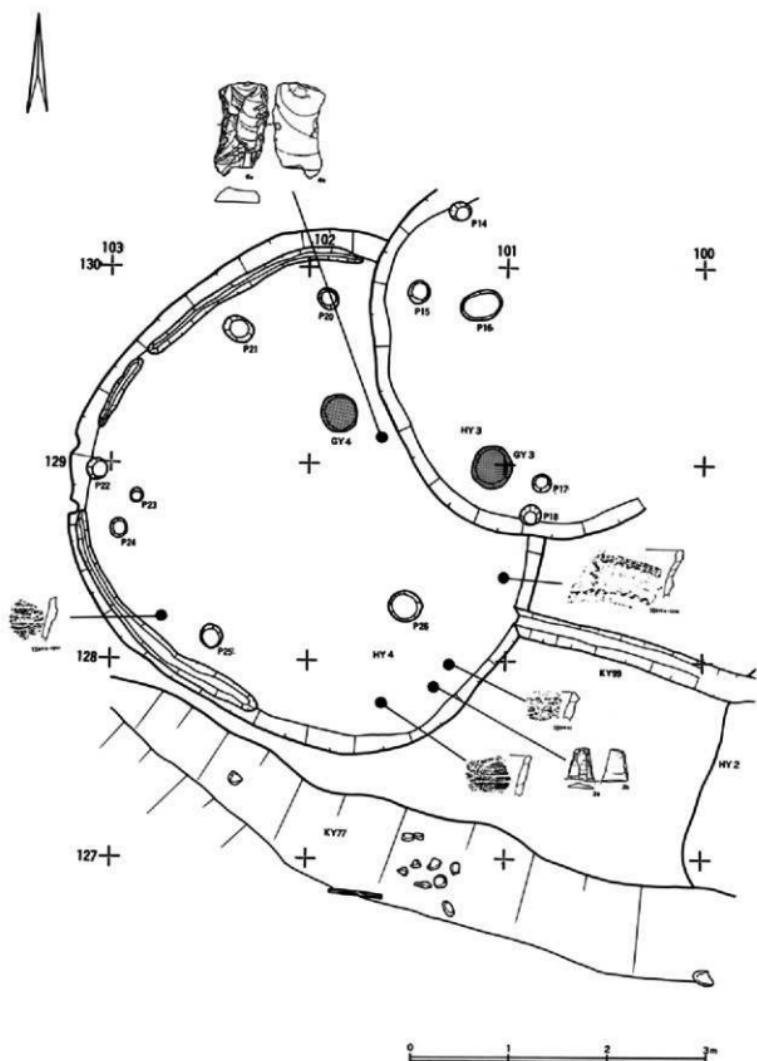
第28図 上浅川遺跡第3次調査HY 1平面図



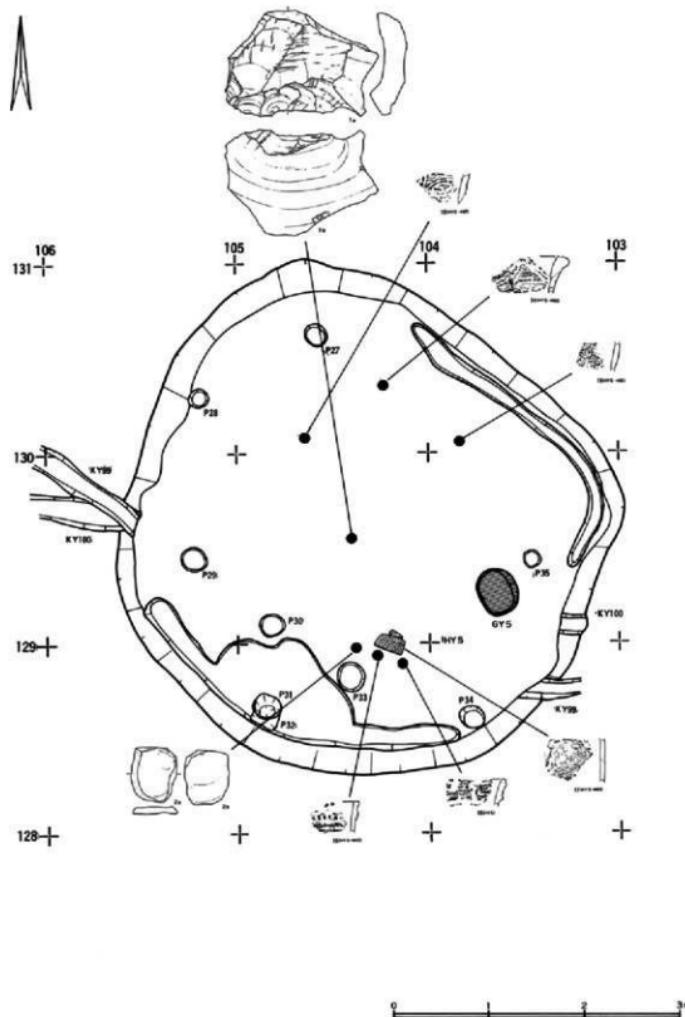
第29図 上浅川遺跡第3次調査HY 2平面図



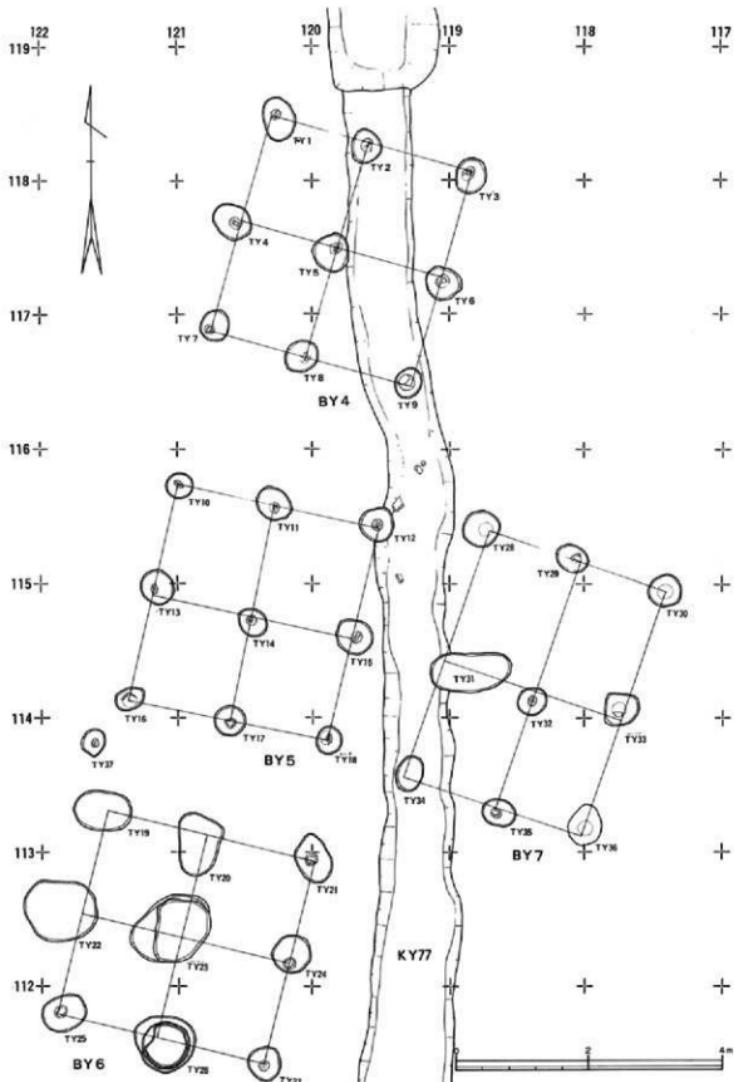
第30図 上浅川遺跡第3次調査HY 3平面図



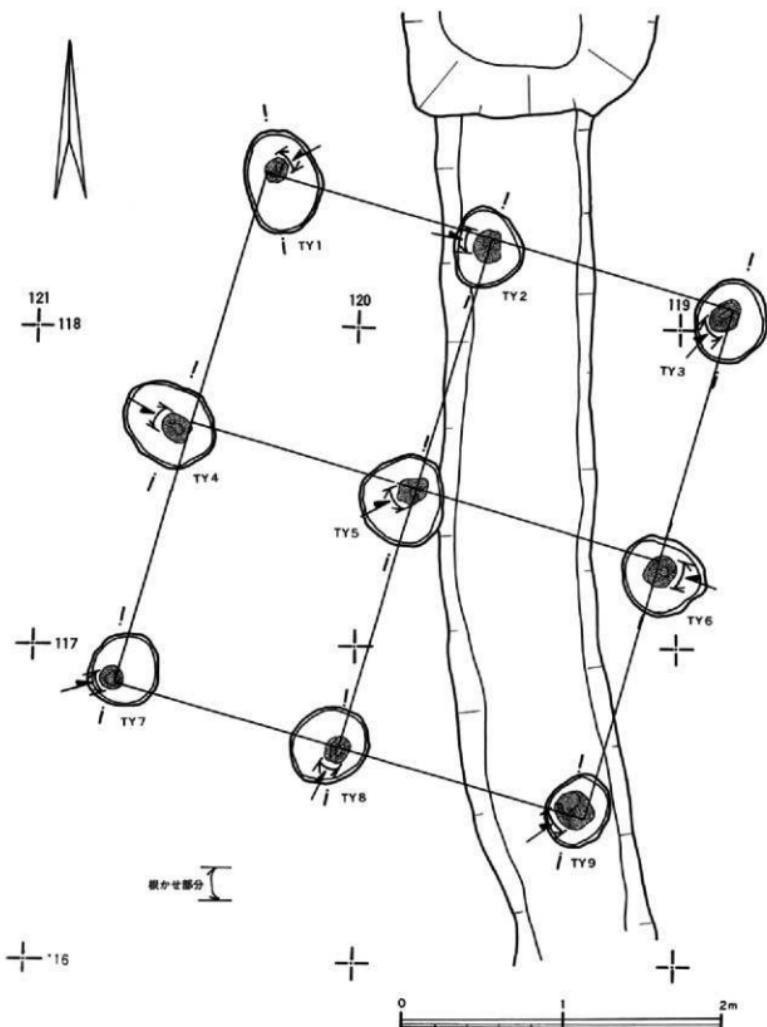
第31図 上浅川遺跡第3次調査HY 4平面図



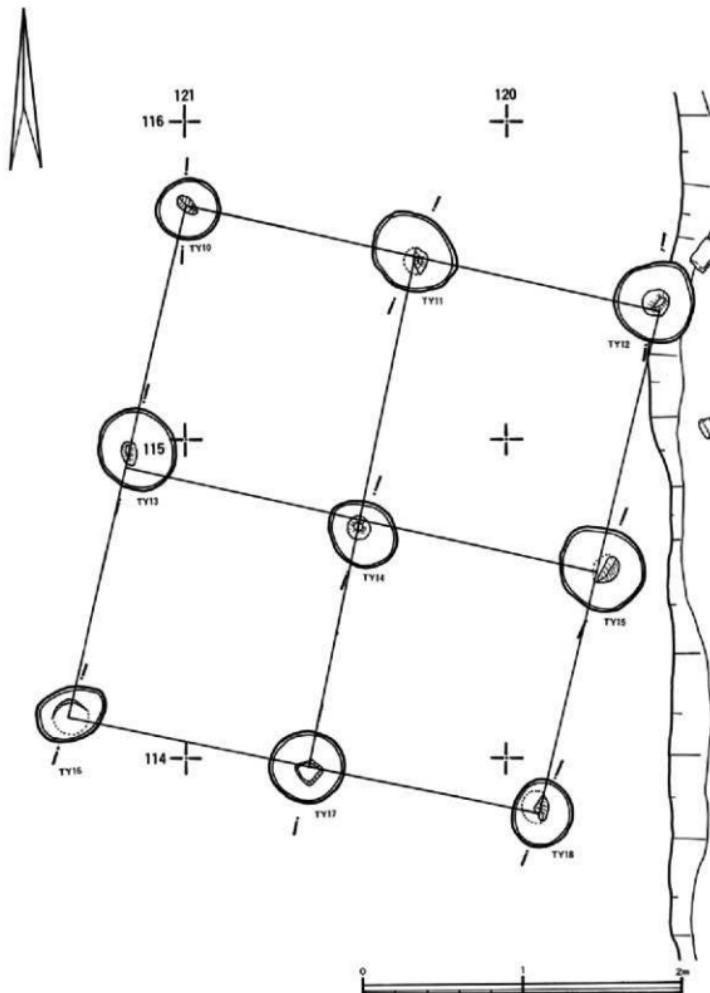
第32図 上浅川遺跡第3次調査HY5平面図



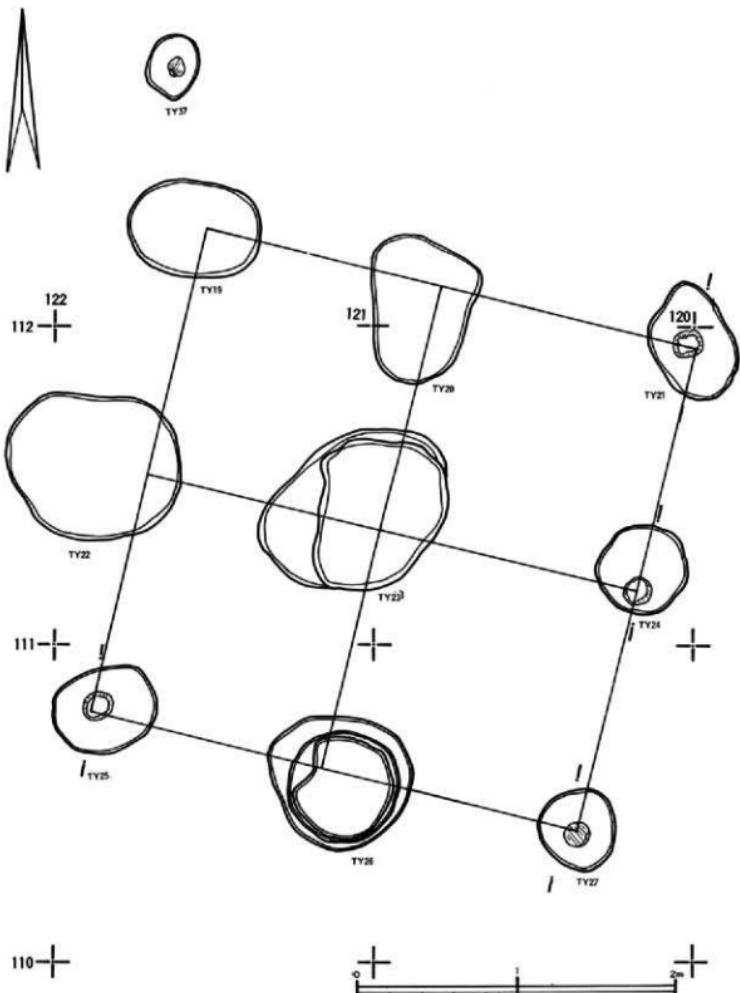
第34図 上浅川遺跡第3次調査倉庫跡群全体図



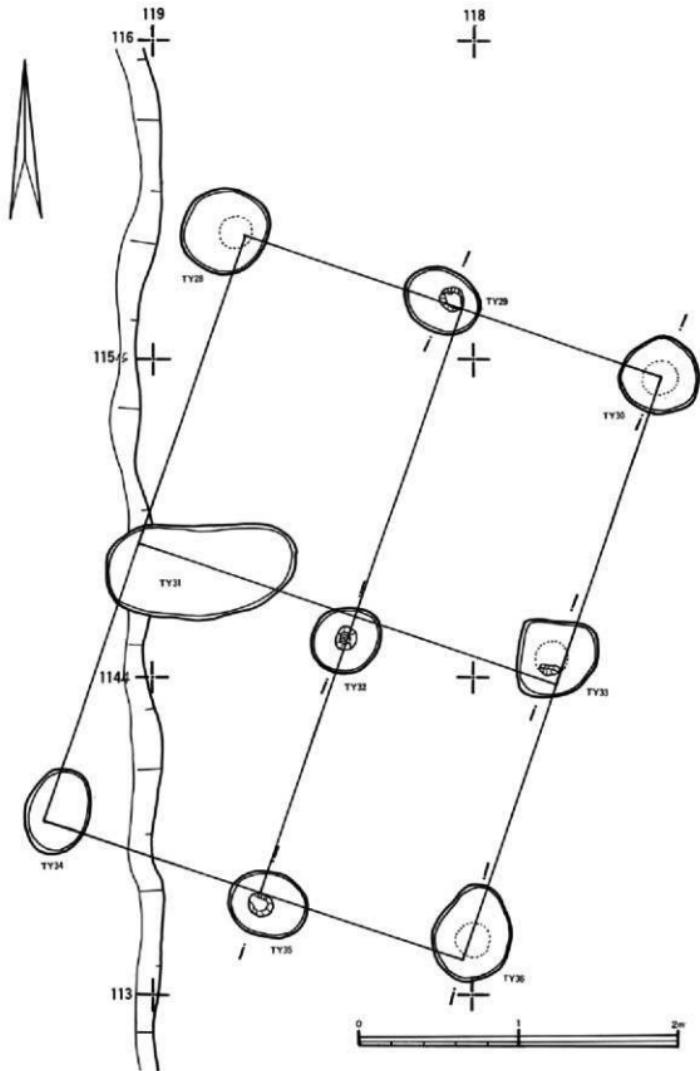
第35図 上浅川遺跡第3次調査BY 4平面図



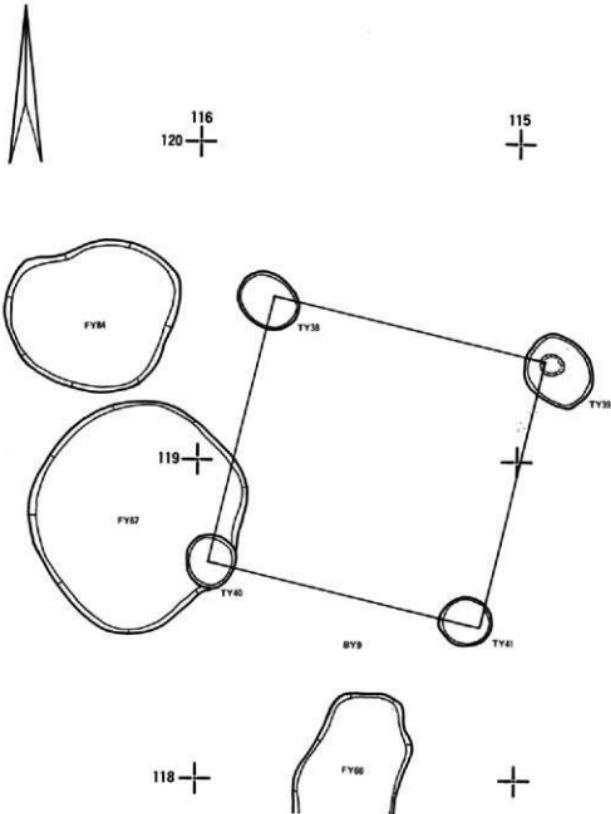
第36図 上浅川遺跡第3次調査BY5平面図



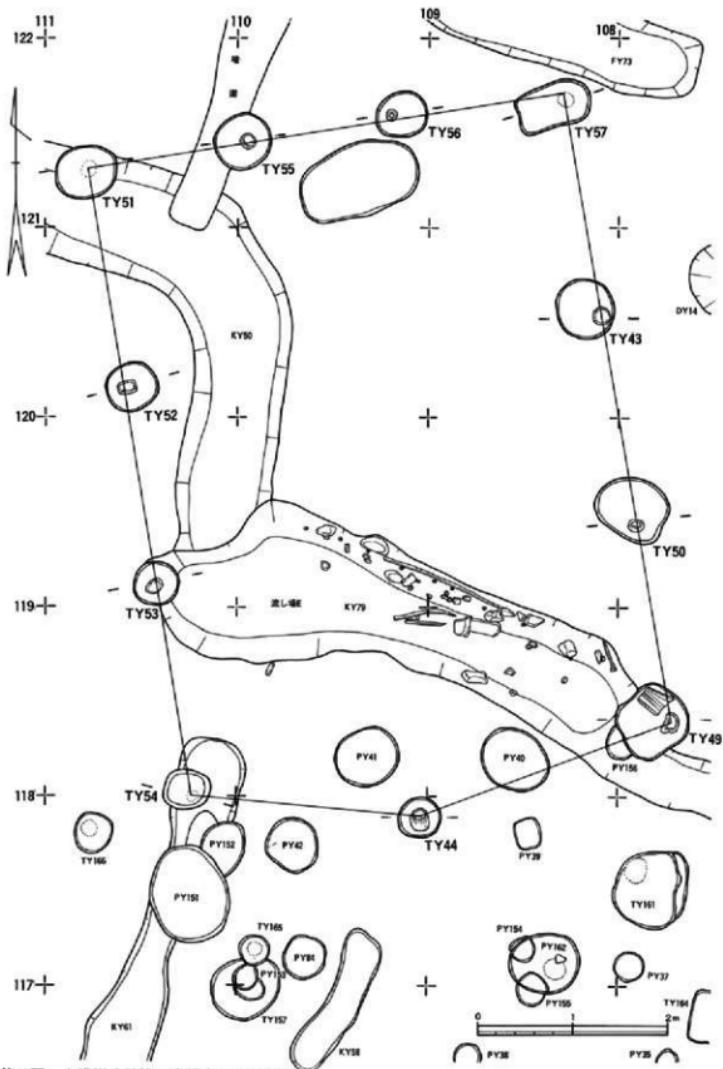
第37図 上浅川遺跡第3次調査B6平面図



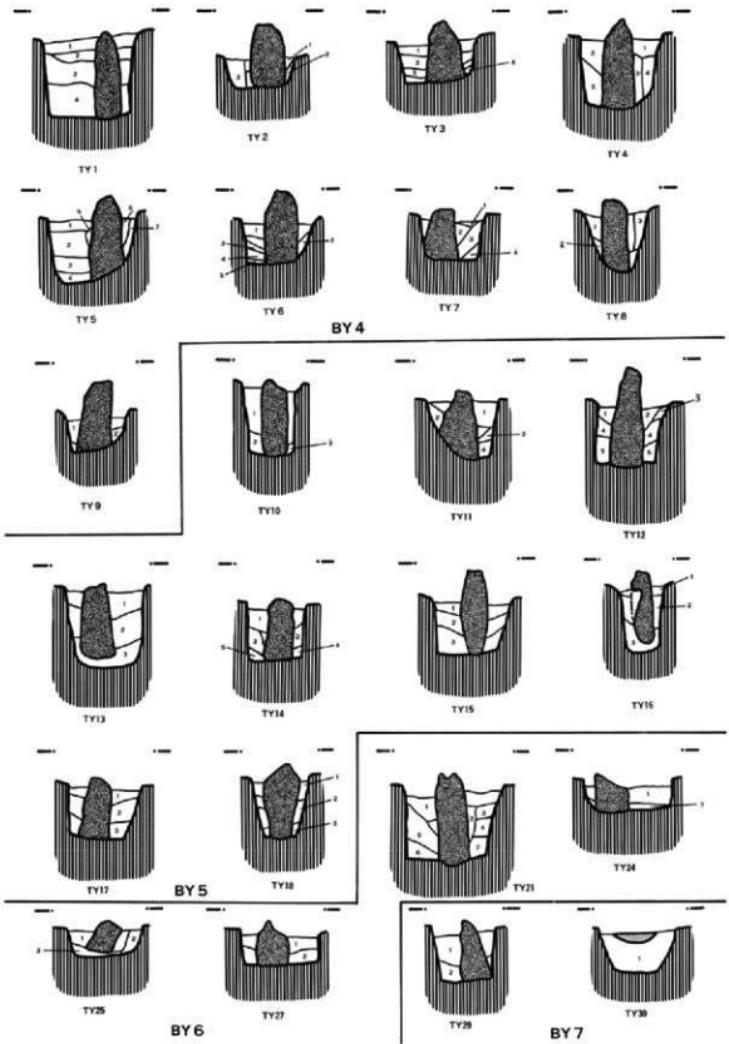
第38図 上浅川遺跡第3次調査BY7平面図



第39図 上浅川遺跡第3次調査B Y 8平面図

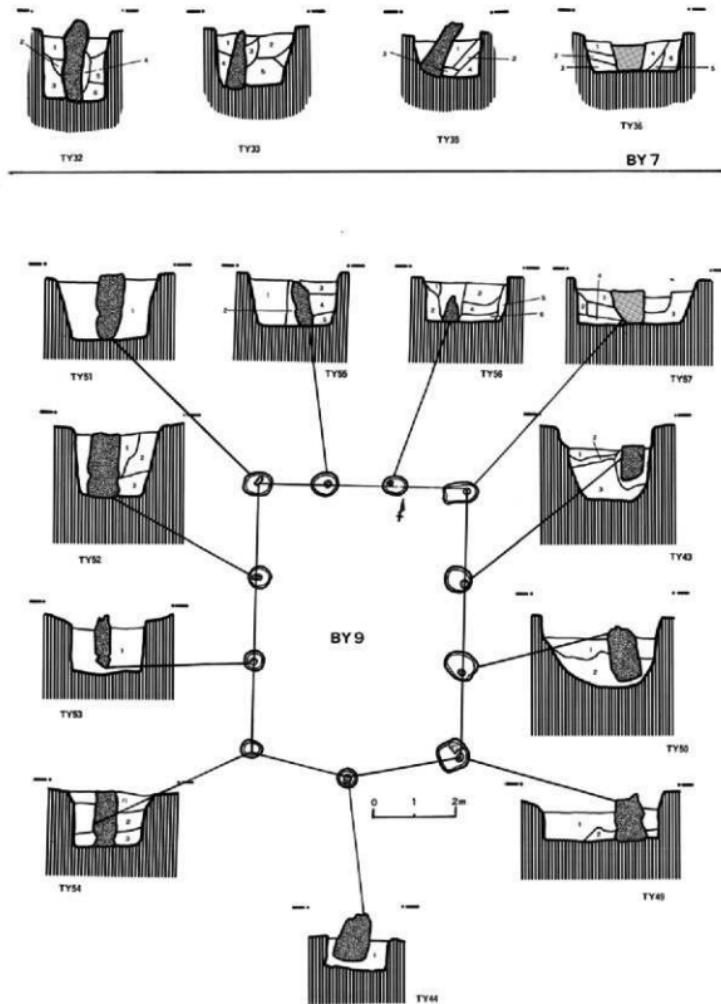


第40図 上浅川遺跡第3次調査BY9平面図

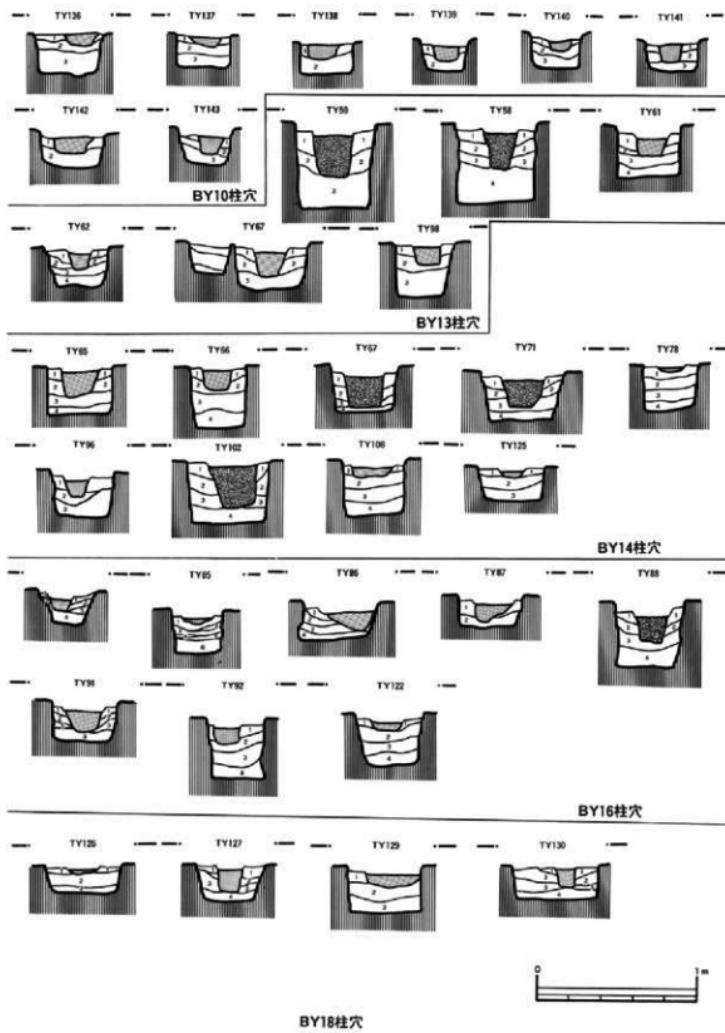


第41図 上浅川遺跡第3次調査D区据立柱建物跡柱穴土層断面図

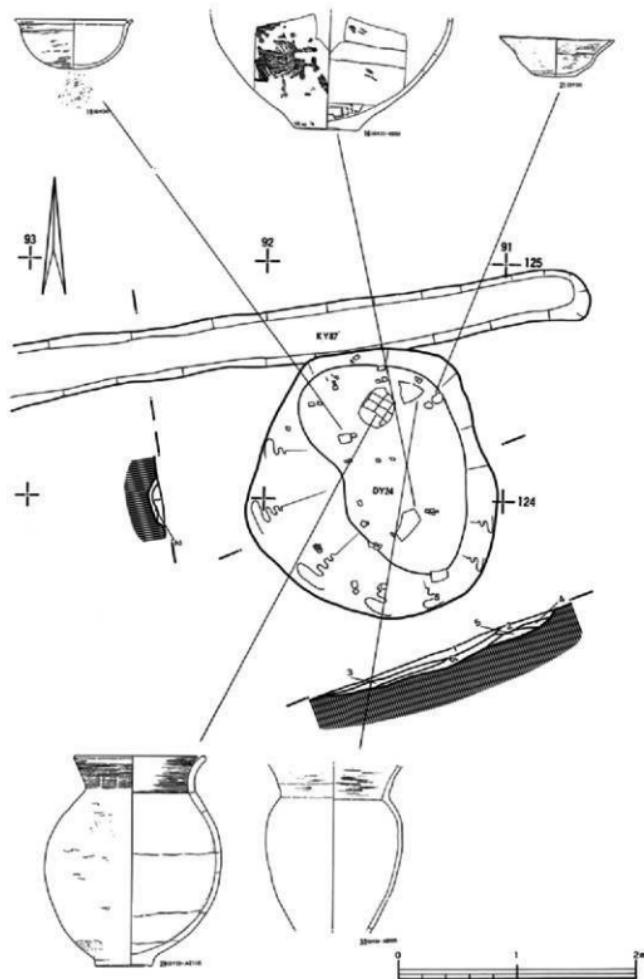
■柱根 ■アタリ



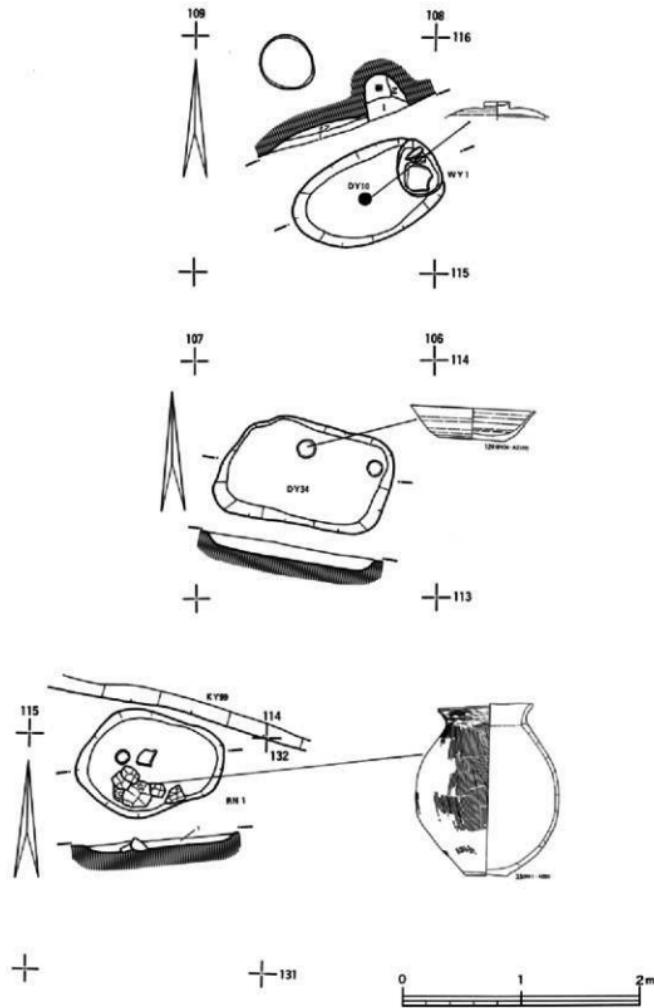
第42図 上浅川遺跡第3次調査D区据立柱建物跡柱穴土層断面図



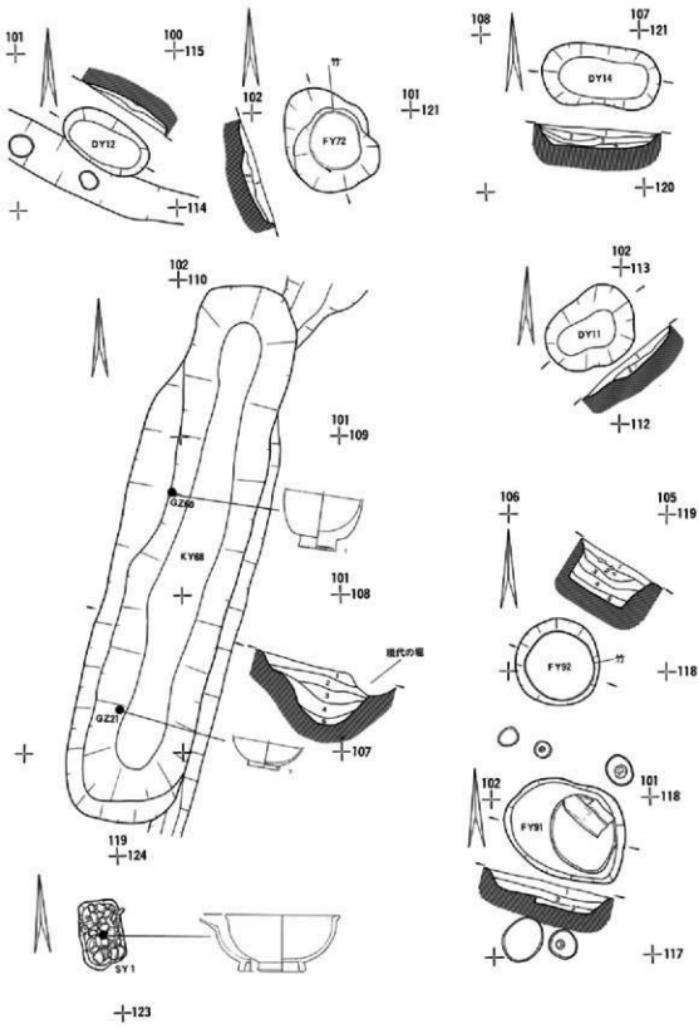
第43図 上浅川遺跡第3次調査B・C区掘立柱建物跡柱穴土層断面図



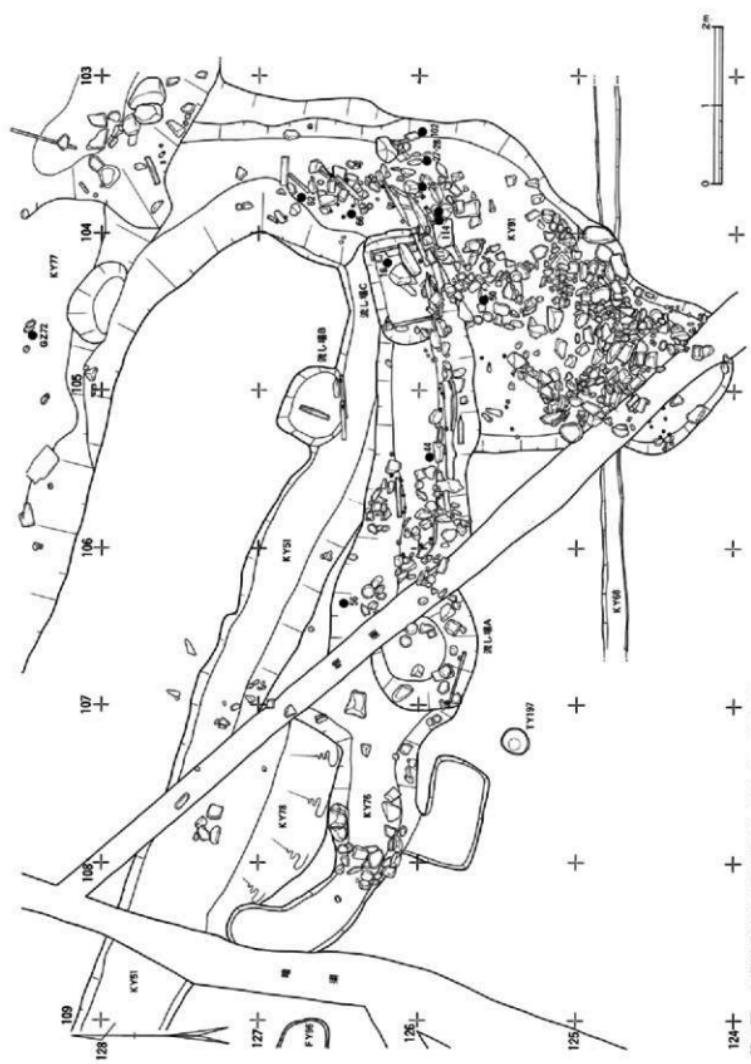
第44図 上浅川遺跡第3次調査D区土壤平面図(1)



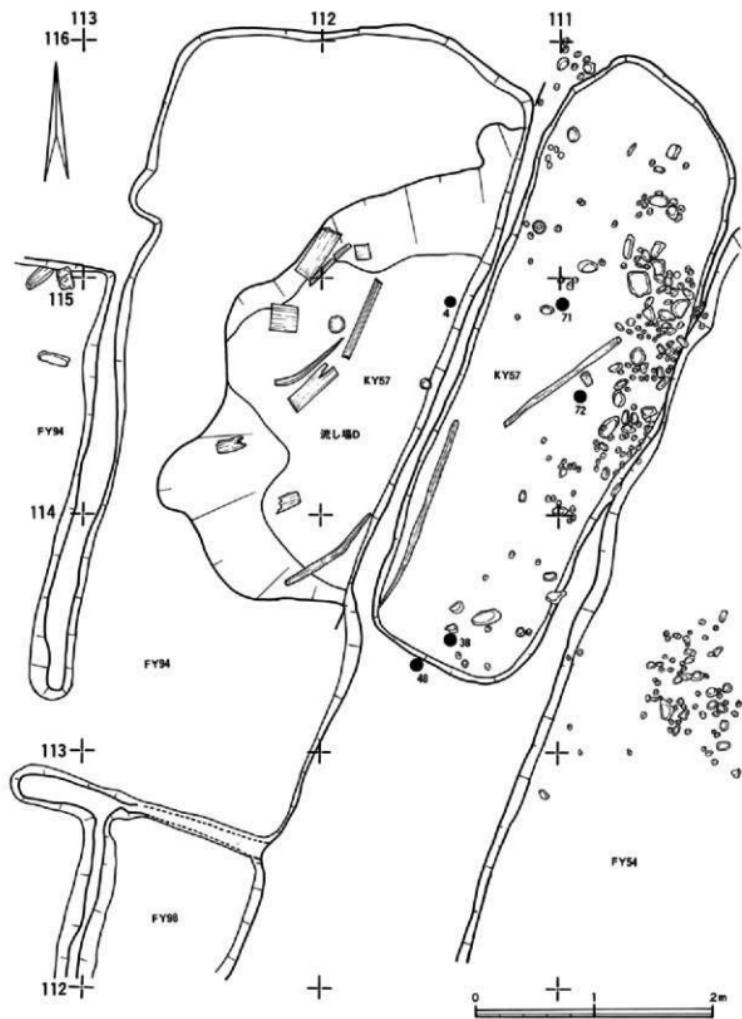
第45図 上浅川遺跡第3次調査D区土壌平面図(2)



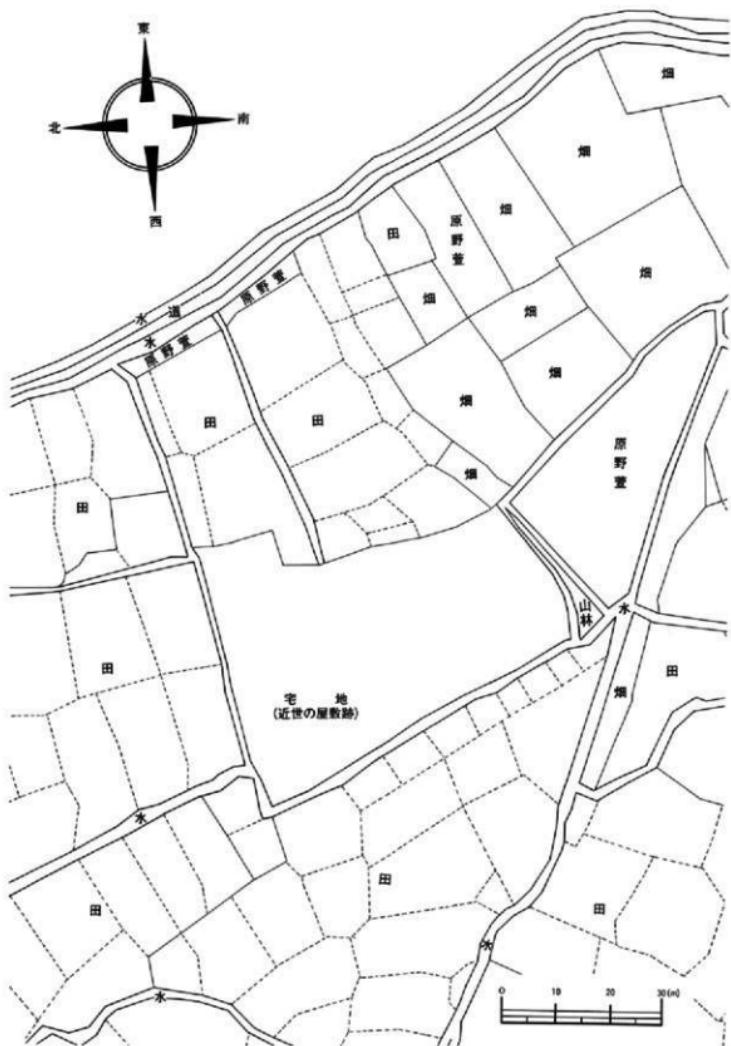
第46図 上浅川遺跡第3次調査D区土壤平面図(3)



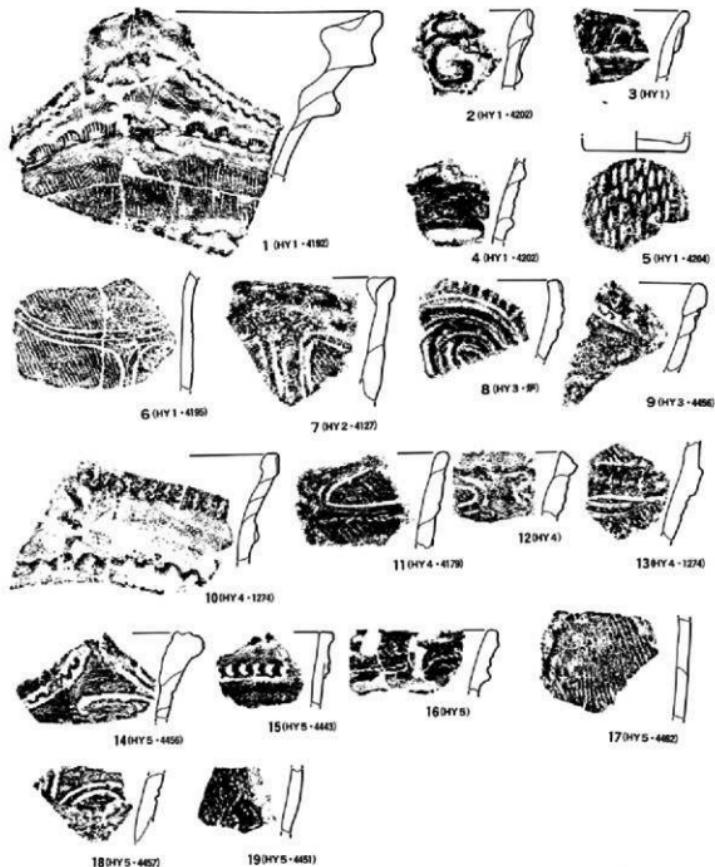
第47回 上浅川流域第3次調查調査し場A・B・C平面圖



第48図 上浅川遺跡第3次調査流し場D平面図



第49図 上浅川遺跡第3次調査近世屋敷跡平面図



0 2 4 6 8 10cm

第50図 上浅川遺跡第3次調査出土縄文土器拓影図(1)